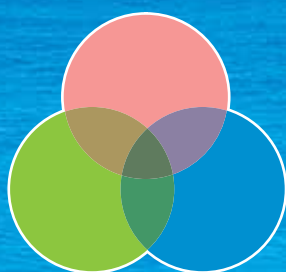




三遠南信 in サミット 2012 東三河

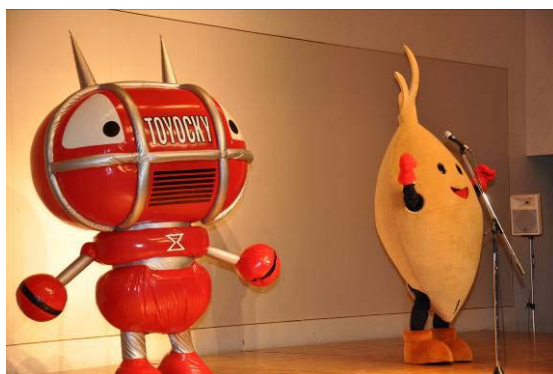
三遠南信の歩みと未来
～県境連携の先駆けとしての地域創造～

事業報告書



目 次

1	第20回 三遠南信サミット2012 in 東三河 プログラム	2
2	全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞	4
3	全体会 三遠南信の歩み	10
4	全体会 基調講演	12
5	「道」分科会 要旨	22
6	「技」分科会 要旨	40
7	「風土」分科会 要旨	58
8	「山・住」合同分科会 要旨	75
9	三遠南信地域住民セッション 要旨	92
10	報告会 要旨	102
11	交流会	108



1 第20回 三遠南信サミット2012 in 東三河 プログラム

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

日 時 平成24年10月2日(火)

会 場 ホテル日航豊橋(豊橋市藤沢町)

主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議(SENA)

共 催 三遠南信地域交流ネットワーク会議
三遠南信地域経済開発協議会
三遠南信地域整備連絡会議

後 援 国土交通省、経済産業省、農林水産省、愛知県、長野県、静岡県

参加者 600名

日 程

1 全体会(13:00~15:00)

あいさつ

・主催者あいさつ

三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木 康友

・開催地域代表あいさつ

三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋市長 佐原 光一

三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 豊橋商工会議所会頭 吉川 一弘

・来賓祝辞

愛知県知事 大村 秀章 氏

国土交通省中部地方整備局長 梅山 和成 氏

経済産業省中部経済産業局地域経済部長 大橋 良輔 氏

三遠南信の歩み

基調講演

テーマ :「これからの国土計画と三遠南信への期待」

講師 : 東京大学大学院工学系研究科教授 大西 隆 氏

2 分科会 (15:15 ~ 17:15)

「道」分科会

テーマ : 「県境連携を促進する地域基盤整備の状況と展望」

コーディネーター : 豊橋市長 佐原 光一

「技」分科会

テーマ : 「地域産業の持続的発展を目指した新産業創造と人材の育成」

コーディネーター : 株式会社 サイエンス・クリエイト 常務取締役 白坂 敬之介 氏

「風土」分科会

テーマ : 「ご当地グルメを通じた三遠南信地域ファンづくり」

コーディネーター : (財)阿智開発公社理事長 羽場 睦美 氏

「山・住」合同分科会

テーマ : 「中山間地域の生活環境向上に繋がる、人・ものの交流促進」

コーディネーター : 豊橋技術科学大学教授 大貝 彰 氏

3 報告会 (18:00 ~ 18:30)

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 豊橋市長 佐原 光一
- ・次回開催地域代表あいさつ : 飯田市長 牧野 光朗

4 交流会 (18:30 ~ 20:00)

5 その他

- ・三遠南信地域住民セッション (10:00 ~ 12:00)
- ・三遠南信地域経済開発協議会役員会 (10:30 ~ 12:40)
- ・三遠南信地域市町村議会議長協議会総会 (10:00 ~ 12:00)

2 全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

主催者あいさつ

三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長

浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。年に一度、こうして三遠南信の地域の皆様一堂に会しまして行われるサミット「三遠南信サミット2012 in 東三河」、今年も多くの関係者の皆様にご参集をいただきまして誠にありがとうございます。地方自治体関係の皆様、経済界の皆様、そして大学、そして市民団体の皆様、多くの皆様にお越しをいただきました。SENA会長として、心から厚く御礼を申し上げたいと思います。そしてまた、今日は国、県の関係の皆様始め、ご来賓として来ていただいております。特に、私の友人でもございます大村愛知県知事には、大変お忙しい中、お越しをいただきましたこと厚く御礼を申し上げたいと思います。

さて三遠南信地域、この1年間、色々と大きな変化がございました。特にインフラの整備は大きく進展をいたしました。まず何よりも新東名高速道路が静岡県内全線の開通をし、間もなく愛知県内も開通の運びとなるという、東西交通の新しい基幹ができたということでございます。また、懸案の三遠南信自動車道につきましても、三遠道路の鳳来峡IC(インターチェンジ)から、浜松いなさ北ICまでが供用開始となりまして、随分と自動車の交通量も増え、また

交流人口も増えているということで、本当にありがたいことだなと思います。

南信州の飯田市ではリニア中央新幹線の早期開通を目指して、新しい地域づくりが進んでいるということです。また、この東三河では、4月に東三河県庁がいよいよスタートし、新たな地域振興が始まっているということでございます。三遠南信サミットも回を重ねること20回を迎え、これまで交流から連携、そして融合へという歩みを進めてまいりました。平成20年3月に三遠南信地域連携ビジョンが承認され、10月には三遠南信地域連携ビジョン推進会議、通称「SENA」が設立をされまして、具体的な取り組みもスタートをしているところでございます。今年のテーマは、「三遠南信連携の歩みと未来」です。県境連携の先駆けとしての地域創造ということで、これまでの積み重ねというものをいま一度振り返りながら、そしてそれを発信しながら、さらに具体的な取り組みについて深堀をしていきたいと、皆様とご議論をしていきたいと思っております。今日の基調講演では、東京大学の西隆先生にお越しをいただき「新しい国土計画と三遠南信への期待」というテーマで、お話をいただくことになっております。西先生基調講演も踏まえまして、分科会では、より具体的なテーマについて、大いに皆さんで議論いただきたいと思っております。三遠南信地域の連携も、新しい時代に入りつつあるなと思っております。今、日本全体で地域主権、地方分権の流れが加速をしている時に、その中で都市間連携、あるいは広域連携というのが非常に注目をされています。私どもは以前より、一歩も二歩もそれを先んじて取り組みをしてまいりました。そういう意味で、この県境を越えた広域連携について、全国からの注目も集まっ

ていると思います。ぜひ、これを追い風にして、さらなる連携の強化に向けて皆様と力を合わせてまいりたいと思います。本日のサミットが実り多きものとなりますこと、そしてご臨席の皆様の今後のご健勝、ご活躍を心からご祈念を申し上げまして、ごあいさつにかえさせていただきます。本日は、誠にご参加ありがとうございました。よろしく申し上げます。

**三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
豊橋市長 佐原光一**



皆様、こんにちは。東三河 8 市町村を代表して私から歓迎と、そして皆様をお迎えてのサミットのお祝いのごあいさつをさせていただきますしたいと思います。先ほど、三遠南信サミットのこれまでの歴史、そして三遠南信サミットの目指す方向について、会長の浜松市長さんからお話を賜りましたので、私は開催地の代表として、この東三河地域のことを宣伝させていただこうと思っています。まずは、多くの皆様にこの東三河の地に足をお運びいただきました。心から歓迎申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、この東三河地域でございますが、この 1 年間で大きく変わった輸送ルートがございます。それは、国道 23 号名豊道路でございます。この 3 月、豊橋東バイパスの区間が細谷 IC まで、あと 1 区間延ばせば潮見バイパスまでつながるといところまで

延びました。そして今月 17 日には、これまで豊川のすぐ北側で止まっておりました道路が、東三河環状線の接点まで延びることになります。また、来年の 3 月、もしくは 4 月に、静岡県とつながる潮見バイパスと豊橋東バイパスがドッキングするという記念すべきチャンスがやっまいります。あわせて、豊橋港 IC から前芝 IC 間は、2 車線から 4 車線へと、本格的な幹線ルートとしての姿をあらわすことになります。

また、三河港におきましては、来年早々にもロシアのウラジオストクに向けての定期便が運航を開始します。このルートは、単に三河と、日本とウラジオストク、ロシアの東海岸を結ぶというものではございません。ウラジオストクの先にはシベリア鉄道があり、この鉄道を經由すれば海上ルートでスエズ運河を通るよりもはるかに早く、およそ半分の日数でヨーロッパの市場に物を運ぶことができるようになるわけでございます。私たちは、東三河を玄関とする世界への新しい道が開けるものと大いに期待し、このルートを大事に育てなければならぬと思っています。これに、新東名、三遠南信道がつながれば、この三遠南信地域は世界に向けて、すばらしいポテンシャルを持つ地域になっていくことと思っております。

元来、この地域はものづくりに始まり、優秀な農業生産を誇り、商業の物流ルートを持つといった、さまざまな面で特徴的な地域だと自負しております。今まで、私たちの地域の持つ特徴、実力を遺憾なく発揮するためのさまざまな施策、準備を進めてまいりました。これから、いよいよ三遠南信の融合に向けての動きが具体化してまいります。その一歩手前で、私も東三河が、広域連合に向けての動きもあわせて歩を進めていく。そういう足音が一步一步大きくなっている時でございます。基礎自治体で

ある市町村が自分の実力を遺憾なく発揮できる、そういう場面をしっかりと構築していきたいと思っております。本日、お集まりの市町村、県、国、経済界、そして多くのこの地域の人たちのお力をいただき、私たちの夢の実現に向けて頑張っていきたいと思っております。今日は、それぞれのご来賓の方々にお忙しい中、お集まりいただきました。ご来賓の皆様にも、私どものこの活動をしっかりと見守っていただき、ご支援いただければうれしく思います。最後に、本日ご参会の皆様のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。そして皆さんでこの三遠南信サミットをお楽しみいただき、実りの多い会にさせていただきたいと思っております。どうぞ皆様方、よろしく願いいたします。本日は、ありがとうございました。

**三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
豊橋商工会議所会頭 吉川一弘**



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました豊橋商工会議所の吉川でございます。開催地の商工会議所、商工会を代表いたしましてごあいさつをさせていただきます。本日は三遠南信地域の行政、そして議会並びに商工会議所、商工会の皆様、そして三遠南信地域をフィールドとする住民団体の皆様方には、遠方より、また大変お忙しい中、こうして東三河・豊橋へ足を運んでいただき、誠にありがとうございます。また、平素は三遠南信地域の振興、発

展に格段のご高配をいただいております、ご来賓の皆様におかれましても、ご多用中にもかかわらずご臨席を賜りまして誠にありがとうございます。

我が国の現在の状況でございますが、皆様方もご承知のとおり人口の減少、少子高齢化、経済のグローバル化に伴います国内産業の空洞化など、今までにないスピードで構造変化が起きています。こうした過去に経験したことの無い時代を迎えまして、地域の行政や産業界も、それぞれの新たな役割や地域の将来像を模索する必要に迫られているところでございます。特に東日本大震災以降、防災対策、エネルギー問題はもとより地域づくりそのものについて、あらゆる枠組みを見直さなければなりません。そこで、「広域連携」というキーワードが新たにクローズアップされておりますけれども、地域の諸課題を解決する手法といたしまして、広域的な視点が欠かせないものとなっていることは事実でございます。この三遠南信サミットも、回を重ねること20回ということでございます。これまでも、さまざまなテーマで皆様方に議論をさせていただいてここまで来たわけでございますが、三遠南信連携は我が国の県境連携、広域連携の先駆けでございます。今、新たな時代に向かって議論を始める時期にきております。私ども産業界といたしましても、足下の景気対策、中小企業対策を始めとして、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路などの整備促進、そして新産業創出やグローバル化への対応など、広域的な視点に立ち、行政や他の経済団体、大学等とも連携、協力をいたしまして、この三遠南信地域の活性化に取り組んでまいります。最後になりましたが、本日のサミットのご講演や分科会での議論が、ご参会の皆様方にとりまして実り多きものとなりますようにご祈念を申し上げまして、私からのごあいさつと

させていただきます。本日は、ありがとうございました。

愛知県知事 大村秀章 様



皆様、こんにちは。ご紹介いただきました愛知県知事の大村秀章でございます。

本日は、記念すべき第20回の三遠南信サミットが私どもの愛知県、この豊橋市におきまして盛大に開催されますこと、心からお祝いを申し上げます。この三遠南信地域連携ビジョン推進会議の鈴木会長、そして佐原副会長、吉川副会長始め、関係の皆様方に心から敬意と感謝を申し上げる次第でございます。この三遠南信地域は、古くから塩の道と呼ばれるルートがありまして、同じ一つの文化圏、経済圏として発展してきたわけでございます。現在では230万人の人口を擁する地域でもありますし、また、この地域の工業出荷額は全国第7位の埼玉県にも匹敵する10兆円ということございまして、日本の中においても大きな地位を占めているということでございます。

私は1年半、県政を担わせていただいておりますが、選挙の時にもお約束をさせていただいた、この東三河を愛知県の大きな発展の柱としてつくっていく、そしてこの三遠南信の連携を進めていくのだということをお願いしました。その大きな柱として東三河県庁を、この4月からスタートをさせました。1年検討してスタートさせたわけではありますが、担当の永田副知事も豊橋

に常駐をし、東三河振興の大きな柱として三遠南信の連携を進めていこうと、県境を越えた大きな発展のモデルにしていこうということで取り組んでおります。そういう中で、この三遠南信サミットが20回ということでもありますから、本当に心強い限りでございます。今日ご参集の皆様方のお力で、この三遠南信の連携が前に進んでいくように、心からご祈念、ご期待を申し上げます。

先ほどからお話がありました道路網も、どんどん整備されておまして、新東名も三ヶ日まではこの4月に、そして愛知県分も、あと2年で豊田東JCT(ジャンクション)まで整備をされるということでございます。三遠南信自動車道についても、今年3月に三ヶ日から鳳来峡まで整備されまして、さらにその延伸が待たれるわけでございます。大いにこの地域が連携をして、この東海地域はもとより、日本の大きな発展の核となるような、勢いのある地域になっていただくように心からご祈念申し上げます。

さて、私、夏はいつも奥三河に行って参るのでございますが、今年は旧富山村から豊根村から東栄町と、ずっと回ってきました。改めて思いましたのは、この地域は豊川・天竜川の文化圏ということでございます。奥三河にある花祭りも、この文化圏の大きな一つの文化の核でございます。そういう意味で、豊川水系、天竜川水系、そのお互いの交流があってこの地域が成り立っていると、こうした交流をさらに大事にしていきたいなというように思っております。

なお、私、国会議員の時代から、スズキ自動車の鈴木修会長には大変懇意にさせていただいておりますが、鈴木会長が私に会うといつも言うのは「大村君、大村君、浜松遠州を早く三河と一緒にしてくれ」と。それだけ経済的にも人の交流も含め、文化でも非常に連携の強いところでございますので、この三遠南信の連携、合体でもいい

と思いますけれども、大きな太い流れにしていただきたいと心からお願い申し上げます。今日の会議が実りの多いものになりますように心からご祈念申し上げ、ごあいさつといたします。本日は、おめでとうございます。

**国土交通省中部地方整備局局长
梅山和成 様**



皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介いただきました国土交通省中部地方整備局局長の梅山でございます。本日の三遠南信サミット2012 in東三河がご盛会な運び、心からお喜びを申し上げます。また、ご臨席の皆様には、日頃より国土交通省中部地方整備局の取り組むさまざまな施策へのご支援、ご協力を賜っておりますことを、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。三遠南信自動車道につきましては、本年3月4日に鳳来峡ICから、浜松いなさ北ICの約13キロメートルが開通いたしました。また、4月14日には接続する新東名高速道路が御殿場から三ヶ日まで開通し、人、物の交流が活発になるとともに時間短縮による観光の活性化や地域、医療、サービスの向上に貢献しているところです。また、計画が決まっていない最後の区間であります水窪北・佐久間間も、先週、計画段階評価に着手いたしました。中部地方には、高規格幹線道路網にまだまだ多くのミッシングリンクがあり、その解消が災害時の救助、ある

いは復旧の活動や活力ある国土づくりにおいて急務になっております。中でも三遠南信自動車道、新東名高速道路の整備は当圏域の連携強化、発展に大きく寄与するとともに、災害時には中部版「くしの歯作戦」において、広域的緊急輸送路として位置づけられる重要な路線でありますので、今後とも鋭意事業の進捗に努めてまいりたいと考えております。当地域は南海トラフを震源とする巨大地震が切迫していると言われており、その対応も待たなしの状況であります。中部地方整備局におきましては、昨年10月に国、自治体等の関係機関をはじめ、民間、学識経験者の方に幅広く集まっていただき、中部圏戦略会議を設立し、地震防災基本戦略の検討を進めているところです。その結果を踏まえ、関係者が連携、協力して災害に強い地域づくりを急ぐ必要があると考えています。本サミットは今回、20回目の節目となる記念サミットでもあり、当会議で一層の議論を深めていただき、その成果が三遠南信地域のますますの発展につながることを期待しております。最後になりましたが、ご臨席の皆様方のご健勝、ご活躍を心から祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は、どうもおめでとうございます。

**経済産業省中部経済産業局地域経済部長
大橋良輔 様**



ご紹介にあずかりました、中部経済産業局地域経済部長をしております大橋でございます。本日は、三遠南信サミットの節目となります第20回の開催、心よりお喜び申し上げます。平成5年より毎年開催されているサミット、平成20年の三遠南信地域連携ビジョン、こうした確固たる連携指針の策定を経まして現在に至っているというように理解をしております。この指針におきましては、「三遠南信250万流域都市の創造」というテーマを軸に五つの政策の基本方針、その中には当経済産業局も特に関係の深い「持続発展的な産業集積の形成」というものも、一つの柱として据えられているところでございます。地域、ひいては我が国の産業競争力強化には将来の雇用を支える成長分野への総合的、集中的な施策の実施というものが大変重要であります。そうした成長分野を明確にしながら産業集積の形成を図っていく、かつ、県境を越えて連携をしながら進めていくという、このサミットの方向性には大変共感をしている次第でございます。地域の発展を画策していく際には、行政区画単位で物事を考える傾向というのがございます。実際、経済産業局でも三遠南信地域においては中部経済産業局と関東経済産業局の二つにまたがっております。しかしながら、現場レベルでの経済活動の効率、効果といった点では地理的な要素、これが大きなファクターとなります。そうであるからこそ地域主権改革等、こうしたものの重要性というものは指摘されているところでございます。実際、この三遠南信地域としての県境を越えた取り組み、これはその地域の実態を踏まえた意義深い取り組みでございまして、我々も局間連携を図りながら応援させていただきたいというように日々考えているところでございます。

その前提で、中部経済産業局の取り組み

を、この場をおかりしてご紹介させていただきますと、現在、中部経済産業局では、中部地域八ヶ岳構造創出戦略というものを掲げてございます。中部地域の特性や強みを生かした成長戦略を進めているというところであります。この八ヶ岳構造と言いますのは、従来の特産産業に依存した産業構造から、多様な成長産業により市場を獲得していくという発想でございまして、多様な産業を八ヶ岳の峰々になぞらえているもので、次世代自動車、航空宇宙、ヘルスケアといったような産業分野が、その主たる峰として位置づけられているところでございます。これらの産業の発展は、我々の管轄する中部地域によってのみ成り立つというものではございません。各分野に関して、三遠南信地域の企業等との密接な連携というものが前提として成り立っているところでございます。その連携促進の方向につきましては、三遠南信地域連携ビジョンの中におきましても明らかにされておりますし、それ以外の幅広い取り組みについてもあわせまして今後のさらなる地域の発展につながることを期待しているところでございます。

最後になりますが、本サミットの開催に当たり、多大なご尽力をされております関係者の皆様方に心から敬意を表し、三遠南信地域のますますのご発展並びにご参加の皆様方のますますのご活躍を祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は、おめでとうございます。

3 全体会 三遠南信の歩み

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

「三遠南信の歩み」と題して、約 15 分のプレゼンテーションを行った。サミットへ至る道のり、サミットの歴史等、三遠南信地域がどのような歴史を積み重ねてきたのかを確認した。

三遠南信サミットへ至る道のり

年代	出来事
昭和 26 年	天竜・東三河地域が「国土総合開発法 (S25)」に基づく特定地域に指定
昭和 27 年	「天竜・東三河特定地域総合開発計画」の策定 【対象地域】 愛知県 (豊橋市、豊川市、南・北設楽郡、八名郡、宝飯郡、渥美郡) 静岡県 (浜松市、磐田市、磐田郡、浜名郡、引佐郡、周智郡) 長野県 (飯田市、諏訪市、岡谷市、諏訪郡、上・下伊那郡)
昭和 43 年 ~ 昭和 49 年	「三遠南信高速道路建設構想 (愛知・静岡・長野 3 県知事会議)」 「天竜奥三河国定公園」の指定に伴う開発計画のひとつとして、 「三遠南信高速道路建設構想」
昭和 44 年 1 月	「天竜奥三河国定公園」の指定 面積: 25,723ha
昭和 49 年	「天竜奥三河地域総合調査報告」 第 5 回愛知・静岡・長野県知事会議の合意に基づく調査
昭和 60 年	「三遠南信トライアングル構想 (中部経済連合会)」 「三遠南信トライアングル都市圏形成プロジェクト」 三遠南信自動車道の建設促進 三河港の整備促進とハイテクエリアの形成 浜松地域テクノポリスの建設促進
昭和 62 年 6 月	第 4 次全国総合開発計画閣議決定 「国土を縦貫し、横断する路線の連携を図り、あるいは国土の主軸から離れた地域の一体化を図る三遠南信自動車道」と記載。
平成 3 年 12 月	「三遠南信地域経済開発懇談会」の設立 浜松、飯田、豊橋の 3 商工会議所
平成 3 年 ~ [2 か年]	「三遠南信地域整備計画」 (国土庁、農林水産省、林野庁、通商産業省、建設省の共同)
平成 6 年 1 月	「三遠南信地域整備連絡会議」の発足
平成 6 年 2 月 10 日	「三遠南信サミット&シンポジウム '94 浜松」の開催

三遠南信サミットの歴史

回数	開催日	開催テーマ	開催場所
1	平成 6 年 2 月 10 日	三遠南信地域に今、21 世紀の風が吹く *「三遠南信サミット&シンポジウム」として開催	浜松市
2	平成 6 年 11 月 21 日	交流がつくる三遠南信の未来	豊橋市
3	平成 7 年 10 月 11 日	次代に向けて動く三遠南信 ～地域を変える交流の創出～	飯田市
4	平成 8 年 11 月 22 日	三遠南信地域の新たな連携と共生に向けて	浜松市
5	平成 9 年 11 月 17 日	三遠南信地域の新たな連携 ～循環型社会の構築と新たな活力の創造～	豊橋市
6	平成 10 年 10 月 8 日	三遠南信の新たなステージをめざして ～交流から参加と連携へ～	飯田市
7	平成 11 年 7 月 23 日	人が、物が、そして地域が動く *「三遠南信サミット」と名称変更	雄踏町
8	平成 12 年 7 月 26 日	絆、そして融合 ～三遠南信地域の明日をめざして～	豊橋市
9	平成 13 年 11 月 8 日	交流新世紀 ～三遠南信地域 ふるさとの共有～	飯田市
10	平成 14 年 7 月 24 日	快適空間・三遠南信 ～元気な観光・交流の新たな創造～	浜松市
11	平成 15 年 10 月 27 日	まるとミュージアム・三遠南信 ～魅力再発見からもてなしのまちづくりへ～	豊橋市
12	平成 16 年 11 月 25 日	新たな歴史の扉を拓く ～三遠南信からの発信～	飯田市
13	平成 17 年 11 月 4 日	三遠南信・新たな時代の幕開け ～夢街道いよいよ実現へ～	浜松市
14	平成 18 年 10 月 23 日	三遠南信・圏域の創生をめざして ～つながる 広がる 躍動する～	豊橋市
15	平成 19 年 11 月 14 日	将来(あす)への展望 ～今、三遠南信地域の新たな協創のとき～	飯田市
16	平成 21 年 2 月 10 日	三遠南信 250 万流域都市圏の創造に向けた挑戦	浜松市
17	平成 21 年 11 月 13 日	日本の県境連携モデルの構築 ～三遠南信地域連携ビジョンの実現に向けて～	豊橋市
18	平成 22 年 11 月 12 日	地域主権時代における県境地域連携モデルの推進 ～融合に向けた自発的な地域づくりの実践～	飯田市
19	平成 23 年 10 月 24 日	三遠南信流域都市圏構築への挑戦 ～融合、新たなステージへ～	浜松市
20	平成 24 年 10 月 2 日	第 20 回記念サミット 三遠南信の歩みと未来 ～県境連携の先駆けとしての地域創造～	豊橋市

東京大学大学院工学系研究科教授 大西 隆 様



ご紹介をいただきました東京大学の
大西と申します。今日、三遠南信サミット20回
目の記念の会ということで、お招きをいた
だきましてありがとうございます。実は、
この三遠南信サミットには何度かお邪魔を
しています。愛知大学の佐藤学長、あるい
は戸田先生に誘われるままに何度かこれま
でもお邪魔しまして、三遠南信で行われて
いる広域連携については強い関心を持って
います。同時に、期待もしています。

私は国土計画や地域計画が専門でありま
す。その中でこの広域連携ということが、
消極的な意味では、人口が減っていく中で
従来の社会的な活動というのがだんだん衰
えてくるので、連携をして、自分のところ
の人が減る分を補おうという、そういう考
えが当然出てくるわけです。積極的には、
交通が発達してきたわけですから、今まで
遠かった地域が近くなるということで、よ
り緊密な連携ができる、その連携を生かし
て新たな発展を考えていこうというアイデ
アが全国に存在しているということです。

ただ一方で、この20年ぐらい、三遠南信
でこうして発達、育ってきた動きが、必ず
しも全国で同じように発達してきているわ

けではないのです。いつまでも三遠南信が
光るといいますか、広域連携のユニークな
試みの例として扱われる、という時代が今
でも続いています。最近の国土計画という
と、国土形成計画ということになるわけ
ですが、そこでも私は、三遠南信のような例
を増やしていくことが必要だということ
を何度も強調してきたわけでありませ
んが、ついていく例が増えてこない。その
背景には市町村合併が行われたりして、
広域の連携ということについて、それは
イコール市町村を合併することなのか、
あるいは昔の広域市町村圏のように一部
の事務について連携するということなの
か、そのあたりが必ずしも明確でないとい
うことも背景にあるかもしれません。し
かし、達観的に言えば、すべての市町村
が全部一つになるということはある得
ないわけでありませぬ。いずれにしても
、この広域で連携するというのがさま
ざまな格好で必要になると。そのため
の制度が発達してきて、広域連合等色
々な制度が提案されていて、それを色
々な格好で使ってきているところも出
てきているわけでありませぬ。しかし
地域の重層的な連携をベースにして、
県境を越えてこうした広域の活動を志
向しているという点では、全国で他に
例がないということでありませぬ。私
は色々な審議会や研究テーマで「三遠
南信」と名前がつけば全部二重丸、ぜ
ひこういう調査、研究を進めるべきだ
ということであるながら推進をしてい
るわけでありませぬ。今日は20回目
という、そういう機会にお招きをいた
だきましたので、改めてこの三遠南信
の意義というものを考えて、お話しさ
せていただきたいと思います。日本の
国土の中で、境界のあり方をめぐって
色々な議論が行われています。そう
した問題を少し整理しな

がら、三遠南信について考えて、皆さんの分科会での議論に多少でも役に立てばと思います。

私は、大学で都市計画、あるいは国土計画を研究して教えたりしていたわけですが、去年の10月に日本学術会議という組織の会長に選出されました。日本には研究者、学者が統計では84万人いるということですが、その代表組織ということで210人の学術会議の会員というのがあるわけです。なぜ私のような者が選ばれたかということ、学術会議に対して必ずしも肯定的な評価ばかりではないと、もう少ししっかりしろという意見が強かったわけです。特に、学術会議が戦後やってきた仕事の、大きなものの一つが原子力の平和利用の推進です。これを戦後間もなくから始めて、大学に原子力の研究所をつくっていったのを皮切りに、原子力基本法をつくるきっかけや、原子力発電につながる原子力の平和利用を、推進してきたことになります。それは、軍事的な利用と平和的な利用というものに大きく分けて、そこに線を引いて、日本も敗戦国ではあるけれども平和利用については進めていかなければいけないということで、まだためらう人が多かった中を推進してきたわけであります。ところが、昨年、福島の第一原子力発電所の事故は、その平和利用の中に安全が確保されている利用の仕方と、そうではない利用のされ方というものがある存在している。安全性というのが平和利用の中で十分だったのかということが問われたわけであります。皆さんも、この地域には浜岡の原発があるので、そういう話については非常に敏感に考えられていると思いますが、平和利用で皆が納得してきたものが、そうはいかないということであります。

したがって、その平和利用推進の先鞭をつけた学術会議に、平和利用の中で安全のあり方というものをどう考えていくのか、

そのことが問われているのを始めとして、色々な場面で科学者が正しくその科学を、社会で利用してもらうようにしているのかどうかという、科学者の社会的責任というものが問われているということであります。

それで、どちらかというところ、純粋な科学、工学を含めて、その研究一辺倒という分野ではなくて、社会との触れ合いが大きな分野の者が選ばれたのではないかな、と自分では考えています。もちろん科学の推進ということは重要なのですが、一方で、そのことの持つ社会的な意味というものを考えて、科学者の社会的責任というものを果たしていく必要があるということも重視しながら、会長の仕事を進めようと考えているわけです。

去年から約1年間で日本学術会議会長として取り組んでいる課題を並べてみました。東日本大震災、これは私の専門領域としても非常に重要であります。それから、この地域も関係がある南海トラフ。東日本大震災を上回る規模の災害になる恐れがあり、しかも地震の発生から津波の到達までが極めて短いという対策の難しい問題です。それから、東京で大きな災害があった場合に首都機能は大丈夫なのかということが改めて問われています。そういうことを少し包み込んで、現在の野田首相が、フロンティア分科会というものをつくりたいということ去年の暮れにおっしゃって、私がフロンティア分科会の座長になりました。この7月に「共創の国」というタイトルで分科会の提言をまとめたわけですが、その「共創の国」という言葉が国家戦略会議のまとめた日本再生戦略のタイトルに使われたということで、フロンティア分科会で現時点における国のあり方を考える、そういうきっかけが与えられたということであります。

それから、新型インフルエンザ。新型インフルエンザ対策特別措置法という法律が

できまして、来年施行されます。これは、新型インフルエンザが流行した場合に、ワクチンを誰から打ったらいいのか、一遍に国民全体の分はできないので、徐々にできてくるワクチンを誰から打つのか。きちんと社会が安定して運営されるためにどういう機能が守られなければいけないのかと、優先順位をどうつけたらいいのかという難題があるわけです。また高レベル放射性廃棄物に関する問題もテーマとなりました。現在の原子力発電の廃棄物のスキームは、最終的にはプルトニウムを取り出して高濃度の廃棄物というのが最後に残って、それを1メートル程度のガラスの棒に固めて、地下300メートルより深い地層の中に埋めて、千年、あるいは1万年ぐらい、その影響がなくなるまで安定的に保管すると、そういうスキームになっているのです。何千年あるいは何万年、安定的に置ける場所を探そうということで法律ができたわけですが、場所の調査すら受け入れるところがないということで、この地層処分という方式が事実上破綻したわけです。我々は政府から、どのように住民に説得したら受け入れてもらえるか、説得の仕方について考えてくださいという依頼を受けたわけです。ですが、去年の原発の事故を契機として、その問いかけそのものがおかしいのではないかと。日本は、トラフのさまざまな継ぎ目みたいなのところに存在しているわけですから、この高レベル放射性廃棄物の絶対的安全性保管場所について確証は得られていない。そういう説得をすればいいということではなくて、その安全な場所を探すには、数十年、あるいは数百年かかるかもしれない。その間、ガラス固化体に換算すると2万数千本の廃棄物が既に存在して、原子力発電所の棚みたいなのところに置かれているということが映像で分かったわけです。したがって、暫定保管という、一定の期間、

よりよい処理処分の仕方を見つけるための研究と並行しながら、それを置いていこうという方法を提案したわけです。各地が一定の期間それを引き受けるという、責任を分有するというのも必要ではないかというような内容について提起したわけです。

科学技術が良いようにも使えるし、悪いようにも使えるという、デュアルユースの問題も取り扱いました。このテーマは古くて新しい問題ですが、去年、鳥インフルエンザが、ヒト ヒト感染型のウイルスに変異する、そのメカニズムが日本の研究者を含めて世界の2カ所で解き明かされました。その論文を研究者が発表しようとしたら、アメリカ政府から「待った」がかかったわけです。つまり、その論文が明らかになると、その論文を読んで変異を人工的に起こして悪用する人が出てくるのではないかということで、そのデュアルユース問題というのがクローズアップされました。科学の成果を悪用する人が出てくると。それに対して、科学者はどういう倫理を持ったらいいのか、あるいは科学者の倫理だけで済まなければ、国としてどういう制度の枠組みをつくるべきなのかということが問われて、今までは少し限定された専門分野で生きてきたわけでありましたが、科学という領域で色々なテーマが存在しているということを知った1年でありました。

学会会議としては、特に社会と関係のある深いテーマについて積極的に取り上げていくと。学会会議は、自分たちでテーマを見つけて研究調査するわけですが、同時に外から依頼をされてやるということもしています。主に、政府の依頼によってテーマをもらってやるわけですが、三遠南信でこういうことを研究してもらえないかということがあれば、学会会議は巨大なシンクタンクです。日本のトップの科学者が集まっています、しかもただで調査研究を行うこと

ができるということですので、ご活用いただければと思います。

少し話を本題に戻しますが、先ほど少し触れましたフロンティア分科会の議論に沿って三遠南信を含めた日本が置かれている時代の状況について触れてみたいと思います。フロンティア分科会というのは国家戦略会議の分科会です。国家戦略会議というのは、日本再生戦略をつくろうと設立されたわけでありますが、これは当面の日本のかじ取りの方向を考えるというのがその役割です。フロンティア分科会も似たような時に、議論を始めたわけでありますが、その住み分けをするために少し工夫をしました。長期的なビジョンを考えようということで、2050年、今から38年先を目標にして、その時の日本というのはどうあるべきかということをもまず議論して、そのどうあるべきか、ということから逆算して、ゴールに到達するために今から何をしていくべきかという、いわゆるバックキャストという方法で議論を進めようということを含意したわけです。これは総理大臣の長期ビジョンなので、長期ビジョンというものを総理大臣はつくったことがあるのかなと調べてみました。なかなか最近ではないわけです。一つの類似例は、1979年、80年のころですが、大平総理の時「田園都市国家」というテーマが長期ビジョンとして出されました。その前は日本列島改造論です。

いずれにしても随分昔の話になるのですが、なぜそういう時期から余りこのビジョンというのが語られなかったのかと言うと、語るほど長く総理大臣が在職していなかったというのが偽らざるところです。戦後の総理大臣の在職年数についてグラフにしたものがありますが、最近のところを見ると、大体500日に満たない1年前後で交代していると。最近では、小泉さんが何といっても長くて2,000日に迫ったわけです。そ

の前も短い時期があって、その前の中曽根さんとの間もそう長くないのですが、平均すると2年ぐらいなのです。極端に短い人もいますけれども2年ぐらいの在籍年数で、それがまた半分になったということで、目まぐるしくリーダーが変わるということで、なかなかリーダーがビジョンを持って政策を推進していくことができていなかったということです。私が先ほど例で挙げた田中さん、大平さんというのは、中曽根さんの前の時期になります。ですから、こうして見ると、しばらくこうしたビジョンを持たなかったなど。2050年を一つの目標にして、そこに至る道筋ということで政策を考えようというわけでありますが、では2050年に至るまで、これからの日本が経験しなければならぬ大きな変化というのは何かということで、五つの大きな変化があると、この変化は必然的にやってくる変化であって、これを踏まえつつ2050年のあるべき姿というものを描いていく必要があると。

第1の変化は、人口であります。これは、当たり前のようにされていますけれども、本気で政策の中にこれからの人口の変化を折り込んでいるのかということ、疑問の点もあります。日本の総人口をグラフで見ると、現代を真ん中として線対称のように、増えてきた人口が急速に減っていくということが描かれています。したがって、まだまだ日本の人口は本格的にこれから減っていくということになります。それ以上に大きな変化が想定されるのが老年従属人口指数であります。老年人口（65歳以上の人口）を生産年齢人口（15歳から64歳の人口）で割った値です。働く年齢の人たちと、それからリタイアした人との比率がどういう比率かということを表しています。この数字は、明治から割と安定してきました。1970年ぐらいまで0.09程度、大体世の中に15歳から64歳の人が11人いると、その社会に1

人65歳以上の人がいると、そういうような関係であったというわけです。ところが1970年ぐらいから、急速に増加している最中で、0.85ぐらいまで今世紀の後半にはいくと。つまり、15歳から64歳の人10人いると、その社会に65歳以上の高齢者が8.5人いるということです。もちろん、その時期に65歳以上の人を高齢者と呼ばなくなっている可能性もあります。そのように呼んでいたのでは、政策が見つからないということでもあります。つまり、高齢者は何がしかの介護が要ると、ケアが要る人たちだということ考えると、10人と8.5人ですから、8.5人の人にマンツーマンで誰かがつければ、社会で介護以外の仕事をする人は10人の中で1.5人しかいなくなってしまうという極端な社会が来ようとしている、毎年そういう社会に向かって進んでいるということです。だから先般、消費税を上げることを決めて、あわせて税と社会保障の一体改革ということをやろうということですが、恒久的なものにはなり得ないということです。この社会保障は毎年のように考え方、あるいは提供の方式が変わっていかざるを得ないということでもあります。

二つ目、これはなかなか今の直近の日本ではシビアなテーマですが、アジア化の変化ということです。1950年と2050年の世界の都市の人口を円グラフにおさめたものが資料にあります。都市と言われるところに住んでいる人が、どの大陸にいるのかということでもあります。第二次大戦直後の1950年には5割以上が北米、あるいはヨーロッパに住んでいたと。ところが100年たって2050年には5割以上がアジア、なかんずくインドと中国の都市に住むということです。アメリカも台頭してくる。ヨーロッパ、北米のシェアは十数%に下がるのです。都市が色々な文明の中心、場合によっては政治の中心だということ考えれば、中心が大

きくヨーロッパ、アメリカからアジアに移ってくるということです。さらに、この先はアフリカも台頭してくるかもしれないというように変わっていくわけです。地政学的変化と言ってもいいかもしれません。そういう中に、まさに日本がいるわけです。従来であれば、このアジアの中心は日本であったわけです。しかし、だんだん日本ではなくなるわけです。人口が全てではありませんけれども、アジアの中で人口に規定される産業活動、社会活動の主要な中心というのは中国、あるいはインドになると、日本はその中で人口は既に減少し始めているということでもあります。

私は、この議論をしていて、日本の人口が少なくとも2050年には3,000万人ぐらい減るという数字はなかなか動かさないです。私は団塊の世代になります。同じ年に生まれた人が270万おられます。現在、新たに生まれてくる子供は年間大体百五、六万です。我々がすぐ消えてなくなるわけではありませんけれども、そういう大きな固まりがだんだんフェードアウトしていくのに対して、新しく登場してくるのは半分に満たないわけです。この関係は、簡単には変わりません。したがって、人口が激減していく時代は避けられないのです。ただヨーロッパ、特に北欧などを見ると、経済的には1人当たりGDPが豊かでいい生活をしていると、福祉も発達して暮らしやすそうだと。北欧にあこがれる人も多いと思うのです。人口を見れば、スウェーデンが一番大きくて800万から900万です。あとは500万程度の人口です。だから、人口の規模と暮らしぶりとは関係ないわけです。これは当たり前かもしれません。だから、日本も色々な時代を経てきましたけれども、これから先も仮に人口が減っても豊かな暮らしを維持できるという道はあると思うのです。それは大事なことだと思うのですが、

ただ問題もあります。例えば、軍事費、それから過去の借金の返済、これは人口によって借金が減るといえることではないです。人口が減ったから、あわせて借金が減っていくということはありません。軍事費は相対的なものですから、脅威が増せばそれなりの備えが必要になると、しかし、その時に国全体が縮小していれば十分な備えができないということになります。

要するに1人当たりで計って差し支えないものと、1人当たりで計っていいかどうか大いに議論の余地があるものがあるわけです。だから、日本が向かっている人口減少の時代というのは多面的な面が含まれていて、特にアジアについては良い面、つまりアジアの市場を日本が活用できるという良い面、同じように経済発展をしていく仲間が増えるという肯定すべき面と、これが良いほうに行かなくて脅威が増すというように考えれば、人口が小さくなっていった大丈夫なのかという議論につながっていくわけでありまして。したがって、アジア化の変化というものは二面を持ち、しかもアジアが世界の中で重要な役割を担うということは、誰か他の人がアジアの問題を解決してくれるわけではないということなんです。我々が解決しなければいけない。その中で、留学生が減ったり、会社の中で若い女性はぜひ行きたいというのに、若い男性は余り海外勤務に志願しないということが、内向き志向というのが出てきているのではないかと心配な出来事があるということでもあります。

三つ目には、低炭素化という問題があると。これは震災の前から続いていたことで、引き続き大きなテーマであります。四つ目は、三遠南信にも大いに関係があることであります。ガバナンスが変化してきていると、これは日本の特色であります。一言で言えば、誰かに依頼するガバナンスから

参加型の合意形成、こういう仕組みが発達してきているというのが大きなポイントではないかと思っています。これは一旦、権利が与えられれば、みんなそれを重要視するというわけでありまして、少数のエリートが哲人政治を行うというタイプの統治の仕方から、みんなが参加して合意を形成していくというタイプの統治の仕方になってきて、このことは地方自治の重要性が増すということになるわけですし、さらにそれを広域行政という格好で発展させようという議論も三遠南信のように出てくると。国際的にも誰かが世界の警察として統治、世界の秩序を守るといえることではなくて、それぞれの国が重層的な関係を持って、秩序を維持していくということが重要になっていくということでもあります。

最後に、災害・エネルギー分野でも大きな変化が起こってくるということでもあります。特に、日本は自然災害と切っても切れない国だということに改めて思い知らされたので、防災から減災という考え方に転換していくことが必要だという議論が強くなっているということでもあります。さらに、エネルギーのあり方にも、この問題が影響を与えているということではないかと。

こうした五つの分野について重要な変化がこれから起こっていくと、この五つの変化によって国そのものが変化していくということ、それを踏まえて四つの領域を設定して、フロンティア分科会の議論を行ったということ。「繁栄」の経済と、それから「幸福」という言葉をキーワードに社会、それから「叡智」と、最後に「平和」の国際関係という四つの分野で、この五つの変化というものをどう受けとめたいのかということ議論したわけでありまして。その最後のまとめた言葉が、先ほど申し上げた「共創の国」というスローガンでありまして、その心は、人口が減っていく中で

日本人みんなが、これはみんなというのは先ほどの64歳で人口を区切るのではなくて、その上の人たちも含めてみんながそれぞれ役割を果たすと、介護をされる側ではなくて能動的に何かをする側に立つという「共」ということが「共創」の「共」であります。それから「創」というのは、やはり資源のない国なので、頭を使って産業を興し、アイデアをうまく生かして国を富ませていくということが必要だと、創造力、創造性ということが極めて重要だということで「共創の国」という言葉をつくったわけでありませぬ。こういうスローガンのもとで、2050年までの社会を考えていくことが必要ではないかと。多くの人が今言ったような変化のもとで共創、みんなが参加すると、かつ創造力ということが日本にとっては大事だということ、多くの人が考えているのではないかと確認できたということでございます。

そこで、もう一つ、そういう議論とあわせて、この東日本大震災と復興ということが日本のこれからのあり方に影響を与えているということ、恐らくこれから先、振り返って、近年で最も大きな出来事という3.11を挙げる日本人が多いだらうと思います。国際的にも、日本と言えば3.11というように見られているわけでありませぬ。それは、大きな災害に遭ったということに対する同情だけではなくて、これからどう立ち直っていくのか、復興していくのかということ、みんなが注目して見ているということでもあります。まだ、その道は半ばなので、どう復興していくのか極めて重要な局面であります、3.11そのものは、ご承知のように地震があって津波が来て、それ自体も大きな被害を生みましたが、原子力発電所が壊れて放射能汚染という三重の災害が重なったということ、特に、この地震そのものの被害というのは、

そう大きくはなかったということでありませぬから、津波と放射能汚染が大きな災害であったということ、それぞれに対して対策が要するということになります。

資料に東日本大震災の被害が概要としてありますが、まず地震プラス津波ということで考えると、三陸は津波常襲地帯だったということ、資料には明治からしか書いてありませんが、この前に大きな津波もあったと。それで、どういうことが行われてきたのという対策を調べていくと、明治の津波、これは1896年のことですが、この後、対策をやっていませぬ。何かと言えば、高台移転です。ところが、この時は国の力もなかったんで個人に委ねられていたんで、個人、あるいは仲間で高台を見つけて移ると。昭和の津波の時、これは1933年でありませぬ。この時は、組織的な対策が行われました。国もお金を出して復興事業をやったんです。何が復興事業のポイントだったかと言うと、高台移転です。当時は津波を防波堤、防潮堤の堤防で防ぐということは、まだ考えができなかったわけ、そういう力を人間が持っているということは、政策に組み込まれていませぬでした。

したがって、もっぱら高台に移るということだったわけ、ごく例外的に防潮堤をつくる場所が出てきたと、例えば太郎というのは有名な場所、この地域で明治以降に起こった三つ目の津波が、チリ地震津波、この津波は1960年に起こって、150人弱の方が亡くなったわけでありませぬが、この後、行われたことはそれまでとは違うんです。高台移転ではなくて防波堤、防潮堤をつくる、そういう事業が行われました。土木技術がある程度発達してきた、かつ国力が増して、そうした土木工事をやる力が出てきたということが背景にあると思うんですが、主要な場所に防波堤、防潮堤をつくって守るということが、この1960

年から始まったのです。その前に防波堤、防潮堤の例はありましたけれども、組織的に行われたのは1960年のチリ津波です。このことが、防災という言葉が強めていったのです。防災というのは、災害を防ぐということであり、どうやったら災害を防げるか。防波堤、防潮堤をつくって津波という災害については波を防ぐということが、あえて言えばチリ津波を契機に広がっていったわけです。ある場所では、高台に移転しました。例えば1933年の後、昭和8年の後に高台に移転したと。ずっと高台で暮らしていたわけですが、防潮堤が海岸沿いにできた。防潮堤をつくるというのは大工事であり、それができたので、意識の上でその裏側も安全だということになったわけです。それで、今までは防潮堤がつけられた裏側というのは低地ですから、そこを農地にして新たに住み始めたということで、防潮堤がすぐ裏の土地利用を変えてしまったわけです。そういう例はたくさんあります。そういう状態で今回の津波を迎えて、その防潮堤が壊れたり乗り越えられたりして、すぐ裏側のところが大きな被害があった。今回は、これまでの津波の高さに比べて非常に高かった。高台でも安全でなかった場所がありますが、低いところはなおさら被害を受けたということであり、あえて言えば、防災という過信が生まれたわけです。それがこうした歴史をたどっていくと、ある程度国力が増して土木技術が発達した時期に同時に自信が生まれ、過信につながったということでもあります。そこで私は、東日本大震災の復興の一番重要な観点というのは減災、災害を減らす、これを防災のかわりに使っていくということではないかと思っています。防災というのは災害を防ぐわけですから、これができるれば災害は起こらないわけです。普通の生活が維持できると。減災というのは

災害を減らすわけ、被害を減らすのです。けれども、被害は起こるということでもあります。逆に言えば自然災害、英語で言えばハザードと言って自然現象です。自然現象が無人のところで起こったら、災害は起こらないわけです。そのハザードを少し弱めることができて、完全に押さえ込むことはできないので被害が出るという、ただその被害が出た場合も人的被害、死亡者はゼロにしようと、物的被害はしょうがないということで、物的被害については何十年間、あるいは何百年に一回は覚悟するけれども人的被害はゼロにしようと、これが減災の考え方であり、単純に災害を減らす、被害を減らすのではなくて人的被害はゼロにすると、物的被害については覚悟する。具体的にどういうことをやろうとしているのかということ、人的被害をゼロにするためには、人が住んでいる住宅については、安全な場所をつくるということ、安全な場所というのは津波が来ても届かない高さ、ここに住宅は置こうと。高さの取り方は色々あります。高台もありますし、人工デッキ、地盤の上につくるのもありますし、強固な鉄筋コンクリートのビルの上の階に人が住むというやり方もあります。いずれにしても、高さを稼ぐということ、プラス、それでもそれを超える、想定を超える被害が起こる可能性がある、避難をきちんとやろうということが重要なポイントで、この高台、高さを確保するというのと避難するというのが組み合わさるということでもあります。

しかし、防波堤、防潮堤は必要ないかと言えば、防波堤、防潮堤が壊れないしっかりしたものであれば津波を抑えることはできるのです。だから、後ろに与える影響が小さくて済むということなので、ある高さの津波までは防ぐ防波堤、防潮堤は必要だということで減災は防災施設、それから高

台居住、避難、この三つを組み合わせる、常にこの三つを考えると、一つに頼らないということがポイントになるというわけです。だから、東北の復興には時間がかかっているのです。地震の復興であれば、同じ場所に再建できるわけですが、この津波の、しかも減災型の復興は安全を確保するために三つがいるということなので、合意形成にも時間がかかるといえることでもあります。しかし、どうして減災を東北で考えているかと言えば、何度も津波に襲われたのでまた襲われると、その時の津波にきちんと備えることができるのかということが重要だから、時間をかけて万全な体制をとろうとしているわけですが、実は次の津波災害はご承知のように南海トラフ型だという指摘があるわけです。もともと2005年の時にインド洋の20万人が亡くなったという津波の後、日本で津波対策が行われた時に一番心配されていたのは東海、東南海、南海沖地震の連動で大きな津波が来るというケースで、もっぱらそこに着目して2番目に危ないとされていたのが、三陸であったわけです。したがって、一番危ないと言われていたところがまだ来ていない、この前、相当な規模の方が亡くなるおそれがあるという被害予測が出たわけですが、この南海トラフの巨大地震に事前にどういう備えをしていくのかということが問われています。内閣改造になりましたけれども、前の防災担当大臣に依頼されて被害想定は8月末に出ました。しかし、その被害をどうやって減らすのかということについて考えていかなければいけないという依頼を受けて、急遽、一月くらいでまとめたものが資料に「提言」と書いてあるものであります。これは、今から適用していこうとしているものでありますけれども、事前対策をきちんとやると。ただ、ご承知のように東北はすべて洗い流されて流出してしまった

ので、多くの場所ではゼロから再建するわけです。したがって、新しく家を建てる時にどこに建てるかということで高台という選択肢も選べるわけではありますが、普通に生活を送っておられる方に高台に行ってくれと言うのはなかなか大変なことではありません。したがって、やや中長期で建て替え時期に、それも行きやすいように例えば小・中学校とか公共施設、こういうものの建て替え時期に安全な場所に移して、その周りに新たなコミュニティをつくっていくというような戦略で、少し時間をかけて安全をだんだん高めていく減災の戦略というのが必要ではないかと。しかし、いつ来るかわからない、即戦力になるのは避難であります。したがって、当面、予報、警報、避難という、地震が起こった時に津波が起こるということをいち早く察知して逃げるといことを万全に行っていくと、これを徹底しつつ少し時間のかかる高台移転、あるいは防潮堤、防波堤の建設というものもあわせてやっていくと。したがって、短期から中長期を含めて、防災・減災性を高めていくというやり方が必要ではないかということをお我々は提案をして、モデル的な地域から実施していこうと考えているわけがあります。幾つか、それについての説明があります。もう一つ、首都機能のバックアップというものも、この津波に関係して出てきているものであります。これは、いざという時に首都機能というのは大丈夫なのかということで、恒久的な首都機能移転を、バックアップをとっておかなくて大丈夫なのか、特に災害対策の指示ができるような中枢の機能というのがきちんと維持されていくと、いわば政府のBCP(事業継続計画)を考えていく必要があるのではないかと。このバックアップ機能というものを持

っていく必要があるということです。あるいは、場合によってはバックアップ機能というのは首都だけではなくて、それぞれの地域が被害に遭った時に、災害対策のヘッドクォーターとしても使えるのではないかとということで、地域的な司令塔、災害時の司令塔と全国的な司令塔、これを兼ねるような機能を全国何カ所かつくっていく必要があるのではないかとという提案をしたわけであります。

最後に、今まで申し上げてきたことを踏まえて、道州制、さらに広域的な地域の活動というところに焦点を当てたいと思います。この三遠南信の議論も、一つには道州制という新たな枠組みを活かして地域の発展を考えていこうという論点から始まったことだと思えます。ただ、道州制そのものについても肯定的な議論、否定的な議論両方あります。むしろ、そういう中で重要なのは広域的なガバナンス、あるいは広域的な活動の内実を高めていく、いわば広域の中で連携が深まっていく、道州制というのができるも道州の中がばらばらでは意味がないということであります。その中身をつくっていく議論、あるいは活動というのが各地で行われて、それが積み重なって初めて上の政府をどうするかというのが、より現実的なテーマとして浮かんでくるのではないかとこのように考えているわけであります。したがって、そういう議論を抜きに道州制について国民にどう思うかということをお聞きすると、余り賛成する人はいないというのが道州制議論の現実であります。

そこで、これから三遠南信を含めて広域的な地域の活動というものをどのように高めていけるのか。私は冒頭で、消極的な意味では人口が減っていくので、少し考える範囲を広くしないと活性化できない、そういう時代になっていくというように申し上げました。

もう一つは、積極的な意味で交通条件。三遠南信の場合は、もともとの三遠南信道というのがまだできていませんから、肝心の広域を結ぶ幹線というのは課題として残っているわけであります。迂回路を考えたりすれば交通がそれぞれの地域で整ってきているということ、この時間・距離が短縮されるということは、人々が出会いやすくなる、あるいは一緒に議論しやすくなってきたということであります。もちろん、情報通信の発達ということもあります。積極的な意味では、そういう条件を使って広域が一つの仲間として議論して活動できるという、そういうチャンスというのが増えてきているのではないかと思います。特に私が重視したいと思うのは若い世代、ただでさえ減ってきている若い世代が集まって大きな力をつくっていく、そういう若い世代に着目した広域連携というものが重要なのではないかとこのように思っています。

この地域には16の大学があるということであります。その16の大学がフォーラムをつくって、連携していこうという動きが出ているということであります。これなどは、まさに人づくりというところで重要な活動になるのではないかとこのように感じます。敢えて言えば、三遠南信が一つのモデルになって、全国で県境を越えて連携をしていく、そうした活動が増えていくというのが、まさに「共創の国」のともにつくっていく、その「共」というところの条件を形成していくことにつながっていくのではないかとこのように思っています。これから行われる各分科会で、この「共に」ということを具体的なものにしていく議論が深まっていくということ、私としては大いに期待したいということで、引き続き三遠南信の応援団でありたいと思っております。時間も参りましたので私の話は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

5 「道」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

「道」分科会では、「県境連携を促進する地域基盤整備の状況と展望」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋市	市長	佐原 光一
報告者	国土交通省浜松河川国道事務所	所長	天野 邦彦
	愛知県三河港務所	所長	浅野 秀磨
議会	浜松市議会	議長	鈴木 浩太郎
	豊橋市議会	議長	近田 明久
	飯田市議会	議長	上澤 義一
行政	新城市	市長	穂積 亮次
	田原市	市長	鈴木 克幸
	東栄町	町長	尾林 克時
	豊根村	村長	伊藤 実
	阿南町	町長	佐々木 暢生
	喬木村	村長	大平 利次
経済	浜松商工会議所	会頭	御室 健一郎
	天竜商工会	会長	平賀 丈太郎
	御前崎市商工会	会長	阿形 好男
	田原市商工会	会長	河合 利則
	泰阜村商工会	会長	秦 和陽児
住民	NPO 法人てほへ	理事長	伊藤 静男
	NPO 法人地域づくりサポートネット	理事長	山内 秀彦

(敬称略)

はじめに コーディネーター / 豊橋市 佐原市長



豊橋市長の佐原です。今日の「道」分科

会を担当させていただきます。よろしくお願いいたします。最初に、事務局からの説明をお願いします。

事務局

それでは、前年度の議論について、確認をさせていただきます。前年度の「道」分科会では、第1期の重点プロジェクトを総括し、第2期に向けての方向性が議論されました。

1つ目、震災以降、防災の面、地域の連携という点で道路の重要性が再認識されて

いる。新しい意識で「道」をとらえなければならぬ。

2点目、単に道路整備を要望するだけでなく、三遠南信地域の骨格として、また国全体の中で、なぜこの道路が必要なのかという点を訴えかけていかなければならぬ。

3点目、道路の整備と同時に、それを活用した住民交流、観光連携などを推進していかなくてはならない。こうした方向性が出されたわけでございます。

前年度の議論を引き続きまして、今回さらに発展的なご議論をいただきたいと思っております。そこで今回の議論のテーマですが、新東名高速道路、三遠南信自動車道など、三遠南信地域連携ビジョンに掲げました交通基盤の整備が着々と進みつつあります。こうした現在の進捗状況や今後の展開についてご議論をいただくため、「県境連携を促進する地域基盤整備の状況と展望」を今回のテーマとして設定しました。

コーディネーター / 豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。続いて、三遠南信自動車道の整備状況と効果につきまして、国土交通省浜松河川国道事務所長の天野邦彦様から、お願いいたします。

報告

国土交通省中部地方整備局

浜松河川国道事務所 天野邦彦所長

浜松河川国道事務所長の天野と申します。本日の機会をいただき、ありがとうございます。三遠南信自動車道の整備状況、鳳来峡 IC(インターチェンジ)から浜松いなさ JCT(ジャンクション)までの間の供用に伴う効果について、当事務所でまとめた結果についてお話しします。

まず、中部地方の高規格道路網についての資料です。4月14日に新東名高速道路の

静岡県の区間が開通しました。東名、中央自動車道、名神、伊勢湾道路と幾つか既に道路ができていますが、全国的な道路の繋がり、あるいは中部地方における重要な道路の繋がりを考えたときに、ネットワークとして繋がっていることに意味があります。国土交通省では、未だに繋がっていない部分をミッシングリンクとして幾つか挙げております。三遠南信自動車道は、重要なミッシングリンクと目されています。三遠南信自動車道がすべて繋がれば、東名高速、新東名、東名、中央自動車道を繋ぐ効果もあります。今まで大きな高速道路と繋がりがなかった地域の重要な足になると期待されているわけです。また、新東名の浜松いなさ JCT から豊田東 JCT までの区間もミッシングリンクだと考えておまして、三遠南信地域では、この2つが繋がっていない道路と考えております。

全体の進捗状況ですが、三遠南信自動車道は、中央道の飯田山本 IC から、新東名の浜松いなさ JCT までの約100キロメートルを繋ぐ高規格道路です。北側から飯橋道路 1 工区という部分が既にできております。2 工区が現在事業中の区間です。2 工区は、西側が平成27年度、東側の半分が平成29年度に開通する予定になっております。次に第3工区があり、現在調査をしているという状況です。

小川路峠道路は現在供用されている区間です。そこから青崩峠道路までは現在の国道152号を活用しようということで、現道活用区間となっています。青崩峠道路につきましては、工事用の道路の着手が行われる予定になっております。その南、静岡県に入りますが、浜松市の仮称水窪北 IC から仮称佐久間 IC、この区間については、現道活用区間にはなっておりますが、本年度から計画段階評価を進めるための調査を実際に始めております。

浜松河川国道事務所では、仮称水窪北 IC、仮称佐久間 IC 間の調査、さらに南の部分の事業を実施しています。仮称佐久間 IC から仮称東栄 IC の間が、平成30年度の開通を目指して事業を進めております。さらにその南側、仮称東栄 IC から鳳来峡 IC の区間は、おおむね10年ぐらいを目処に供用につなげたいということで、現在、事業を実施しているところです。鳳来峡 IC から浜松いなさ JCT 間の13.9キロが既に供用開始をしております。新東名の開通と、三遠南信自動車道の開通はほぼ同じ時期になっております。現在、新東名は御殿場 JCT から三ヶ日 JCT までが開通しており、三遠南信自動車道は、浜松いなさ JCT から鳳来峡 IC までが繋がっている状況です。

三遠南信自動車道は、鳳来峡 IC から浜松いなさ北 IC までが今年の3月4日に開通し、その1ヶ月後の4月14日、新東名の開通に合わせて、浜松いなさ北 IC から浜松いなさ JCT までの間が開通しております。開通してからどの程度、車が走っているかを説明した資料です。東名と繋がったことで、それまで1日当たり大体1,600台走っていたものが2,300台、特に休日では2,400台が3,600台で、全体として4割程度増えています。道路というものは途切れ途切れにできても仕方がなく、大きなネットワークの中の一部として繋がって、初めて効果が出てくるということが、データから分かります。三遠南信自動車道を、予定どおりつなげていくことが重要だと理解されます。

開通に伴って社会的な効果というのが出ておりますが、特に、観光という観点があると思います。信州新野千石平という道の駅がございますが、お客さんがどのように増えてきたかということを示しています。3月4日に三遠南信自動車道が単独で鳳来峡 IC から浜松いなさ北 IC まで開通したときは、その前の週の日曜日に比

べてお客さんはそう変わらなかったです。ところが新東名と繋がった後は、お客さんが一気に2.6倍に増えています。道の駅の運営をされている方のご意見ですが、三遠南信自動車道、新東名の開通で、例えば静岡市から来る場合に、1時間程度移動時間が短縮したと。非常に便利になったということで、お客さんも順調に増えているという声を聞いております。

また、芝桜で有名な豊根村の茶臼山高原で、芝桜祭りの来場者数を昨年と今年で比較しますと、大体2割ぐらい増えております。観光バスで来られる方が多いのですが、特に関東から来られた方が4倍ぐらい増えており、広域からの人を集めることが可能になっています。観光バスの運転手さんの声として、国道257号経由で来る予定だったけれども、新しい道路を使って非常に便利になったということも聞いております。

引き続き、観光の面ですが、以前は、浜松の方から信州の方に行こうとしたときに、中央自動車道を使って往復のコースをとるのが常であったのですが、開通後には行きは三遠南信自動車道で、帰りは中央道で帰ることができるようになったと聞いています。また、浜松の方から東栄のほうに行く奥三河バスツアーをやっておられる観光会社の方の声としては、途中山間地を走りますと時間がかかるので、トイレ休憩が必要だったのですが、時間が短くなったので、その必要はなくなり、観光地のところで使う時間に40分ぐらい余裕が出たということで、観光の質が上がっているということも分かりました。道路の開通により、観光客の量が増えるのとあわせて、質的な向上もできたということです。

次は日常生活についてです。東三河に住んでいる方が、医療や余り普段買わないようなものを買うとか、そういったときに、やはり近傍の大都市である浜松や豊橋に行

く場合が多い。そういったときに、非常に時間が短縮できたということで、生活の利便性が向上したと言われております。

さらに、医療の話です。例えば、東栄病院、奥三河の非常に重要な医療機関ですが、専門外来は都市部の大病院から派遣されている非常勤のお医者さんで対応されており、さらにお医者さんだけではなくて、看護師も不足傾向になっているということです。今回、この三遠南信自動車道ができたことで、浜松医大、豊橋ハートセンターといったところから派遣されているお医者さんも非常に早く来られるということで、現地での診療の時間を延ばすことができ、看護師の方も大きな街から通勤が可能になったということで、地域の医療にも役に立っていると言えます。特に救急医療については、時間の短縮効果が大きく出ていると考えております。重篤の救急患者の方を、浜松医大、豊橋、豊川の3次救急ができる医療施設に搬送するということがあります。それぞれ短縮効果を見ますと7分から17分ということで、救急医療にとって時間は非常に大切です。時間の短縮という面で救急医療にとって大きな効果を示していると考えています。また、供用した三遠南信自動車道は、山間部の中でも非常に線型がいいものですから、非常に走行性が向上しました。道を曲がったときに体が動くというようなことが少なく、患者さんや運転手の負担が減っている。走行の質も向上したと言えます。

次に、産業に対する効果を示しております。例として、東栄町にある工場で、工場の製品輸送に関してどれだけ効果があったか、グラフで示しています。三遠南信自動車道ができる前、例えば、湖西市から輸送したときに、荷造りから始めて平均7時間15分かかっていました。これが5時間45分、すなわち1時間半短縮になったということ

を聞いております。走行時間自体が30分減ったというのがありますけれども、山道の曲がりくねった道ではないので、荷づくり自体を簡略化することで、もう30分減らすことができた。さらに常に安定して同じ時間で着けますから、余計な時間を見積もらなくていいということで、余裕時間も30分減らすことができたということで、合計すると1時間半だということで、これだけの効果があるというように聞いております。やはり道路というのは単に早く着くだけではなくて、安定した走行性が必要だということです。あるときは混んで時間がかかるとか、そういうことがない。非常に安定した道路になったということが、道路の効果としてあって、最終的に1時間半も短縮できたというものです。常にジャストインタイムで、物を納入しなければいけない。信頼できる道路が、重要だと考えております。

以上、三遠南信自動車道の現状、事業の進捗状況、その効果についてお話をしました。

最後に補足ですが、国道473号の天竜川にかかっている原田橋のケーブル部に破断が見られたため、4月から2カ月ほど通行止めになりました。これにあわせて見名トンネル、太和金のトンネル内の崩落事故がありました。山間部では近年とりまく自然環境等が過酷となる傾向があり、道路が機能しなくなることによって地域の交通、生活に負担を強いるということがあります。今回、三遠南信自動車道は災害にも強い道路としてつくっていきます。冗長性を持たせることで、あるところで通行できなくなっても、他の場所から通れるというような形で、災害時のバックアップ体制ができるように考えております。

最後に、今後の開通予定です。仮称佐久間IC 仮称東栄IC間が平成30年度に開通の予定です。新東名は平成26年度に豊田東

JCT と浜松いなさ JCT の間ができるということになっております。さらに三遠南信自動車道の北側、天龍峡 IC から龍江 IC の間が平成27年度、龍江 IC から飯田東 IC までが平成29年度の開通予定というようになっています。ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター / 豊橋市 佐原市長

どうもありがとうございました。続きまして、愛知県三河港務所長の浅野様から、ご報告をお願いいたします。

愛知県三河港務所 浅野所長

皆様、こんにちは。紹介いただきました愛知県三河港務所の浅野と申します。三河港の利用状況、施設の整備、取り組みや計画についてご説明をさせていただきます。

三河港は昭和37年に西浦、蒲郡、豊橋、田原の4港を統一して誕生しました。その2年後、39年に重要港湾に指定され、名前がついて今年がちょうど50歳、2年後が重要港湾指定50周年になります。蒲郡、豊川、豊橋、田原の4市にまたがる周囲約80キロ、面積132平方キロメートル、日本のすべての港湾の中で第8位と、かなり大きな規模の港です。三河港務所が所管する施設ですが、公共の岸壁、荷を積んだり荷さばきをしたりする場所、航路、臨港道路、港湾区域内の道路、緑地、それから三河港の中の漁港も、3港ほど所管をしております。また、国立公園に囲まれ、豊かな自然と広大な水域をもっており、海洋ヨットハーバー、大型リゾート施設であるラグーナ蒲郡、大塚海浜緑地、三河の臨海緑地といった交流施設も整備をしています。

それでは港の利用状況をご説明します。三河港の主要貨物は、完成自動車で、国外、国内を合わせたすべての取り扱いの貨物の69%が完成自動車です。臨海部のトヨタ田原工場を始め、岡崎の三菱自動車、湖西の

スズキ自動車等、世界を代表する自動車産業が集積しており、輸出は台数、貿易額とも全国3位、特に輸出については、日本全国の輸入車の4割がこの三河港を利用しています。平成5年から19年連続で全国1位という素晴らしい実績を納めております。

資料にあるのは、三河港の取り扱い貨物を示したものです。平成20年のリーマンショックの影響で、翌21年は大幅な減となりました。翌年は多少回復しましたが、東日本大震災、タイの洪水、急速な円高の影響で、輸入以外はすべてマイナスとなり、全体では13%の減になりました。しかし、最近の状況としては、輸出額で対前年の同月比で9カ月連続の増ということで着実に回復しております。ただ、尖閣列島等を始め、対中国の問題の先行き懸念が予想されるところです。

次に、三河港のコンテナの取扱量をあらわした資料です。取扱貨物の大幅な減の中でも、22年をわずかに上回り、過去最高を更新するという状況です。来年度からは新たにウラジオストクへの新規航路が開設されるということで、大幅な伸びを期待しています。

次に、三河港の整備方針についてです。産業・物流の拠点、環境の保全・再生、安全安心で災害に強い港湾整備という3つの柱を軸に事業を進めています。今年度の事業について、ご紹介をさせていただきます。

最初に蒲郡地区です。ここは水深11メートルの公共埠頭の岸壁を整備しています。入港船舶が大型化し、岸壁の整備が求められておりまして、全体で570メートルの埠頭を計画していますが、暫定的な整備を早急に進めているところです。570メートルのうち240メートルを今回整備し、この区画を平成26年には工事を完了させるため、鋭意進めているところです。主に岡崎の三菱自動車の荷出しの埠頭になると考えております。

次に御津地区です。県の企業庁が実施している、御津の1区埋め立てにあわせて、公共埠頭を整備するものです。岸壁、物揚げ場は既に完了していますが、今年度は航路浚渫（しゅんせつ）をやっております。この工事で発生した砂を、海底のほうに覆砂して、ヘドロなどを覆う形で、苦潮、青潮対策にも取り組んでいます。

次に、豊橋市の船渡地区の岸壁の老朽化に伴う補修についてです。来年度には完了させるべく、大規模補修を進めております。船渡地区の北側の三河港 IC の部分、海岸部の耐震対策事業です。海岸堤防の液状化対策として、平成19年度から事業を開始し、26年度の完成を目標に、工事を今進めているところでございます。

三河港務所ではこうした施設の整備の改修といった、ハード面と並行してソフト面の取り組みも進めています。本県は沿岸部での津波高潮対策として、昨年度から県の防災局と連携し、有識者の方々による検討会を設けて検討を進めております。今年度は、どういう影響が出るのかというシミュレーションをもとに、市町村のハザードマップ作成支援のための高潮浸水予想図を作成する予定です。地震、津波については、防災局のほうで進めており、これらを合わせて、ハード、ソフトの適切な組み合わせによる減災、防護対策の検討をしていく予定です。

もう一つのソフトの取り組みとして、三河港の振興も私どもの仕事です。港湾利用者の意見を反映させた効率的な施設整備と利用の促進、いわゆるポートセールスを実施しております。これまでご要望のあったものを挙げますと、岸壁や道路の整備は当然ですが、意外にCO₂の削減、環境問題、環境対策も一つ大きな柱になっており、企業にとって関心が高い状況です。地域の産業や経済、生活文化を支え、さらには災害

時の安心安全を確保する上では、基盤となる道路ネットワークの整備とともに、このネットワークと海の拠点、港、三河港をしっかりと結節して、物流の基盤構築をする必要があります。

当地域では、東西方向の幹線道路というのは整備される目処がついていますが、まだ南北方向の幹線道路の整備は弱いと。これから整備を進めていただく必要があるように思います。東海環状の一部区間が開通したことで、三河港と奥三河を結ぶ時間距離が20分程短くなり、ロジスティックの線と点を有機的に組み合わせたネットワークを組むことが、いかに大事かが分かると言えます。縦の線としての三遠南信自動車道の早期整備、浜松三ヶ日・豊橋道路の早期整備をさらに進めていただきたいと、しっかり声を上げていきたいと考えております。

資料は、豊橋市の企業が20フィートのコンテナ貨物を上海まで輸送する場合のコストの試算です。CO₂を金額勘案したものも含めていますが、総コストで名古屋港を使うよりも2割以上、三河港を使っていたほうが安いと。あくまでオーソライズしていない三河港務所の試算ですが、そういう結果になります。これまで企業ヒアリング等でも、背後圏に立地する企業の外資コンテナは、ほとんどが名古屋港を使っています。経路コスト、輸送コストの比較等を踏まえ、三河港の利用促進を図りたいと考えています。

最後に港湾計画について説明します。物流の産業機能、人流交流機能、環境生活機能、安全防災機能という4つの柱を軸に計画しております。この計画は、三河港の自然環境に配慮した六条潟の保全、貧酸素を進めないようにできる限り配慮しつつ、地域の要請や港湾整備の選択・集中、ある程度見込みをつけながら優先度の高い港湾の強化を図るべくつくったものです。

最後になりますが、三河港は「世界に繋がるゲートウェイとロジスティクスパーク」という目標に向けて、港湾機能の充実に努めるとともに、関係各位と協働してポートセールス等に取り組み、活性化を図っていきたいと考えております。

昨今の港湾を取り巻く環境は、国際競争力の強化、テロ等への保安対策の強化、環境問題といった社会的な要請に加え、東日本大震災以後の防災への対応と、大きく変化しています。先行きの見通しづらい社会経済情勢の中で、ニーズに的確かつタイムリーに対応するには、皆様のご理解とご支援が不可欠です。皆様のご支援をいただきながら、重要港湾からのステップアップを目指したいと考えておりますので、皆様、三河港をよろしく願います。どうもありがとうございました。

意見交換



コーディネーター / 豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。それでは、二つほど論点を設け、意見交換に移ります。

一つは、実際に道路を使用する立場から見た交通基盤の整備、計画状況とその整備効果。つまり整備によってどのような効果が生まれているのか。または将来どのような効果を期待しているのかという点についてです。

二つ目は、整備効果を高めるためにS E

N A 構成員及び関連組織が連携して取り組む課題というのは何だろうかという、その二つの点について、それぞれの立場からご意見をお聞かせいただきたいと思います。

浜松市議会 鈴木議長

浜松市議長の鈴木浩太郎です。二、三意見を述べさせていただきます。

浜松市は1500平方キロという大きな市でありまして、山間部も多いわけです。原田橋の件もありましたが、中山間地は、一つ道路が壊れる、あるいは橋が通れなくなると一挙に孤立してしまいます。そういう観点からも三遠南信自動車道を早く完成をしてほしいと思っていますところでは。

効果としては、鳳来峡 IC まで開通したことで、緊急車両で病院へ搬送できる。そして命を救われた方もいるわけです。一刻も早く開通をしていただきたいと思います。特に浜松市は、浜松医大、医療センター、三方原聖隷等々病院が充実しております。いかにそこへ速く運ぶかということが肝要です。

三遠南信道路は、縦軸をきちんとつけて新東名、東名へのアクセス道路的な考え方を持ってもいいのではないかと。いわゆるインターチェンジ、あるいはジャンクションへ来れば横の連携がとれますから、磐田、掛川もそうですし、山の方面、あるいは海の方面と連携をとれるわけですから、三遠南信自動車道を縦軸として横の連携が東名関係だというような見方で、国のほうも見ていただければありがたいと思っていますところでは。

それから、三ヶ日・豊橋道路ですが、三河港からウラジオストクへ便が開通することですが、私も以前、三ヶ日のミカンをロシアへ輸出しようとトライをしたことがありまして、なかなかこれがうまくいかない話で、今回こういうことが行われる

ならば、農産物をウラジオストクへ持って
いっていただければ、そこからまた販路が
広がるのではないか。そういうことが産業
の進展につながると思っているわけです。

ぜひ、まちを挙げて、あるいは連携の中
で一刻も早くこの道路を完成するように努
力したいと思っております。

豊橋市議会 近田議長

豊橋市議会議長の近田明久でございます。
交通基盤の整備の状況ですが、名豊道路は
豊橋、浜松圏と名古屋圏を結ぶものでござ
いまして、現在、豊橋東と豊橋バイパスの
整備が進められております。今年度末には
東細谷 IC から豊川の東三河 IC にかけての
区間が、暫定 2 車線で開通する予定となっ
ております。しかしその先の蒲郡バイパス
の供用区間がまだでき上がっておりません。
西三河では岡崎バイパス、知立バイパス等
の全面開通されている中で、早期開通に向
けて、一層の事業が進められていくものと思
っております。

また、三遠南信道路も、本年 3 月に鳳来
峡 IC から浜松いなさ北 IC の区間が開通し
て、本年 4 月の新東名高速道路の開通とあ
わせて東三河と遠州との繋がりを強化する
上での大きな一歩になったと、そんな思い
がしております。

次に効果ですが、国道 23 号名豊道路は、
遠州から名古屋にかけての国内有数の産業
集積圏を東西に結びつけるもので、地域産
業の競争力強化、国道 1 号線の渋滞緩和、
市街地への通過交通の抑制などにも寄与し
ています。

また、本年、新東名高速道路の供用に合
わせまして、浜松いなさ JCT から浜松いな
さ北 IC の区間が開通して、さらに鳳来峡
IC に繋がったことで、東三河の北部への広
域アクセスが飛躍的に高まりました。東三
河では既に集客効果が現れている観光施設

等もあると伺っております。

整備効果をさらに高める上で、防災の面
から、東三河には港がございます。例えば、
港からの救助、物資等の陸揚げ、そういう
面も考えますと、港を中心としていろい
ろなところに運ぶ、そういう道も考える必要
があるのではないかなど。そういう意味で
も三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促
進議員協議会としてこの道路の建設促進、
あるいは早期実現化に対し要望活動をして
おります。こうした取り組みを今後行政と
経済界と連携しながら一体的に取り組んで
行く必要があるだろうと、そんな思いでご
ざいます。

飯田市議会 上澤議長

三遠南信自動車道の第 3 工区は、まだ明
確に示されていない部分なので、一刻も早
く全通するようにお願いをしたいと思います。
また、青崩道路は、近々本工事着工の
予定だとお聞きしておりますので、大きな
期待を寄せております。特に遠山郷と言わ
れる地域は、大きな観光資源を持っていま
すが、過疎化、高齢化が進んでいます。浜
松とトンネルを通じて、同時に水窪、佐久
間道路が開通すれば、一本の道になるわけ
ですから、ぜひお願いをしたいと思います。

また、リニア中央新幹線の関連ですが、
南信州地域では J R 東海が 2027 年にリニア
中央新幹線の開業を目指しています。昨年
の 9 月に環境影響評価方法書が公表され、
現在は各種の調査が行われております。中
間駅を当地域に設置することが決まってお
り、3 キロ幅のルート帯と 5 キロ円の概略
の駅の位置が示されています。ルートや駅
位置の詳細は環境影響評価準備書において
公表すると J R 東海も表明をしております。
公表は来年の秋以降としています。

三遠南信自動車道の整備効果については、
飯橋道路の第 1 工区開通が開通し、これに

よって、救急患者の搬送時間が5分から10分短縮されました。1分1秒を争う救急患者の命が助かるということで、道路開通の効果を目の当たりにしております。一刻も早く全通を望むものであります。また、天龍峡 IC 周辺では企業立地も進めておりますし、名勝天龍峡や下條村の道の駅も開通によって観光客が増えているそうです。

整備効果を高めるための取り組むべき課題ですが、産業振興と合わせ、東日本大震災で高規格道路が緊急輸送道路として使われた教訓を踏まえ、東南海地震の発生が危惧される中で、早期にミッシングリンク解消の運動を展開する必要があると思っております。飯田市議会としても「三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会」、28市町村450名の議員の総意をもって要望活動等を強めていく必要があると考えております。リニア中間駅と三遠南信自動車道とを合わせた地域づくりを、ぜひ進めるべきだと考えております。

新城市 穂積市長

新城市長の穂積でございます。三遠道路並びに新東名の引佐、御殿場間の開通により、生活面、産業面、観光面、救急消防面で、劇的な変化が及んでおります。新城市は三遠道路、新東名の恩恵を両方とも受ける地域で、それを実感しているところです。新東名では新城 IC から豊田へ抜ける道が平成26年度に開通予定です。インターチェンジ周辺の整備、観光交流事業の強化等々に取り組んでいるところです。

新東名、三遠道路の開通を経て、わずかに三遠南信自動車道の13キロでありますけれども、首都圏にも及ぶ交通の変化を呼び起こしています。道路行政というのも、自治体の中の、自分たちも通過のところに目が行きがちですが、影響が広範囲に及ぶ、マイナスの影響も及びますので、自治体の枠

を超えた連携をしなければならないと思っております。

前回サミット以降の変化を申し上げますと、新城と北設楽の4市町村で、浜松三ヶ日・豊橋道路の期成同盟会に参加をさせていただくことになりました。私どもの区域には、直接この道路は通らないのですが、三遠南信自動車道と東名の連絡道路が通過したことで、山間部と沿岸部、特に三河港との直結の道が視野に入ったところから、ぜひ加わらせていただきたいと申し入れたところ、快く受け入れていただきました。今後、三遠南信道路の大きな課題は、リニアの新幹線の開業時期が既にほぼ固まっています、順次進んでいきますが、そうしたときに三遠南信自動車道は、その時点では恐らく全通していない。それをどのように早めていくか。地域全体の結束力、政治力を高め、リニア新幹線の影響を組み込んだ三遠南信道路の整備促進計画を進めていく必要があると思っております。

基調講演で大西先生が、人口減少、国際化、アジア化の中での変革を提起されましたが、国民の活動の密度を高めていく以外には、人口減少社会の中で活力を高めていくことはできないと思っておりますし、ミッシングリンクの解消、移動に伴う無駄の解消、効率性の向上、こういう点からも三遠南信自動車道、三ヶ日・豊橋道路、三河港の整備まで入れて、沿岸部と山間部、そしてこの三遠南信地域全体の発展のために、できるだけ幅広く連携と協働をしていかなければならないと思ったところです。

田原市 鈴木市長

田原市長の鈴木でございます。今回の三遠南信のサミット、20年間の地域を挙げての取り組みが今日の三遠南信自動車道の整備につながったと感じております。一方で、新東名も将来が見えてきたなと思って

おります。ですが、渥美半島は30年来余り道路の整備が進んでおりません。これで新東名ができますと、高速道路のインターに1時間で行けない地域は渥美半島の半分ということになります。その辺は、ぜひ将来に向けて皆様方のお力をお借りしたいと思っております。

将来に向けて一番心配しておりますのは、東西軸はこれだけ整備できた。しかし三遠南信地域の一体化、またポテンシャルを生かすためには、南北軸、これがあって初めて完成すると思っております。東西軸が整備されて三遠南信自動車道、浜松三ヶ日・豊橋道路が続いていかないと、三遠南信地域が分断されてしまうのではないかと心配をしております。骨格となる南北軸というのは、三遠南信サミットで共通認識として取り組んでいく必要があると思っております。農業、工業の指標は、都道府県と比較しても、6位、7位の経済力を持っている地域です。もし、三遠南信地域が県であれば、もっと基盤整備が進んでいるという気がしております。

昔は三遠南信伊勢ということで、伊勢湾口まで含めて、三遠南信自動車道と伊勢までターゲットになって取り組んできたのが最初です。観光は特に伊勢まで視野に入れなければいけないと思っておりますし、道州制ができれば、この三遠南信伊勢というのは必要不可欠な、基盤となる道路、次の世代に夢を与える道路だと思っております。共通認識として、今後とも目を向けていただければありがたいと思っております。

また、田原市は上伊那郡の宮田村と友好交流しており、三遠南信自動車道ができれば交流が深まると思っております。そのため、早い整備を願っているものでございます。

東栄町 尾林町長

東栄町長の尾林克時でございます。3月

4日に鳳来峡ICが開通したんですが、東栄町の玄関に当たります。本当に恩恵を受けているなど心から感謝を申し上げたいと思っております。東栄町から南に新城、豊川、東名を使って名古屋に行くルートと、稲武町、足助を通して名古屋へ行くのと、ちょうど2時間半で大体時間が同じでございました。今回、三遠南信が開通してからは、1時間40分ぐらいで行きますので、ほとんど三遠南信、東名を使って名古屋に行くというルートに変更をしました。本当に道路一本で、これだけ地域が変わるのかと。運転していても心も弾みますし、展望が開けたなど。これを機会に町民一丸となって地域づくりをしてまいりたいと思っております。

また、整備効果としては、とうえい温泉には年間18万人の方がお見えになりますが、それも2割ほど入り込み客が増えておりまして、目に見える効果だと思っております。

三遠南信自動車道の鳳来峡ICから東栄ICの間は、本年の2月から初めて16億円の予算化をしていただきました。先が見えてきたなという感じがして、大変ありがたく思っております。それに伴いまして、東栄町から名古屋にも1時間半、浜松にも1時間半ということで、分譲地、空き家等を紹介、定住政策を図っていきたく思っております。将来、地域全体がともに発展をしていけるように、連携、交流を深めてまいりたいと思っております。

豊根村 伊藤村長

豊根村長の伊藤でございます。道路が開通することで、地域が大きく変わってきたのは事実でございます。茶臼山高原方面の観光客が圧倒的に増えたのは、道路のおかげだと思っております。一昨年は、伊勢湾岸自動車道と東海環状自動車道が接続したことで、大阪、関西方面から多くの方に来ていただいたというお話をしました。この

3月、4月に新しい道路が開通したことで、茶臼山高原は関東方面からのお客さんが4倍に増えたと発表していただいたわけですね。道路によって、地域がこんなに変わったのかと痛切に感じた数カ月でした。

その中で、一通過地点ではない地域になるためには、自分たちで地域を守り、発展させていくのが大きなポイントとっております。豊根村から東海環状自動車道の豊田勘八 ICまで1時間20分ぐらいで行けますし、中央道で行きますと飯田山本 ICまで1時間ぐらい。今の三遠南信自動車道が40分ぐらい。便利のいい地域になりました。私どもも都合が良くなることに加えて、やはり観光客が来やすくなったと。

同時に観光と交流を通じて、経済効果が高まっていく地域づくりをしていかなければいけないと思っております。平成22年の芝桜まつりへは1カ月で約30万7,000人来たわけですが、愛知県内への経済効果が23億と言われております。その辺をもっと高め、近隣市町村へ大きく波及させるため、その中で地域連携を保っていけるようにするには、道路のアクセス改善を痛切に感じたところでございます。三遠南信自動車道については、引き続き東栄 IC、それから飯田に向けて、1日も早い全線開通を願っているところでございます。

阿南町 佐々木町長

阿南町長の佐々木でございます。三遠南信自動車道、あるいは新東名が開通した中で、観光客の車のナンバーが大きく変わってきました。新野の道の駅あたりで40%増というご説明がありました。あそこへ来るお客さんは、6割から7割ぐらいが県外者で、浜松ナンバー、三河ナンバーが、ほとんどを占めていたわけですね。それが、新東名、三遠南信の一部供用開始により、静岡ナンバー、沼津ナンバーが非常に増えた。

非常に大きな伸びですし、26年に東海環状の豊田東へ繋がり、今度は湾岸を通過して三重県や京都にもアクセスできると、人の流れが丸きり変わっていく。道路の開通が、大きな影響を与えたわけですね。

道路が開通することで、すごく世の中が変わるんですけども、一旦道路が通行止めになると、浜松、三河ナンバーが来ない。そうすると経済が成り立たない。それほど必死な地域なわけですね。

豊根村と県境域をまたいで要望をしているんですけども、長野県の南、また、愛知県の北東、そういうところは光が当たりにくい部分で、非常に道の整備も遅れているわけですね。そういう中で、新東名と三遠南信、飯田までつながるというのは遠いわけですね。できるだけ早い時期に供用開始をいただきたい。こんなことを思っております。

喬木村 大平村長

喬木村の大平と申します。三遠南信自動車道の飯喬道路の第3工区に該当する村です。現在、飯田山本 IC から飯田東 IC まで工事が進められておまして、平成29年には供用開始になると予定をされております。その後、喬木 IC まで工事用道路等が、新年度に入って進められるということです。矢筈トンネルまでの供用開始もリニアが通る頃になるのではと思っておりますが、それより早くお願いしたいなと思っております。アクセス道路は、県道が主体ですが、飯喬道路の第3工区の間接地に、地域インターをつくることで、下伊那、南信州の北部地区の活性化につなげていこうと。天竜川沿線、竜東一貫道路のところに、先線へ橋を架けて中央道への連結を早め、リニア中間駅へのアクセスを確実なものにしていく、そんな要望をしております。

また、当地方は、現在の景観を守りなが

ら観光農業や農業等に力をいれています。喬木村ではイチゴ狩りを40年近くやっているんですが、今年も5万人余来ていただきました。愛知県の方が多かったわけですが、道路が開通することで、さらなる発展が期待できると思っています。そして、自然を求めるということで、長期滞在型の農業、クラインガルテン的なものをつくって利用しております。それらを利用しながら、交流人口を増やしていこうと進めております。リニア中央新幹線が通る、そして飯田の中間駅ができれば、非常に流れが変わってくるかと思えます。ストロー現象にならないように、いろいろな方策を講じているわけです。南信州の玄関口にふさわしい状況を、作り出す中で進めていかなければいけないと感じております。

一旦事故、災害等がありますと、それに連なって大きな影響を来すのが道路だと思います。社会基盤の向上を図る意味においても、三遠南信自動車道の早期開通、そして遠山郷の青崩道路の早期開通等を含めれば、大きな災害にも対応できる道路になるのではないかなと期待をしております。高齢化の進む中で、知恵を出し合って、道路と鉄道を生かす中で将来に向かっていこうということで進んでおります。ぜひその面で社会資本の投下を早急をお願いしたいなということです。

浜松商工会議所 御室会頭

浜松商工会議所の御室でございます。私からは、交通基盤整備に期待する効果につきまして、産業界の立場から2つの側面に絞ってお話を申し上げたいと思っております。

交通基盤の整備に期待する効果の一つは、何といたっても観光産業への波及効果だと思っております。4月に新東名高速道路が県内を開通いたしました。開通直後から県内

サービスエリアが大変混雑しておりまして、地場産品、お土産品が飛ぶように売れているというニュースが数多く報道されました。また、遠州地域の各インターチェンジに近いゴルフ場ですね。これと観光スポットはどこも集客数が大幅な増加を示しているようでした。これまで余り見かけなかった静岡県の東部や県外ナンバー、この自動車の割合がかなり増えたということです。高齢化の一方で人口が減少し、浜松においても地域活力の維持に向け、いかに交流人口を増加させるかが喫緊の課題となっております。観光資源の発掘、あるいはイベントの企画とかプロモーションの方法など、ソフト面の充実が問われているということですが、やはり道路というハード面の整備が与えるインパクト、これは想像以上のものがあるという印象を今回強く持ったわけです。三遠南信自動車道の全線が早く開通すれば南北の軸が確立をされ、さらに新東名の東西軸とつながることで、この沿線のエリアには期待を超える人の動きが生まれ、観光産業の振興に寄与するのではと期待しております。

ちなみに、新東名高速の浜松サービスエリアに隣接した浜松フルーツパークという施設がございます。浜松市の公共施設ですが、每期赤字の連続で、存続させるか、廃止するかという議論が交わされてきたわけです。ここへ来て、浜松サービスエリアにスマートインターができ、新東名と接続される計画が持ち上がり、大変な重荷で、もうやめようかと話していたのが、金の卵に生まれ変わると。そんな予想もされております。道路と観光産業振興との関係が非常にわかりやすい事例ということで、ご紹介をさせていただきました。

次に、交通基盤整備に期待する二つ目の効果は、人材交流の活発化による地域力の向上です。浜松は東京と大阪のほぼ中間に

位置しており、東海道本線、東海道新幹線、国道1号線、東名高速道路と、日本の動脈と呼ぶべき主要幹線がすべてこの浜松の地を通過しております。交通の利便性が高かったことから、人と物、両面の往来、交流が全国各地へと拡大をして、浜松は古くからのものづくりが盛んなまちとして成長してきた経緯があります。その代表的な話が、紀州生まれの山葉寅楠が浜松を訪れた際に、浜松尋常小学校の米国製のオルガンを修理したということがきっかけで、その後、日本初のオルガンの製造、そして楽器産業への道を歩み、世界を代表する楽器メーカーを生み出すということになったのですが、ほかにも大正元年に開業した鉄道院、今のJR浜松工場ですね。これも全国から有能な技術者が集まり、工作機械の製作、溶接技術、こういうすぐれた技術を育て、後のものづくり産業の基盤形成につながったということもございます。浜松では地元以外の人材でも、分け隔てなく受け入れて、その人材の力を地域の発展に生かしてきたという土壌もございます。人材交流が盛んになればなるほど、新たなものを生み出すパワーが増していくと思っております。その意味から、道路基盤整備が進むことで人材の交流が一層活発になれば、外部から新しい知恵、柔軟な発想、これを取り入れるチャンスも広がるわけです。それが新産業の創出、また、新サービス、新商品の開発という形で地域活性化につながるのではないかと考えております。

観光振興、人材交流と二つの面から交通基盤整備に期待したいということで発言をさせていただきました。

天竜商工会 平賀会長

天竜商工会会長の平賀でございます。私も佐久間町川合地区は三遠南信自動車道のインターができるところでございます。

今までは二俣町から北への入り込み客が主流でしたが、これからは川合地区が北遠の玄関口となるところでございます。今、引佐浜松方面への交通基盤は、春にこの鳳来・引佐の開通によって格段と便利になりましたが、そこから飯田へ抜ける国道473号、152号線はすべてが切り立った山間の狭い道路で、飯田との交流となると、まだ先になるのではないかなと思います。

先頃、原田橋ワイヤーが突然切れ、今24時間体制で橋の両側に赤と白の旗を持った人たちが見守ってくれております。乗用車と4トン以下の車両は通れるのですが、それ以上の車は通れない状態です。東栄町、豊根村の方々は、集客が多くなったという話を聞いて、うらやましく思っているのですが、私どもの地域はこういった状態です。この原田橋を、1日も早く大型車両が通れるようにしていただきたいということがまず一点です。

もう一つは、佐久間から水窪の区間で道路拡幅工事をやっていただいておりますが、この区間は、やはり山が非常に切り立っているところですので、是非共トンネルで通していただきたい。これが私たちの願いでございます。とにかく1日も早く原田橋を通るようにしていただきたいのが一番の願いでございます。

御前崎市商工会 阿形会長

御前崎市の阿形でございます。私どものまちは静岡県でも一番南に位置するまちでございます。三遠南信と言われても、なかなかぴんとこないというのが正直なところでございます。また、三河港の話も丁寧にお聞きさせていただいたわけですがけれども、御前崎港という貿易港を市内の中に控えておりますので、何か複雑な気持ちでございました。

今日は事務局と車で来させていただきました。

した。ちょうど家を出てから2時間でございました。非常に早くなったなど。浜名湖のバイパスを通過して、約80キロ弱ぐらいの道のりでございます。御前崎市には国道150号線が通っていますが、昔浜松に車で来たころには、ちょうど私の家から浜松の南口まで40キロでございました。1時間で来ることができました。しかし、今は1時間10分ぐらいかかりますかね。なぜかなと考えましたら、150号線の道路の2車線化されているところは御前崎市の半分ぐらいのみでございます。焼津市、静岡市に行けば150号線、片側2車線、4車線とございますけれども、御前崎市内の半分ぐらいが片側2車線の4車線ということで、後は私がよく来た時分と道路幅もすべて同じでございます。150号線も2車線、4車線化するだけの用地もありますので、早くそうしていただければ、1時間で浜松まで来られるようになるのではと感じているところです。

それともう一つ。静岡県知事は、伊豆方面のジオパークや、富士山の世界遺産、新東名の山間地の産業、観光にすごく力を入れていきます。最南端の陸の孤島と言われたところが、ますます孤島になっていく、そんな感がありますので、ぜひ国道150号線を2車線化していただきたいと。金谷御前崎線も静岡空港のところまでは、ほとんど自動車専用道路になりましたが、静岡空港の入り口から金谷の新東名のジャンクションまで、できれば皆様方のほうから金谷のジャンクションを通過して、御前崎に足を運んでいただくことをお願いしたいと思います。

田原市商工会 河合会長

田原市商工会の河合です。田原市は三遠南信のお話の中に入っても最南端ということで、いかに23号バイパス、東名、新東名につながるアクセスを充実させるかが共通の問題であります。特に臨海部は縦貫道の

高規格化をお願いしたいということ。それから農業、観光は浜松三ヶ日・豊橋道路を早期に計画道路の形で進めていただくことが、道路面では特に遅れている田原市にとっては悲願であると思っています。

今回、三遠南信自動車道の開通で気づいたことが一つあります。田原は大変農業の盛んなまちですが、実は東栄町を夏場のイチゴなど農作物で利用させていただいています。夏場の平均気温の差が約7度ありまして、日本全体で考えますと東北の方まで行かなければならないわけですが、実は目と鼻の先に東栄町があると。今までの豊川、新城を通るルートと比べまして、15分から30分ぐらい時間が短縮されます。豊橋・三ヶ日道路が国道42号、国道23号に連結すれば、さらに15分、20分という時間の短縮となります。温度の違いが農業に関して、大きなビジネスチャンスと捉えている方もたくさんあります。どういう形で生かせるかという部分で知恵を絞りながら、道路の開通をお願いしたいと思います。

泰阜村商工会 秦会長

泰阜村商工会の秦和陽児でございます。泰阜村は飯田市まで国道の一本もない村でございます。主要地方道が3本ありますけれども、そのうち2本の主要地方道はセンターラインがございません。県道1号線というのが通っているんですが、それがセンターラインのある唯一の道路でございます。今年の12月に未整備だった飯田地籍が整備されまして、やっと飯田から大型バスが入れるようになります。今まで小中学校の修学旅行といいますが、下條の道の駅まで親が子供たちを送り迎えして修学旅行に行っていました。来年からはそれがなくなるのかなと、そんな期待をしているわけでございます。

県道1号線は、三遠南信自動車道の龍江

にできるインターに接続すると思っておりますが、そうすると中央道を通って名古屋方面、また諏訪、東京、長野方面に行くには本当に具合が良くなると考えています。

また、15年後に開通を控えておりますリニア中央新幹線も、その駅に向かって、また便が良くなるのかなと思っておりますし、アクセス道路の整備をこれからもしていかなければいけないと思っております。三遠南信自動車道とリニア中央新幹線が開通した暁には、この南信州の地域が遠州三河の皆さんにとって北の玄関になるのではないかと考えております。また、そうなるべく我々南信州の人間も地域開発、そして皆さんが本当に北の玄関だと思っただけのような地域づくりをしていかなければいけないと、今そんな話をしているところでございます。

また、国道151号線も長野県内の整備をもっと早く進めていただき、安全な道にしてほしいと考えております。県道の改良も、JRを横断するときに交渉等で非常に手間がかかります。お隣の阿南町に行くにも飯田線を通るわけですが、それがスムーズにいけば、もっと早く開通できるのではないかなと思っているわけです。

いずれにしても、こういった道路整備は、本当に地域の活性化になるということです。天龍峡地域、下條村、泰阜村、阿南町等で天龍峡 IC 周辺地域活性化推進協議会をつくってありまして、開通の際にはどのようなようになるべきか研究をしたり、名鉄、遠州鉄道にもバス停設置の陳情をしたこともございます。とにかくこの道が開通することによって、三遠地域の皆さんとの人的交流からいろいろな面の交流を期待しているところでございますので、1日も早い開通を望んでおります。

NPO法人てほへ 伊藤理事長

皆さん、こんにちは。NPOてほへの伊藤と申します。「てほへ」というのは花祭りのかけ声から来た名称です。和太鼓集団「志多ら」という団体が東栄町に拠点を設けてありまして、設置20年たったところで、町と一緒に何かをしたいという熱いメンバーの意見がありました。NPO化して地域おこしのお役に立てればというような形で、2年前に設立し、今年で3年を迎えているところです。

道路が整備されることの効果については、もちろん東栄町もその恩恵にあずかっており、かなり遠くの方にお見えいただいているのが実情です。三遠南信道路が開通して間もなく5月の終わりに、東栄町でチェーンソーアート大会が開催されましたが、このときの来場された方の範囲もかなり広くなったように感じておりました。遠くは静岡市、あるいは尾張のほうからもお見えいただいて、楽しんでいただきました。

ただ、行動範囲が広がることで、町民の皆さんも行動範囲が広くなり、流出をしてしまうと心配をしているところもあります。そこで、てほへとしてどんなことをやっているかといいますと、東栄町にお見えになった方が、長く滞在していただけるような取り組みを考えております。例えば、滞在して楽しめる場所をつくろうと、空き家をお借りして、整備し、そこに人が集めるような環境を整えようではないかということで、資金繰りに苦労しながらも少しずつ進めています。近いうちに作業小屋が一つ完成予定ですので、それを拠点に次のことを考えていきたいと思っております。同時に、もう一つは東栄町廃校を利用させていただいて、「のき山市」という交流会を開催したのですが、町内会から多くの皆さんが来て、楽しんでいただきました。

皆さんに来ていただけるような環境づくりに努めながら、志多らのメンバーを中心

に交流会を進めていく。終わったら東栄温泉でもご利用していただくとか、そのようなイベントを今後も考えていきたいと思っています。

NPO法人地域づくりサポートネット 山内理事長

地域づくりサポートネットの山内と申します。よろしくお願ひいたします。

私どもは、地域づくりとか協働のまちづくりを、国、県、市町村、企業、市民団体と広域の連携で繋ぎ、中間支援することを目的に活動しているNPOです。

効果と課題の話の前に、一つだけ文句を言わせていただきたい。NPOも三遠南信住民ネットワーク協議会を6月1日に立ち上げました。2005年の浜松のサミットから住民団体も、このお仲間に入れていただきながら、議論させていただく場も与えていただきながら、一緒になって三遠南信の整備促進を考えていこうと協力してきました。今年の6月、地域とか感覚の違いがある中で、みんなで月に一遍ボランティアで集まって、会則等を議論し、事業計画を考え、立ち上げたんですが、全体会の三遠南信サミットの歴史とか広域連携の成果の中で、一切書かれていないんです。何なんだこれはと。今日も住民セッションを午前中やって、いろいろな形で繋がっていこうと言っているのに、なぜ認知されていないのかと。非常に残念でなりません。

今日の住民セッションの中でも三遠南信自動車道の整備、新東名の開通もあわせて、やはり意識的に距離が近くなったと。飯田のほうから来られる方も30分近くなったよと。だからもっと交流できるねとなりました。それをさらに地域の元気のもととして、お金も落ちる、稼ぐという。浜名湖サービスエリアに共同出展して、各県域からそれぞれ出て物を売ろうというアンテナショッ

プの計画も、着々と住民団体レベルで動いております。そんな形で、少しずつ交流が活発化してきているという効果はあります。

あわせて震災以後、住民団体も道の重要性をつぶさに感じているところです。そんな中で、住民ネットワーク協議会も、「ここが楽しい辞典シリーズ」という冊子を印刷して、それをみんなで売り合おうということでやり始めました。または、天竜川の県境を越えたエコツアーをやってみようということで、少しずつ動いています。まだ道は繋がっていないけれども、少しずつ動き始めていると。そう気持ちが変わってきている、というのが一番大きな効果かなというのがあります。

課題は、3点あるかなと思います。一つは三遠南信自動車道の間が繋がらないということ、三ヶ日・豊橋道路の促進ということです。

二つ目は、都市機能が集積する都市部からのアクセス。とりわけ浜松からのアクセスが非常にまだまだ悪いと。三遠南信といっても、都市部との繋がりが薄いという。そこら辺のアクセスをどう改善するか、物流、医療、買い物、観光、いろいろな形で都市部と中山間地域、それを越えて飯田とどう繋がっていくかは、浜松の課題なのかなと思います。繋がり方にも、色々なルートが考えられると思います。例えば、浜松浜北ICから天竜川の堤防沿いにもうちょっと拡幅して、そこからずどんと南へぶつかれば、時間距離としては非常に早いかなと思います。それを国道1号線から国道150号までぶつけるといふ。そういうことになれば、磐田、袋井、さらには御前崎、そういったところとの繋がりも、三遠南信のつながりも、もっとできてくるのかなと思います。浜松河川国道事務所の所管ですので、河川の堤防敷の有効活用をしながら、アクセス道路というのはどうなのかなと。

また、三遠南信自動車道は無料の高規格道路ですので、パーキングエリア、サービスエリアがない。ということは、道路情報や地域情報をもったり、トイレ休憩したりするところがない。だったらインターチェンジのところに、道の駅機能があって、そこで休憩したり情報を得たりする。それを地域に還元していくことも考えていくべきではないかと。鳥取自動車道などは無料の高速道路で、国のほうで、道の駅に誘導するという社会実験もやっていました。沿線のインターをうまく活用していくことを、今から考えていったらどうか、と思います。

三つ目には、自動車道が開通しますと、そこに行っても何かができる、目的化していないと通過してしまう可能性が大きいということです。例えば、伊豆の方でも、伊豆縦貫自動車道の本格供用に向けた、立ち寄りのための社会実験をやったりしています。早く着くがゆえに途中で立ち寄りさせる、そういった取り組みも沿線地域、地域で準備していかないと。便利になるから、人が流出して心配だというお話もありました。やはり道も必要だし、道の沿線でそういった工夫をする必要もあるのかなと。先ほど、新野のクライנגルテンの例がありましたが、かなり遠方から来るようになって、静岡ナンバーも増えたと。そういった効果があるわけですが、ちゃんと目的地をつくって、頻繁に行くためには、良い道を使っていく、こういった取り組みができれば、国の中でも自動車道の整備の優先順位が高まっていくと感じております。住民レベルで連携して、地域を元気にしていきたいなと思っていますが、やはりサミットの中でも住民の連携組織、ネットワーク協議会もあるということを知りたいたしながら、うまくつき合っていていただきたい、そうお願いしたいと思っています。

コーディネーター / 豊橋市 佐原市長

以上をもちまして、一通りご意見いただきました。質問とかご意見、ここのところを言っておきたいなということがあれば。

NPO法人地域づくりサポートネット 山内理事長

実は私どものNPOで、昨年度から中部ブロックの道の駅の連絡会の事務局をやるようになりました。愛知県のNPOと岐阜県のNPO3団体が連携してやっています。私どもは静岡県を担当していますが、取り組みが単なる物売りに変わっているということで、道の駅の情報提供を充実すべしという意見が出ております。静岡県ブロック、愛知県ブロックとか、ブロックでやっているんですが、道の駅同士の連携ということが議論させております。そこで、県境を越えた中で三遠南信の色々なことを紹介し合うのを、まず道の駅から始めたらどうなのかなと。「道」のテーマの中でも道の駅は、一つのポイントになるところだと思いますので、意識的にSENAで声をかけていただきながら連携していくことができればと。国交省から道の駅の有効活用と言われております中で、情報の部分、物の交流の部分で道の駅から始めるのはどうか。提案の中につけ加えさせていただきたいと思います。

コーディネーター / 豊橋市 佐原市長

ありがとうございました。それでは意見交換の取りまとめをさせていただきます。

まず1点目といたしましては、三遠南信自動車道の整備により中央自動車道、東名、新東名、浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路（伊勢湾口道路）リニア新幹線と連絡して、新たな繋がりをつくる。そんな交流ネットワークが形成できていくであろうということ。

2点目といたしまして、三遠南信地域の

産業のさらなる活性化、これは力の道ですね。地域と地域を結び、そして海外へもつなげるために三河港、御前崎港とのアクセス向上が必要であるということ。

3点目、これは災害に対して命、絆の道だと思いますが、東日本大震災で高規格幹線道路が大きな成果を発揮しました。医療機関への搬送路、そして災害時の緊急輸送路となる命をつなぐ道として、ミッシングリンクとなっている三遠南信自動車道の整備促進は喫緊の課題であると思います。

4点目、こうした繋がりには自治体の枠を越えて考えなければいけない。この三遠南信という大きな繋がり、そして外のつながりに向けて目を向けた取り組みをする必要があると思います。繋がることで、命の交流、文化の交流、人と人との交流、技術の交流、いろいろなタイプの交流を大いに増進させていく、それが道であるというように思います。こうした取り組みを実現するため、各期成同盟会等の継続的な要望活動、キャンペーン等の実施をする。同時に、各団体の要望活動をSENAが把握し、効果的なアピールができるよう検討していきたいと思います。

以上、皆様方のご協力により、円滑かつ内容の濃い意見交換を行うことができました。お礼を申し上げます。ありがとうございました。

6 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

「技」分科会では、「地域産業の持続的発展を目指した新産業創造と人材の育成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	(株)サイエンス・クリエイト	常務取締役	白坂 敬之介
報告者	豊橋市	産業部長	瀧川 雅弘
	三遠南信地域連携ビジョン推進会議	事務局長	金原 栄行
行政	下條村	副村長	宮島 敏明
	泰阜村	副村長	横前 明
経済	袋井商工会議所	専務理事	鈴木 満明
	奥浜名湖商工会	会長	手塚 二八郎
	磐田商工会議所	会頭	伊藤 卓治
	豊橋商工会議所	会頭	吉川 一弘
	蒲郡商工会議所	副会頭	近藤 克義
	新城市商工会	会長	本多 克弘
	飯田商工会議所	副会頭	萩本 範文
	駒ヶ根商工会議所	会頭	山下 善廣
大学	愛知大学	学長	佐藤 元彦
住民	一般社団法人ここに	代表理事	木下 利春
	花男子プロジェクト	代表	近藤 祐司

(敬称略)

はじめに

コーディネーターノ

(株)サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

皆様、こんにちは。サイエンス・クリエイトの白坂と申します。参加者の皆様、どうぞよろしく願いいたします。それでは事務局から説明をお願いいたします。

事務局

昨年度の「技」分科会では、三遠南信地域連携ビジョンにおける第1期の重点プロジェクトを総括し、第2期に向けての方向性について議論を行いました。討議の結果をまとめると、次の二つとなります。

1点目は、産学官金という連携の枠組み

をさらに強化する必要があること。2つ目に、三遠南信地域連携ビジョンの推進について、大学がどういう形で参加していくかという点について検討する必要があることでございます。

それを受けまして今回は、昨年度の議論を引き継ぎ、さらに発展的に意見交換をするため、また、連携によって生まれる新産業と、これを発展、拡大させるために必要な人材をどうやって育成するかという点に注目し、「地域産業の持続的発展を目指した新産業創造と人材の育成」というテーマを設定させていただきました。

コーディネーター /

㈱サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございます。次に「三遠南信発イノベーション創出を目指した産学官・地域間連携による取り組み」について、豊橋市産業部の瀧川雅弘部長よりお願いいたします。

報告

豊橋市 瀧川産業部長

豊橋市産業部長の瀧川でございます。今日は皆様の議論のもとになるような題材として、三遠南信、特に東三河の事例を中心として、新しい産業の創出に向けての取り組み事例を紹介させていただきます。農業と商工の連携の中で、新しい農業を育てていこうという取り組みを、5年程かけてやってきておりますので、その内容をご説明させていただきたいと思っております。

まず、産業集積の現状を説明させていただきたいと思っております。三遠南信地域には、既に色々な産業が根づいております。大消費地の関西、関東の中間であること。交通インフラが非常に整っていること、それから自動車船という大型船が入れる港がこの地域にある。後背地に大きな工業用地がある。非常に気候が温暖で雪が積もらない。良質な労働力がこの地域にある、これらを大きなポイントとして挙げることができます。これらメリットを活かして、多様な競争力の高いものづくり産業、農業地帯では食品、農業関係、それに関連する産業の集積が進んできたということです。しかしながら、時代の大きな変化の中で色々な課題も見えてきている現状です。

平成20年に三遠南信地域連携ビジョンがつけられ、それをもとにした計画、取り組みがされております。特に平成22年には産業集積と基幹産業化を目指して三遠南信地域基本計画がつけられております。この中

で新たな取り組むべき分野、輸送機器用の次世代技術産業、健康医療関係の産業、新農業、光エネルギー産業、この4つの分野をテーマにして産業振興を進めていくことが位置づけられております。

また、昨年度、浜松・東三河ライフフォトニクスイノベーションが採択されて、今年度から、具体的な事業の取り組みが始まっている状況です。

もう一つ、平成20年度から、東三河と遠州地域の各大学、研究機関の連携を進めていこうと、東海イノベーションネットワークが進められております。こうした中で、東三河は新農業の取り組みを進めているところです。

それではなぜ新農業への取り組みが進んでいるのか、その背景をご紹介します。第一に、この地域は全国有数の農業関連産業の集積があり、農業産出額全国一のエリアでございます。もう一つは、農・工・商の多様な業種がバランス良く展開されている。それから、先端的で高度な研究を担う、豊橋技術科学大学がある。さらに、実はこの地域は非常に温室園芸の盛んなところで、温室園芸の元祖が豊橋市だと言われております。明治34年に中島駒次という方が、ガラス温室園芸でサンショウやトマトをつくったのが最初だと言われております。温室組合が昭和4年に設立され、今まで露地しかなかったものから、園芸という手法がここで取り組まれたということです。

新農業を進めていく上で、その中枢として、株式会社サイエンス・クリエイトがごさいます。平成2年、豊橋市の産業振興計画、サイエンス・クリエイト21計画を推進するために、インキュベーターであるサイエンスコアをつくりました。その整備運営の主体として豊橋市、愛知県、日本開発銀行(現日本政策投資銀行)、豊橋商工会議所と民間企業約100社の出資により設立され

た会社です。異業種交流会を組織して、中小企業の新素材、食品、環境技術等をテーマとする研究会活動や産学共同研究をコーディネートしてきた実績がございます。また、先進的なウェブ技術の教育普及や、メカトロニクスや電子計測などの技術者の養成、それから生産管理や商品開発などの職能別の研修の実施など、各種産業の支援を続けてきた会社です。この会社を中心として農工商連携の枠組みをつくり、その活動を進めています。東三河唯一の産業支援機関でございます。

次に、食農産業クラスターの推進計画についてご説明します。これは、農業、製造業、流通業、外食産業などの食と農を連携させながら、新しい価値を生み出して次世代に繋がる地域産業を育てていくという計画でございます。

豊橋市で平成19年に食農産業クラスター推進計画をつくりました。サイエンス・クリエイティブを中心に推進協議会を設立し、色々なプロジェクトの実施、異業種の出会いに関する支援をしているところです。このクラスター協議会は、130を超える大学、行政、民間企業が会員になっており、同社はその中心として活動しています。

この食農産業クラスターの取り組み事例の紹介です。まず1番目に、新商品の開発ですが、ここでは大葉を中心とした食品の開発をしています。先日、京大、名大の研究グループが発表した研究成果として、大葉は老化とかメタボの予防に効果がある、そういう新聞報道もされております。健康志向を売りにして、新商品の開発・販売をしていきたいと考えております。それから2番目に海外事業がございます。東南アジア、特に香港、台湾を中心として柿やメロンなど、この地域の農産物をPRし、販路拡大事業を行っております。3番目ですが、農業関連技術の開発・普及、これには各企

業と連携しながら、技術開発をしています。例えば、食品の中の異物を検出するような機械、そういったものの開発をしています。最後に、人材育成があります。豊橋技術科学大学を中心に連携しながら、植物工場や6次産業化に対応する人材育成を進めていきたいと考えております。

平成19年から平成22年の4年間で24の事業を立ち上げ、事業全体で1億円ほどの補助金をいただき、14億円の売り上げを出しております。商品の実例が、皆様方の机の上にも置かせていただきましたウズラカッターです。豊橋産のウズラをブランド化し、市場にもっと出していこうという食農産業クラスターの取り組みの一環として、このカッターを研究会の中で地域の企業と協力して製作しています。

それでは、植物工場を中心としたさまざまな取り組みを、ご紹介させていただきます。農業は自然を相手にするものですから、気候や土壌、病害虫に大きく影響され、うまくいくかどうかは、経験と勘に左右される面があります。一方、工業は安定した環境の中で、材料を入れれば一定の時期に一定の量の、一定の品質の製品が計画的に生産されるというのが特徴でございます。農業と工業をいかに融合していくのか。それがこの植物工場の命題でございます。明治の時代にこの豊橋市で、畑で栽培されていたものを、ガラス温室の中に持ってきて栽培した。それを発展させて、工業と農業をいかにマッチングさせていくかが植物工場の開発のポイントでございます。植物工場のメリットとしましては、天候に左右されない環境であるということ。1年中同じ労働時間で労働することができる。1年中生産しますので、安定した収入が確保できる。安定した量と質によって、均等な値段で出荷できる。消費者にとっては安全でおいしい農産物を安定した値段で買うことが

できる、というような点があげられます。そういう栽培環境を科学的にコントロールできれば、農業経験が少ない若者や、新たに参入したい方々、そういう方々でもベテランの農業者と同じように、この植物工場の中で働くことができるだろうと考えられています。この植物工場を支援するために、人材の育成、企業の方々に参加していただく情報交流の場、植物工場で作られたものをいかに販売していくのかという販路の拡大、そういうことをしっかりとやっていかなければいけない。これが総合的にパッケージになって、普及拠点としての形成が図られていくということでございます。

昨年度から植物工場の実証研究事業に取り組んでおります。経済産業省のイノベーション拠点立地支援事業、それから豊橋市の植物工場普及推進事業の補助を活用しまして、全体事業費が約1億3,000万円、そのうち8,000万円ぐらいが補助金でございますが、サイエンス・クリエイトに隣接する豊橋リサーチパークに建設しました。栽培棟は約1,280平方メートルという広さでございます。この植物工場をイノベティブグリーンハウス（IGH）と呼んでおりますが、ここでは、大玉トマト国産品種で日本初となる、10アール（1,000平方メートル）当たり50トンの収穫を達成目標としております。5年間の実証栽培データを分析して、栽培マニュアルをこの中でつくって、それを普及させていきたい。産学官連携による研究をこの中でやっていきたいということです。

プロジェクトの体制ですが、サイエンス・クリエイトと豊橋技科大が事業管理を行います。イシグロ農材を始め、4つの企業が参画企業として、様々な技術を共同研究している状況でございます。豊橋商工会議所、愛知県、中部産業経済局による支援もいただいております。この7月にトマト

が植えられて、1週間ぐらい前に第一弾の収穫が終わっております。最初の収穫でしたので、まだ少し品質が良くないということで、2番なり、3番なりぐらいで商品になるものができてくるだろうと考えております。

この植物工場の実証研究事業では、植物の成長について、二つのポイントがございます。一つは、いかに光合成をしっかりとさせるか。もう一つは、いかに根の環境を良くすることで成長を早めるか。この二つが大きなポイントです。一つ目の光合成の量をいかに伸ばすかについては、光と温度と湿度とCO₂、この四つのバランスをとって供給することがポイントです。その環境を、ハウスの中でいかに作り出せるかということが重要です。もう一つは、根の環境ですね。根に酸素、肥料、水が効率よく行き渡らないと、成長しません。良質な環境をいかに保つかということが重要です。

それでは実験施設の説明をします。まず、循環型の養液システム、アクアビートといえます。植物工場では養液栽培をしておりますが、それを循環させて植物に与えて、また戻し、その際に、どういう成分が使われたかを検査して、また次に養液を出すときに不足する成分を補い与えていくという、循環式の養液システムです。それから循環型の空調システムということで、温度とかCO₂を管理するために、最適な空気をつくって、栽培室のほうに供給するためのシステムです。次に栽培棟の設備ですが、ハイワイヤー栽培と呼ばれる高い天井からワイヤーでトマトの樹を吊るす方式の様子です。長期多段取り方式と言いまして、一本のトマトのつるを高さ3メートルぐらいにつるし、一年間で総延長20メートルを超えらるくらいまで伸ばし、1本のつるから大体40段の実をとることができる栽培方法です。次に、自然エネルギーを活用する設備とし

て太陽光、風力発電なども、実験棟に取り入れています。次に、屋根部分の設備です。特にトマトは、夏の高温障害が問題になります。夏の高温をいかに抑制するか。そのために、屋根や壁面に、光を通すけれども、熱を反射するシートをつけて温度調節をしています。最後にコンピューターでデータ管理分析をするIGHの中核施設のご紹介です。民間と豊橋技術科学大学の共同開発により、全体の空調や養液等の管理と、それらをデータ化し、収量の予測から管理方法の決定を一元的に行うシステムを構築しました。

最後に、新農業クラスターの形成という目標から、今までご説明したことをまとめます。まず、地域の強みというものがある。それから地域の課題というものもある。それら課題を、サイエンス・クリエイトを中心としたさまざまな機関、さまざまな方々の産学官ネットワークの中で調整・解決することが基本となります。とりわけ、人材育成につきましては豊橋技術科学大学と連携し、今年度から植物工場のマネージャー育成プログラムを実施したいと考えています。また今後は、農業経営やマーケティング、商品開発の実務を教える6次産業化推進のための人材育成プログラムに取り組みたいと考えております。

加工食品の販路開拓についても、例えば香港や台湾のバイヤーを招致しての販路拡大、首都圏への販路拡大も、産官学ネットワークの中で進めたいと考えております。さまざまな活動を、よりレベルアップすることで、リーディングプロジェクトとして新農業を位置づけていきたいということが、このクラスター形成の基本的な考え方でございます。

まだまだ新農業への展開は途中段階です。ぜひ、皆様方のご協力をお願いします。ありがとうございました。

コーディネーター /

(株)サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございました。続きまして、三遠南信地域社会雇用創造事業の取り組みに関しましてSENA事務局の金原栄行事務局長から報告をお願いいたします。

SENA 金原事務局長



皆様、こんにちは。SENA事務局長の金原と申します。よろしくお願いたします。それでは、三遠南信地域社会雇用創造事業の取り組みについてご紹介します。

この事業は、平成22年度から23年度の2カ年かけて実施したものでございます。内閣府の所管する事業で、SENAが国の事業募集に応募し、採択をされました。全国から53団体の応募があり、SENAを含め12団体の提案が採用されました。事業費は、当時の予算額で7億円、決算ベースでは5億3,000万円ほどとなっております。

事業目的は、雇用創造のネットワーク・システムを構築し、社会的企業による継続的な雇用を図るというものです。3つの分野について、社会起業インキュベーション事業、インターンシップ事業を行いました。1つ目は、森林ビジネス、地域資源活用ビジネスといった自然資源を活用した雇用創造分野。2つ目に、まちづくりビジネスとして中山間地域ビジネス、地域づくりによる雇用の創造の分野。3つ目に、食農ビジネス、社会福祉介護・医療のビジネスとい

った安心安全を確保するための雇用創造分野。大きく三つの分野を設定しています。

雇用創造のモデル図についてご説明します。インキュベーション事業で対象とした人材は、企業内からの起業者、地域内での起業者、また全国からのインターン起業者を対象としています。また、インターンシップ事業では非就業者、学生、シニア層を主な対象といたしました。

目標数値につきましては、インキュベーション事業では90名を起業支援対象者として選定することを目指し、また、インターンシップ事業では、800名の研修修了生の輩出を目指しました。これらの事業を通じて人材を育成し、社会的企業の起業、社会的企業での就職に結びつけるという事業内容となっております。

次に、推進体制及び基金の運用、管理方法についてご説明します。事業者はSENAですが、さまざまな機関の協力により、事業を推進する体制をとりました。SENA幹事会及び外部有識者により組織される、社会的企業人材育成委員会が総合調整機能を担い、インキュベーション事業の実務は東三河、遠州、南信州の産業支援機関にコーディネート機関としてご協力をいただきました。東三河はサイエンス・クリエイト、遠州では浜松地域イノベーション推進機構、南信州では南信州・飯田産業センターに一部事業を委託して実施しました。

インターンシップ事業では、東三河地域研究センターにコーディネート機関を務めていただきました。そして三つの雇用創造分野に関連の深いNPO法人などを公募し、インターンシップ研修生を受け入れていただく形で事業を進めました。

また、社会的企業人材創出インターンシップ事業の詳しい事業内容についてですが、NPO法人等と連携し、非就業者、学生、シニア層などを対象とした職場体験研修、

いわゆるインターンシップを実施いたしました。社会的企業への就職を支援し、研修修了生800名を目標としました。インターン研修の日数は30日間、2年間で6期の開催をし、各期の研修はおおむね3カ月程度の期間内で実施しました。研修内容の内訳は、研修生受け入れ機関での分野別研修が26日間、SENAが実施する集合研修が4日間です。また、研修生受け入れ機関に対しては、交付金として研修生修了生1名につき13万5,000円を上限に交付しました。受講料は無料で、負担なく研修を受けられる制度としました。また、年収見込額が基準を下回るなどの条件を満たし、かつ研修を修了した方には活動支援金15万円を支給しました。インターンシップ事業の事業実績は、研修修了生数が2カ年で1,070名となりました。多くの研修生受け入れ機関のご協力により、目標を大幅に上回ることができました。

研修の写真をご覧いただきながら、研修の内容についてご説明をいたします。インターンシップ研修には、研修生受け入れ機関での分野別研修と、SENAが実施する集合研修があります。まず、集合研修の様子をご紹介します。集合研修は4日間で、研修生の意識啓発などを目的として、講義、ワークショップ、交流会、報告会などを行いました。東三河地域、遠州地域、南信州地域それぞれで開催し、集合研修の1日目で行われる講演会と、最後に行われる報告会は一般公開とさせていただきます。また、次に分野別研修の様子です。2年の事業期間内、インターンシップ研修に協力していただいた受け入れ機関は、延べ170団体に上り、研修コースは延べ197コースにもなりました。その中から一部ですが、研修コースの実例をご紹介します。まず、「農業をチラ見しよう」というコースです。生産者のもとで農業経営を実

際に経験することで、将来ビジネスとして農業を考えるきっかけをつくるというコースです。研修を通して、これから就職される方や、転職を希望される方に対して、農業をビジネスとしてとらえるための経験や情報を伝えることを目的としたものです。次に、「自然エネルギーを利用する2、または3輪、EV車及び船舶等の開発技術者の育成」コース。太陽光、風力発電、バイオエネルギー発電といった再生可能エネルギーを用いた急速充電設備、EV車やソーラービークルの構造を学ぶ研修でございます。基本的な電気知識や各種バッテリー、充電装置の安全な取り扱いを実地で学習することができる研修です。

続けて社会起業インキュベーション事業についてご紹介します。事業内容は、三遠南信地域において社会的企業の創造・事業化を目指す方を支援する、となっております。「社会起業プラン・コンペティション」により優秀な事業計画を選定し、その策定者に対して、起業までの支援を実施しました。こちらは90名を起業支援対象者として選定することを目標としました。具体的な起業支援の方法として、起業研修講座の開催、起業のアドバイザーの紹介を実施しました。起業者数は、結果として2カ年で78名となりました。事業初年度の平成22年度中に、事業内容を地域へ浸透させることが難しく、プラン・コンペティション参加者を十分に確保できなかったというところが、目標を達せられなかったという点で反省しております。ただ、平成23年度からは通知等の範囲を拡大し、事業の浸透に努めたため、前年度を上回る成果があり、最終的に78名の方々の起業を支援しました。

これはプレゼンテーションの様子です。一次の書面審査を通過した方が、二次審査でプレゼンテーション審査を受けます。選定された事業計画の策定者は、SENAお

よびインキュベーション機関から起業の支援を受けることができる仕組みです。ここで起業につながった実例をご紹介します。まず、農家・民宿を開業された方の例です。中山間地域の生活を体験してもらうため、茶摘み、園芸、果樹栽培、シイタケの栽培、炭焼きなどの豊富な体験メニューを実施されています。次に、GPSなどを活用した森林データの収集、間伐事業、地域木材の活用の企画・運営など、NPO法人を設立された方の例です。山間地の過疎化に伴う不在山主の増加、森林の資産価値の低下、地域住民の高齢化という問題の解決に取り組んでいらっしゃいます。最後に、発達障害児の病育や発達障害児を持つ家庭の育児相談を行う児童デイサービスを開業された方の例です。地元の小学校、幼稚園、保育園、保健センターなどと連携をし、発達障害児の早期発見、早期療育にも取り組んでいらっしゃいます。

起業支援講座の様子を写真でご説明します。起業支援対象者となった方々に対して、基礎から実務まで、起業の際に必要な知識の習得を目的とした研修講座を開催しました。基礎編では社会的企業の概要、心構え、基礎知識などについて、また実務編ではビジネスの手法、パートナーシップの手法、経理、マーケティングの分析、資金調達などについて実践的な講座を受講していただきました。

このように、社会起業インキュベーション事業では、起業支援対象者が実際に起業するまでの支援を行ってきました。しかし、今後も継続して経営を続けていくためには、経営相談などの起業後のフォローアップが欠かせません。そこでSENA及び三遠南信地域経済開発協議会の共同事業として、フォローアップ事業を実施します。事業期間は平成24年9月から25年3月までを予定しています。こちらに事業目的として、主

な三つを挙げています。まず、社会起業インキュベーション事業の効果の継続的な把握と検証、起業された方々の追跡の調査をし、確認をさせていただく。それから起業者の事業の広報ということでございます。そして起業をこれから目指す方々への実践ノウハウの提示ということで、実際に78名の方が起業されていますので、こうしたノウハウについてもご紹介をさせていただきたいと、目的を3点掲げています。

何よりも2番目の起業者の事業の広報という点が重要で、商工会議所等が主催するビジネスマッチングなどのイベントで、こういった冊子を配布することで、起業者の広報について支援をしていきたいと考えています。

それでは、最後にSENAが今後進める事業についてのご紹介です。三遠南信地域連携ビジョンにける重点プロジェクトのうち、国内外に向けた人材・企業誘致の活動促進という項目に、人材育成が位置づけられております。本日ご紹介した社会起業インキュベーション事業のフォローアップ事業は、この人材育成という点から実施されるものでございます。そしてもう一つ、国土交通省からの委託事業として官民連携主体による地域づくり推進事業を実施しております。人材育成という点から、仮称ですが、三遠南信大学シンポジウム・人材育成円卓会議をSENA主催で開催する事業予定となっております。SENAは大学、行政、企業、市民団体の連携、あるいは県境連携という点から、今後こうした事業を通じ、人材育成のための環境整備の取り組みを検討してまいりたいと考えております。報告は以上です。ありがとうございました。

意見交換



コーディネーター /

㈱サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

ありがとうございました。それでは、意見交換に移ります。最初に、三遠南信地域で行われている新産業創造のための取り組み、あるいは既存産業に活力を与える取り組みに関しまして把握していきたいと思えます。

豊橋商工会議所 吉川会頭

豊橋商工会議所の吉川です。本年の4月に産業振興を図る広域連携組織として、東三河広域経済連合会を設立しました。東三河の三つの商工会議所、そして13の商工会で、広域的な観光、また、人材の育成、ものづくり産業の振興について取り組んでいるところでございます。今からご紹介をさせていただきます二つの取り組みも、連合会の枠組みの中で実施をしているものづくり振興の一環ですので、ご理解を賜りたいと思えます。

一つ目は、東三河産業創出協議会の取り組みについてご紹介します。東三河産業創出協議会は、平成17年度から5カ年にわたり、経済産業省から産業クラスター事業として補助金の採択を受け、豊橋、豊川、蒲郡の三つの商工会議所が中心となって、ものづくり企業のネットワーク化や新産業創出に関する事業を行ってまいりました。平成22年度からは三遠南信クラスター推進会議の事業を受け持つ形で事業を継続してい

ますが、それ以外にも健康医療産業や次世代輸送機器産業の分野においても事業展開しているところです。今年度からは、東三河広域経済連合会の設立を受けまして、三つの商工会議所から、枠組みを東三河全体に広げさせていただきました。その上で事業活動を企業連携マッチングや人材育成の分野にも広げて、取り組んでいるところでございます。今後、ものづくり企業のネットワークを東三河全体に広げながら、販路の拡大や取引先の開拓などに繋がる事業を展開していく予定です。

二つ目は、ものづくり博2012 in 東三河の開催についてご案内します。従来は豊橋商工会議所に事務局を置く、豊橋ものづくり振興会の主催で、地域のものづくり企業の情報発信の機会として、2年に一度、ものづくりフェアを開催してまいりました。今年度から、東三河県庁が設置されたことに呼応して、東三河広域経済連合会を設立いたしましたので、ものづくりフェアを見直して、東三河地域全体でもものづくり企業の博覧会を目指していこうということになりました。名称も新たに「ものづくり博」と改めて、企画・準備を幹事会組織のみならず、全ての東三河の商工会議所、商工会が関わって取り組んでいるところです。11月30日と12月1日の2日間、豊橋市総合体育館において、東三河を中心とする81の企業団体が出展をいたします。ぜひ、遠州地域や南信州地域の方にも、足をお運びいただければ幸いです。

袋井商工会議所 鈴木専務理事

袋井商工会議所の鈴木です。袋井商工会議所の最近の取り組みを紹介します。袋井商工会議所は、現在会員が1,575事業所ということで、組織率が59%の小規模の会議所です。会員の減少はどこの会議所でもあるわけですが、来年度、創立20周年

を迎えますので、この時点で20年前の商工会設立時点の1,600事業所の会員確保を目指して、今年度取り組みを始めたというところでございます。

地域産業に活力を与えるというテーマです。それに関連する事業をご紹介します。社会や経済、環境、そういったものが大きく変化している我々の経済界ですが、一つは国際化、グローバル化、もう一つは農商工と学の連携、農業の6次産業化、これらをキーワードに23年度、アジア産業交流委員会と農業産業部会を発足しました。ちなみに全国514の会議所の中で、農業の部会を持っているところは全国初と伺っております。今年4月に定款の変更も済ませたところでございます。

初めに、アジア産業交流委員会でございます。グローバル化している産業界の中で、地方の商工事業者も影響を少なからず受けております。それに対応するため、袋井の出身で、明治の時代から国際的に活躍された方に焦点を当てまして、現在ベトナム、台湾、タイ、中国と、特にアジア地域との経済交流が図れないか、ということで取り組みを始めたところでございます。特にベトナムとの交流は、ベトナム独立運動の父と言われておりますファン・ボイ・チャウという方がおられますが、この方と袋井出身の浅羽佐喜太郎という方との交流がございまして、現在その方を顕彰するお墓、記念碑が袋井にございます。ベトナム総領事が交代した際に、そのお墓にお参りをさせていただいたということがありまして、非常に人脈的に太いパイプがつながっております。これを経済交流に生かせないかと、現在取り組みを始めたところでございます。特にこの静岡県の西部や三河地域の大学には、たくさんベトナムの留学生の方がお見えになっております。そういった方を受け入れてのホームステイ等も始めまして、フ

アン・ボイ・チャウ氏を顕彰する碑にもお参りをさせていただいたりして、交流をしているところです。

もう1点の農業産業部会ですが、先ほど瀧川部長から豊橋市の取り組みをご紹介いただきましたけれども、平成22年に商業部会と工業部会の合同視察会で豊橋市のサイエンス・クリエイトを視察させていただきました。ここで勉強させていただきまして、すばらしい先進的な取り組みだということで、袋井においてもこの取り組みを始めたわけです。袋井はもともと農業のウェートの高い地域性でしたので、農業の資源が色々ございます。現在、主な農産品の出荷額としましては、クラウンメロン、袋井茶、袋井のお米という、三つの主な農産品があります。これらが大半を占めており、110億ぐらいの年間生産額です。この地域資源を生かして、今後、農商工連携を深め、袋井の特産品を生かした新商品の開発、販路の開拓、これを進めていきたいというものでございます。ちなみに、食農産業クラスター推進協議会にも参画をさせていただき、今勉強をさせていただいております。具体的な取り組みとしまして、今年度、中小企業庁、日本商工会議所の地域力活用新事業無限大全国展開プロジェクト事業にエントリーをさせていただきました。袋井のクラウンメロンにはギャバという成分が多く含まれています。これを活用した健康飲料、最近ブームのエネルギー飲料の開発の取り組みを始めたところです。

飯田商工会議所 萩本副会頭

飯田商工会議所の萩本でございます。地域の産業振興という観点から考えますと、地域にはこれを牽引する二つの主体があると思っています。一つが商工会議所、あるいは商工会だろうと思うのですが、もう一つは、行政並びに工業界が参加する従来の

地場産業センターです。今は公益財団法人南信州・飯田産業センターとなっておりますが、ここが主として産業、工業を中心にして活動する形で、いろいろな取り組みをして新しい産業を振興させようというように取り組んでいます。穏やかなお話をしたい気持ちには変わりはないんですけれども、今の経済の激変はとてものではないけれども、穏やかな物言いで済む状態ではなくなっているということ、実は深刻に受けとめております。この論議の中でも、本当はしっかりと取り上げてほしいなという気持ちでおります。

奥浜名湖商工会 手塚会長

奥浜名湖の手塚です。奥浜名商工会は奥浜名湖を取り囲む三つの田舎の商工会が合併してできた会員数1,200名程の商工会でございます。御多分に漏れず、廃業が多く悩んでいるところでございます。今皆さんが言われたような、新規産業というよりも、商工会の会員は零細企業ばかりなものですから、親が商売をやめるときに、息子にやめておけというような、そういうお話も多々聞きます。今若者がどうしてもやる気を出さなければいけないものですから、合併した3商工会の青年部、若い連中が異業種を問わず色々な勉強会を通じて、何かできないものだろうか。地域に密着した、地域ならではの企業ができることを、今色々勉強をしているところでございます。

工業のほうも、二次でなくて、三次か四次の下請が非常に多いものですから、技術的なものを勉強して、地域の大学に聞きにいくところがあれば、またご指導願って、勉強させたいと思っております。

駒ヶ根商工会議所 山下会頭

駒ヶ根の山下でございます。私ども駒ヶ根商工会議所は三遠南信地域連携ビジョン

推進会議の最後の会員として、ちょっと地域的に離れているものですから、別な角度でお話をします。

駒ヶ根は長野県の上伊那郡エリアに入っています。工業出荷額では松本、長野に次いで上伊那郡が第3位という立場でした。しかしアメリカのリーマンショック以降、景気の低迷の中で上伊那を何とかしなければいけないと。諏訪地域には、諏訪メッセという大きな工業展示会があります。全国350社ぐらいが出展をしていると思います。これを見習って上伊那も何かやろうということになりまして、まずお互いにどういう会社がこの地域にあるのか、お互いを知ろうということから始めました。結果的に初年度は百五、六十人の参加者でしたが、3回目のときには1,200名を超えるような来場者が来て、大分賑やかになってまいりました。そんな取り組みから、地域で工業の振興に力を入れていこうということをやっております。

駒ヶ根商工会議所の一番の事業としては、テクノネット駒ヶ根という異業種交流集団を中心に、人材育成をやっております。経営体質強化のための基礎的な研究会や、講習会の学習活動等の研究会活動を実施しており、時々ニーズに応じて幾つかの研究会が企画されております。リーマンショック以後の、経済の激しい動向の中でも、あまり倒産が起こらなくて、まがりなりに我慢できているのは、こうした研究会を通じて、企業の個性をどう生かすかということずっと勉強してきたからこそだと思います。私どもの地域もサプライヤーの2番目から5番目ぐらいまでのような下請が多いものですから、大変なわけでありましてけれども、そういうところでも個の力をつけるために勉強をやってきた努力が、今何とか少しずつ報われているのかなというような気がしております。

下條村 宮島副村長

下條村の副村長の宮島でございます。本日は三遠南信自動車道の一部開通による企業進出効果と人材育成ということにつきまして発言させていただきたいと思っております。

まず、三遠南信自動車道の一部開通の企業進出ということですが、平成20年4月に飯田中央道からの飯田山本JCTから天龍峡ICの7.2キロが供用開始となりました。これを受けまして当村に名古屋市の企業が工場を開設したいという希望がございまして、村では平成21年1月から約4,000平方メートルの土地の用地買収と造成を行い会社に引き渡しまして、22年3月に工事を完成して操業を開始しております。この工場はアミューズメント機器の液晶の生産ということですが、さらに昨年から本年にかけて工場の増築をされているということで、既存企業への雇用の波及という点では非常に歓迎をしているところでございます。この進出理由でございまして、飯田の天龍峡ICから車で5分という距離でございます。このように一部開通でも企業の進出は可能であるというように思っているところでありますし、これからも期待しているところでございます。

それとあわせて人材育成の関係でございまして、このような企業進出の中で非常にレベルの高い技術者が求められています。特にコンピュータグラフィックデザイナー、ハード、ソフト含めて電子技術、それから情報技術、制御技術の技術者が特に求められています。しかし、上田市に長野県の工科短大がありますが、残念ながら南信にはございません。南信地区にも必要だということで、県の検討会に入っているところですが、産学官での早い対応を望んでいるところです。

花男子プロジェクト 近藤代表

日本一花をつくるまち、この東三河を、日本一花を贈るまちにしようという合言葉で活動している花男子プロジェクトと申します。よろしく申し上げます。東三河は花を日本一つくる生産地でありながら、地域の花の需要がなくて、ましてや日本一の花の産地という認識も認知も全くないというまちでした。国内のフラワービジネスは平成10年をピークに、約半分になってしまったビジネス業界です。ここに本当にイノベーションを起こさないといけないという気持ちで、僕たちは活動し始めました。そして、そこにはやはり花が物売りという考えになってしまっていたので、やはり花は人と人をつなぐもの、人から人への思いを伝えるものというものを新しい価値として、花の価値として創造していきたいと考えています。そして花男子プロジェクトから既存産業に活力を与える取り組みとしまして、花男子プロジェクトは新しいエンターテイメントであるフラワーパフォーマンスというものを軸に行っています。このパフォーマンスによって、花の力を多くの方に体感してもらおう。花の力というのは自分たちでやっていてよく分かったんですけども、理屈ではないものですから、花から始まる感動のストーリーをつくるということを一生涯懸命パフォーマンスして、その体感された方の感動の一瞬や表情を、画像やコメントの形で雑誌や新聞、テレビメディアで全国に発信して行って、フラワービジネスのイノベーションを行っていきたいと活動しています。そこから花の力、東三河を花のまちということにして、新しい花文化を創造して、新しいフラワービジネスを展開していきたいと考えています。

コーディネーター /

(株)サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

皆様のお話、ご報告を伺ってありましたら、それぞれ各地域で産業集積の特徴を生かした形の取り組みが各地で進んでいるということが明らかになりました。続いて今回のテーマである「地域産業の持続的発展を目指した新産業創造と人材育成」の人材育成という点について、議論を深めていきたいと思えます。地域産業が持続的に発展するためには、それを支える専門的な人材、創造性豊かな人材の育成、確保が必要だと考えます。その際の課題、それに対する解決策等について、ご意見を伺わせていただきたいと思えます。

泰阜村 横前副村長

泰阜村副村長の横前明と申します。よろしく申し上げます。

泰阜村には企業と呼ばれるようなものは2社しかございません。今後も企業誘致というようなことは、可能性は低いだらうと思っております。そんな泰阜村でございませぬけれども、村内2社のうち、1社は多摩川精機株式会社の子会社である多摩川精機エレクトロニクス株式会社です。多摩川精機株式会社はご存じのように優良企業でございませぬので、その子会社ということでもございませぬけれども、今後この会社を支えていく優秀な人材が、後々確保し続けられるかと言えば、優秀な人材は中山間地には乏しく、かなり難しい。ハードルが高いだらうというように思っております。つまり、誰でもいいというわけではなく、工業系の会社なら、やはり工業系の大学を卒業する見込みの皆さん方、若い人材が欲しいというところだと思えます。ですから、どういった情報を発信していけば、それなりの人材が確保できるかという、情報発信の手段というものも、やはり課題かなと私は思っております。

また村にしてみれば、企業の存続があれ

ばこそ、そこに雇用が生まれる、ひいては村も存続できるということに繋がってくるわけでございます。そこでIターンとかUターンの受け入れも可能になってくるわけでございます。そういったことを考えますと、自治体も企業と一緒にあって、優秀な人材の確保を考えなければならないと思っております。泰阜村では行政主導で人材を確保いたしまして、つまり行政の臨時職員ですね。そのような形で採用して企業へ出向させていただいております。昨年からですので、まだまだこれからでございますけれども、後々はその企業でリーダーシップのとれるすばらしい人材に育成していただいて、数年たった暁には企業へ移籍して採用してもらおうと、そのようなプロセスでやっていければ、泰阜村からも企業が撤退することなく、現存の企業へ支援を講じていくのが行政の仕事だと思っております。

飯田商工会議所 萩本副会頭

豊橋や浜松にはそれぞれ工科系の大学があるのですが、飯田にはございません。逆に言うと、フリーハンドにいろいろな大学との連携を模索することができる。実は、近くにあるから相応しい連携ができるかという、必ずしもそうでもございません。技術というのは大変に狭い分野で特化したことをやらなければいけませんので、そういう意味で言えば、広く研究者を全国で訪ね歩いて連携するというのが、技術の世界では絶対に必要なわけで、近くにあるからそういう連携が成立するとは限らないと思うんですね。そういう意味で言うと、飯田には残念ながらないんですけれども、逆に、非常に多くの全国の大学との連携が起こっているし、そこから新しい産業ネットというものも生まれてきているのではないかと思っております。

新城市商工会 本多会長

新城市商工会の本多でございます。うずらの卵カッターが今日テーブルにあるとは思わなかったんですが、これは佐原市長がうずらの卵が大変な目に遭って何とか救いたいと。何とかならないかということで、私どもの会社が考えてつくったものでございまして。要するに今、困っていることがビジネスになるということでございます。何とかならないかという話がいっぱいあるわけですから。

先日、私の会社である本多プラスがカンブリア宮殿等マスコミで取り上げられました。何故かと言えば、新城だから大変だと、ハンディがありながら良くやるな、ということです。トヨタ自動車の影響が大きい地域でありながら、自動車の下請をやらなかったと。プラスチック製造の仕事ですけれども、やはり自分で考え自分でつくって、自分で売るという信念でやってきた。今までの話を聞いていると、起業家に対する恵まれた条件がいっぱいあるんですけれども、私が起業したところは何もなかったわけですからね。ないない尽くしで、それがかえって、「この野郎」という思いです。

起業家というのは、親がいけないんですね。親が、一流高校へ行かせて、一流大学へ行かせて、一流の会社に入れるというのが夢ですから、そんなことをしてばかりなんです。と同時に今の商工会の会長をやっている分は、廃業する人が多いんですね。要するに後継者に悩んでいるわけです。イノベーションと言いますが、やはり自分の親を超えろとか、一代一事業という、そういう起業家を教育しなければいけないわけですね、今の会社をイノベーションしなければいけないんです。製造業が中国へ流出していったけれども、今大変な目に遭ってしまっているわけですから。

奥浜名湖商工会議所 手塚会長

私どものところは人材育成と言うか、ある程度の若い人を中心に勉強会をやっております。皆さんの話を聞いて、近くに大学があるとか、いろいろな技術をいろいろ教育してもらおうとか、呼べばいいというような話を聞いたものですから、今後その点を考え、来てもらうのではなくて、どんどん行けばいいと思って、そういう方向で考えております。

磐田商工会議所 伊藤会頭

磐田商工会議所の伊藤でございます。人材育成についてですが、私どもの地域は輸送機器産業がベースですので、グローバル経済の変革によって大変なダメージを受けて、現在、一番の問題は雇用問題ということになります。対策として、どうしても人材育成、または新しい新産業の創出をしなければ、というわけで、1年前に厚生省の地域雇用創造推進事業に参画いたしました。8,000万円の補助金を得て、磐田市地域の雇用創造推進協議会というのを設立しました。会長は磐田商工会議所でございますが、メンバーは各会長、民間企業、農協、農林事務所、商工会です。商工会というのは磐田の市町村合併で商工会がいっぱいあったものですから、その商工会の人、それから磐田市の産業部と官民挙げて体制を組みまして、実際の事業には地域の大学の先生方も入れるというようなことで、今やっております。

実際に雇用創出のための事業としてやったのは、経営基盤の強化、農業経営、次世代交通セミナー、バイオマス等々新しい事業のセミナーと一般主業、工業基礎訓練コースの講習会をやっております。それと別に技術のマネジメント、IT、経営、チャレンジ就農、外国人就業の支援と創造支援、企業の支援ですね。そういうことも手がけ

てやっておりますが、やはり新産業の創出というのがその中に入ってこなければいけないので、別途新産業創出の協議会を立ち上げております。

目的は、次世代の輸送機器の工業分野、農商工の連携、バイオマス、食品分野、観光、商業、スポーツ等々、中小企業の経営基盤の強化ということで、これも官民挙げて、大学も入って、そういう体制でやっているのが現状です。結果としまして、事業期間は今年いっぱいまであるわけですが、雇用創造については利用企業が331社、利用人数が890人、就業支援で来た人数が90人ということでございます。雇用問題に力を入れないと我々も立っていけないわけですから、注力している実情がでございます。

花男子プロジェクト 近藤代表

人材の育成と確保、それに関する課題ということですが、自分がお花のプロジェクトをやっている、一番問題にしているのは、今のフラワービジネスの産業の中だけで考えていくと、なかなか新しい発想が出てこなかったことです。プロジェクトのメンバーは花の卸会社、フローリスト、花屋、生産者、マネジメントは税理士、社労士が入って成り立っています。フラワービジネスをイノベーションしていかなければならないというところに立ったときに、同じ産業の人と意見を出し合っても、なかなか古い慣習が破れないというのがあります。そこを破ってくれたのが、異業種の税理士さんだったりします。異業種のメンバーから、こんなプロジェクトをやったら面白いのではないかと始まったのが花男子プロジェクトであります。古い慣習の中には良いことも悪いこともあるんですけども、何が課題だったかということ、お花屋さん特有の職人気質というのがとても問題でした。職人でなければできない。農業もそういった

職人でなければできないという考え方がはびこっていたものですから、そこを壊さないとイノベーションできないなと思いました。

先ほどのご報告の中で、農業を経営として考えるといった部分ですが、自分も会社を経営しているので分かるんですが、厳しい目で見るとなかなか農業を経営として考えられない。そこで、農業の人材育成、雇用創出のために第一に考えなければならないのは、今の農業よっての生産者の所得を向上させることではないかと思いました。

現在の需要ではなく、お花の新しい需要を国内でつくって、そこへ売り込み、お花をつくる生産者の所得を向上していかないと、なかなか若い就農の方も出ないですし、今いる農家さんは高齢化が進んでいて、国内のお花の生産というのは減っていくだろうなと思います。そこで僕たちは、まずは販路拡大、需要の創造ということを考えれば人材も増えていくのではないかなと思って行動しています。

蒲郡商工会議所 近藤副会頭

蒲郡商工会議所の近藤でございます。商工会議所の取り組みについて、簡単にご報告したいと思います。

人材育成ということですと、商工会議所は、事なかれ主義、マンネリ、お客さんに対する取り組みについて、ちょっと希薄な点があるかと思っています。そこに危機感を持ちまして、今回人づくり委員会を設置して、提案をいただきました。その提案によって、従来ばらばらで企画していた講習会等を一元管理し、責任者を明確にして、年間のスケジュールもはっきりさせて、重複や無駄の排除に取り組んできました。実績として21講座、延べ96日、参加者760名と、かなり先が見やすくなったのではないかなと思っております。今回、東三河広域経済

連合会の人材育成事業として、3商工会議所、13商工会が一緒になった東三河産業アカデミーがセミナーを行うこととなりました。特にコスト面、講習会に対する参加者の募集等について、手を携えてやることで効果が出るのではないかと考えております。ただ、こういう人材育成は、ニーズを持った企業が、その気になってくれない限りは何ともならないわけです。環境に適應できない企業はしょうがない、というぐらい危惧をもって取り組まなければ、と思っております。

最後に1点、人材育成について、申し上げておきたい事例があります。今、自動車産業に身を置く立場からしますと、海外へ出ていくというのは当たり前です。国内で飯が食えるかということ、なかなか難しいというのが現在の環境だと思います。したがって、先ほども申し上げたように、海外へ出ていける企業、力を持った企業というのはより強い支援が必要と思われます。強い企業をどう支援していくかが、大切だと思っております。

そういった中小企業が海外へいく場合、一番悩ましいのは「経営」という点です。物づくりは自分たちの技術を持っていますから十分できますが、経営ということについて、非常に苦労しています。経営というのは、経理、総務、労務の総合ですが、特に人数がちょっと増えてきますと、すぐに労務問題が起こります。組合問題が起こります。それと税務の問題、特に関税の問題というのは、担当がイエスといったから、このことはオーケーだよねと主張したとしても、次の担当者は、それは前の担当者が間違っていたというぐらいのことを平気で言います。知的財産権の対応も大変です。そういった、ものづくりを離れた、経営について支援をいただくことが大事だと思っています。

私が思う解決策は、大手の経営スタッフでやる気のある人を、いかに中小企業に取り込むか。これが大切だと思います。定年まで無事勤めて一丁上がりという人は絶対だめです。特に大学にお願いしたいのは、語学に精通した留学生を多く抱えていただいて、企業に振り向けていただくということが、ありがたい支援だなと思っています。

コーディネーターノ

㈸サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

人材育成、あるいは確保を目指した取り組みが三遠南信各地で既に幾つもされていることがわかりましたが、また課題も浮き彫りになってきています。海外進出の場合の非常に難しい問題をお聞きしましたが、もうちょっと広域的に、あるいは業種を越えて、分野横断的に情報収集、情報発信をしていく三遠南信としての仕組みづくりが急務になっているのかなという気がします。それではそうした課題解決に向けて、大学など教育、あるいは研究機関の役割がますます重要になってくるだろうと思いますが、教育・研究機関と連携して取り組みたい事業、あるいは教育・研究機関に期待することについてご意見を聞かせてください。

袋井商工会議所 鈴木専務理事

袋井には地元で静岡理工科大学があります。大学との連携ということで、袋井市に産学官連携推進協議会を設置していただいております。ここには行政のほかJA、商工会議所も参加をされており、連携が深まっていると思います。講座の開催や研究会の支援を進めていくわけですが、特にイノベーションの推進、この事業を進める母体となる機構、これを是非設置していく必要があるかなと思っています。今後、協議会に集まったメンバーで、検討していく必要があるかなと感じております。

蒲郡商工会議所 近藤副会頭

教育・研究機関に期待することを、産学連携という面から申し上げます。ここ1年ほど商工会議所が産学連携のコーディネーターになる形で、会員各企業にテーマ（ニーズ）の登録をしていただいて、それを大学に持ち込んで先生とマッチングをやるという形でやってきていますけれども、ほとんど成功事例はありません。

というのは、一つは、企業は非常に成果を求めたがります。教えてちょうだい、つくってちょうだい、何してちょうだい、そのような形の取り組みというのが非常に多くて、まだまだ不勉強だということです。一方大学の先生は特に新規性を求められていて、公知の事実之余り熱心な状況ではないということです。産学連携というのは、余りにも言葉が踊り過ぎていないかということです。言葉に踊らされて、聞いていれば気持ちは良いけれども、そんなもの簡単にできるわけないし、ほとんど成果は上がっていないのが現状ではないかと思います。私は足かけ2年間、この担当をやっていて成功事例がないです。なかなか難しいです。

そんな中、私は大学の先生にお願いしたいのは、そう難しい大上段に振りかぶらずに相談役になっていただきたい。要は、困り事相談というぐらいの形の産学連携をスタートしていただけるなら、私はいろいろな成果の道が開けるのではないかと期待しております。

豊橋商工会議所 吉川会頭

2点提案をさせていただきたいと思いません。

1点は大学と企業が一体となった人材育成に向けた取り組みに関することです。地域の大学は研究機関である一方で、地域の企業等で働く人材の供給源という役割があるのではないかなと考えております。地元

企業の立場から見ますと、なかなか地元大学を卒業しても地域の企業へ就職してもらえないという思いがあります。地元企業には競争力があって、十分に活躍の場が与えられるような企業がたくさんあります。そういう企業でも、優秀な人材を採用しにくい状況です。社員数が多くない中で、地域の中小企業は、企業の存続を考えなければいけないという課題があります。

一方で学生は、自分の能力が生かせる企業が地元にあるかどうか知らない状況で、他地域に就職先を求めていく例もあると聞いております。こうしたミスマッチを防いで、地元への人材の定着を進めるためには、三遠南信地域の枠組みの中で、大学と企業による地域の人材の育成と採用について、議論をする場を設けることが必要ではないかと考えております。これまでの大学フォーラムの開催等の実績から、SENA事業として実施していくことが望ましいのではないのかと、本日の議論で感じています。

2点目は、人材育成の観点だけではないんですが、平成20年度に立ち上がりました三遠南信地域連携ビジョン推進会議の後継となる新連携組織に関する提案です。さきの提案内容も踏まえ、現状の行政、経済界による組織を中心としながらも、大学の機関や地域、そして金融機関、NPOなどが参画できるような、複合的に組織されていくような形のものをつくっていったらどうかと考えているところです。

愛知大学 佐藤学長

通常、産学連携というと、どうしても技術系を中心とした研究面での産学連携という話になってしまうと思います。非常に重要な柱である点は変わりがないと思いますが、もう一つ、教育の産学連携が重要になってくるのかなと感じております。

就職問題に端を発して、大学に対して経

済界がさまざまな形で教育のあり方について問題提起をするということが続いております。コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、そういったものについての問題提起があったわけです。そういう問題提起をする仕組み、機会をこの地域として考える必要があるのではないかと思います。

この三遠南信地域の大学間の連携は、ただ単に高等教育の面で大学がフォーラムをつくっていく、連携をしていくんだという話ではなくて、地域と連携をした大学の連携組織のあり方を考えていく。そういう検討が必要だと思っています。私の個人的な感想ですが、大学のフォーラム、大学のシンポジウムの準備の中で、高等教育をどう補完していくか、連携の対象が大学同士に留まる議論が多くて、地域とどう連携していくのかという議論があまりされてこなかった印象を持っています。

そういう観点からすると、来年の年明け早々に、大学や経済界等の関係者が集まった人財育成円卓会議を開催するのは、非常に意味がある取り組みではないかと思います。その中で企業、あるいは民間の方々が大学に求めている人材像とはどういうものなのか。それに対して大学はどのような対応ができるのかということ、胸襟を開いて議論するというのが、まさに出発点になるのかなという感じがしています。

さらに言えば、人財育成は大学だけではなくて高等学校だとか中学校も含めてという話になると思うんですね。地域の発展を担っていく場合に、一流の大学、一流の高校という気持ちは分からないわけではないんですが、実際はどのような教育が必要なのかということについて、議論する場があってもいいのかなと。高大連携だとか中高接続だとか、そういうことも視野に入れて、人づくりを考えていくことが必要だと思っ

ています。

円卓会議に関してもう1点ですが、大学と民間企業、あるいは経済界との関係というのは、決して近接性だけが問題になるわけではありません。大学フォーラムを検討する過程の中で「別に三遠南信地域に所在する大学に限定する必要はないでしょう」と申し上げました。むしろ三遠南信地域に関心を持って、三遠南信地域を盛り立てていこうとする大学であれば、どこの大学も参加してもいいのではないかと。なかなかそこには、多分一気にはいけないと思いますが、そういう視野を持って考えるのも一つの方法ではないかなと思っています。

そして、会議を開くだけではなくて、どういう養成すべき人材像を描くのか。それに基づいてどういうように人材を育成していくのかということ、10年ぐらいの計画として立てて、その計画に基づいて具体的なプロジェクトを動かしていくことを検討すべきと思っています。先ほどご紹介をいただいた、社会雇用創造事業も含めて、10年計画でどういうものが立てられるのかを検討すべきだと思っています。

最後に本学の宣伝にもなるかもしれないんですが、愛知大学は文部科学省のグローバル人材育成推進事業に採択をされました。全国で41大学ですが、全体的な分布を見ていると東海四県では、愛知県で2件採択されただけ、愛知大学と愛知県立大学だけなんですね。大学が地域との関係において、グローバル人材をどう養成していくのか、そういう意味では心配になるところであります。ただ愛知大学について言えば、毎年200名の学生を4カ月間中国に送り込んで、徹底的に現地で教育をしております。それをもう15年間続けておりますので、延べ3,000人がそういう教育を受けております。現在日中関係は、非常に緊迫した状況にはあります。しかし多くの方が言われるのは、

経済的にはやはり切っても切れない関係である、その文脈の中で、地元にそういう大学があるということもあわせてご承知をいただければと思います。

コーディネーター /

(株)サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

皆様、ご発言ありがとうございました。様々なご意見を伺いましたが、次の3点ぐらいに要約できるかと思っています。これを「技」分科会の報告とさせていただきます。

1番目に、三遠南信各構成員の取り組みとして新事業、新産業創出という面で、この地域に国内外から「人」、「物」、「金」が集まるような魅力ある新産業、あるいは環境を創出、集積する必要があるということ。

2番目に、これをさらに発展・拡大させるためには、必要な人材をどうやって育成するかということについては、県境連携、あるいは大学、行政、企業、市民団体の連携という点から、仕組みづくりを検討する必要があること。

それから3番目、これら環境を創出する取り組みの一環として、SENAの事業として産官学金連携による議論の場として円卓会議を企画・実施していくこと、ということになるかと思います。これらの意見を「技」分科会の取りまとめ内容として、後ほど行われます報告会で、私から報告させていただくと共に、サミットの宣言の中に取り込んでいただくように話をします。

皆様のご協力によりまして、内容の濃い意見交換が出来ました。ありがとうございました。

7 「風土」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

「風土」分科会では、「ご当地グルメを通じた三遠南信地域ファンづくり」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	財団法人 阿智開発公社	理事長	羽場 睦美
報告者	豊川市観光協会	副会長	笠原 盛泰
行政	浜松市	市長	鈴木 康友
	豊川市	市長	山脇 実
	高森町	町長	熊谷 元尋
	天龍村	村長	大平 巖
	愛知県	副知事	永田 清
経済	掛川商工会議所	会頭	川合 和雄
	磐田市商工会	会長	野寄 宏之
	浅羽町商工会	会長	大石 重樹
	音羽商工会	会長	石川 豊久
	渥美商工会	会長	石本 健一
	作手商工会	会長	権田 淳男
住民	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子
	愛知大学総合郷土研究所	研究員	平川 雄一

(敬称略)

はじめに 事務局

本分科会の運営は、コーディネーター財団法人阿智開発公社 羽場理事長を財団法人阿智開発公社理事長の羽場睦美様にお願いして進めてまいります。それでは、羽場様、よろしくお願いいたします。

コーディネーター/ 財団法人阿智開発公社 羽場理事長

皆様、こんにちは。羽場でございます。風土の分科会は、今回グルメ、食を中心としたわかりやすいテーマで進めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。最初に、昨年度の風土分科会のまとめ、今回への経緯をご説明いただきながら進め

させていただきますと思います。事務局、よろしくお願いいたします。

事務局

それでは、前年度の議論のまとめと今回のテーマについて、ご説明します。

まず、前年度のまとめについてですが、前年度の風土分科会では、第1期の重点プロジェクトを総括し、第2期に向けての方向性が議論されたところがございます。まとめると次の2点ということになります。

1点目は、地域社会は少子高齢化の中でも人が地域に入ってきてくれる多くの仕掛けをつくる必要があるということです。祭りや地域食材等の活用による各種イベントの実施、人材バンクの設置、伝統芸

能の継承などが事例として挙げられました。

2点目は、行政、経済界、地域住民、NPO、NGOの団体といったさまざまなセクターが仕掛けづくりを自主的に進めていくことが重要であるということでした。行政は行政で、経済界は経済界で、民間は民間でと、それぞれのセクターで、またはセクターの枠を超えてイベント等を企画して、外から人を呼び込むことなどが挙げられました。

それを踏まえ今回の議論のテーマですが、さらに具体的、発展的な意見交換を行うため、地域支援の中でもとりわけ注目を集めるご当地グルメをテーマとします。そして、ご当地グルメを活用し、観光客等を呼び込む工夫について議論したいと思います。また、呼び込んだ観光客を持続的な三遠南信地域のファンとするために、ご当地グルメの三遠地域全体でのネットワーク化について意見交換をするという意味で、「ご当地グルメを通じた三遠南信地域ファンづくり」という今回のテーマを設定させていただきました。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。食を通じて地域を活性化させていくか。そして、それをネットワーク化していくかということで、皆様のご議論いただきます。

ちなみに、今日、私、ここへ着きまして、豊川稲荷のほうに行ってみまして、門前でおいなりさんをちょっとつまませていただいて来たところでございます。

それでは、早速に豊川市観光協会副会長の笠原盛泰様にご報告をお願いします。

報告

豊川市観光協会 笠原盛泰副会長



皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました豊川市観光協会の副会長、そして、「いなり寿司で豊川市を盛りあげ隊」の隊長という立場なのですが、もともとは民間の中小企業の経営をしております笠原と申します。今日は貴重な機会をいただき、ありがとうございます。

「豊川といえばいなり寿司」、そして来年のB-1グランプリ全国大会と、今日お招きにあずかった理由は、豊川はいなり寿司で盛り上がっているようだ、その内容は一体どういうことなんだ、ということだと思っております。ですが、B級ご当地グルメ、いなり寿司を外から見ていると、なぜそれらがマスコミに取りざたされるようになったのか、ひょっとしたらちょっと思っていることと違うこともあるのではと思います。そのあたりをお伝えできればなと思っております。まず「いなり寿司で豊川市を盛りあげ隊」の沿革をお話して、そしてB-1グランプリの本旨というか、中身をお話して、それに伴って考えられることを報告したいと思います。

「いなり寿司で豊川市を盛りあげ隊」ですけれども、当初、平成16年頃から始まりまして、豊川商工会議所で豊川いなり寿司のブランド化を始めました。当初は寿司商組合で豊川名物いなり寿司などを販売し、農協のグリーンセンターなども協力して販売をしていきました。ここまでは、特にブームというところまでは行っていなかった

のですが、地元に基づいて、豊川いなり寿司の形が始まったというところです。

その後、山脇市長が就任されるときに、マニフェストでいなり寿司のブランドの全国展開を掲げて当選されたことが大きなきっかけになりました。

それを受けて平成20年に豊川市の中でブランドの研究会が発足し、平成21年3月に第1回の豊川いなり寿司ブランド推進委員会で、私が委員長をお引き受けする形になりました。正直に申し上げて最初話が来たときに、すんなりオーケーしたわけではなく、非常に懐疑的で、豊川いなり寿司といっても、そんなにいなり寿司を市内で食べている人が多いわけではないし、確かにいなり寿司屋さんはあるのだけれどもまだ根づいていないということで、非常に懐疑的な物言いをしたところでありました。ただ、民間人、市民を中心にやってほしいということもありましたので、ではお受けしますと、全くのボランティアで委員会を立ち上げた。その中で事業者の方、我々のような民間ボランティア、行政のメンバーなどが入って、「いなり寿司で豊川市をもりあげ隊」が7月に設立されました。

その年の11月に豊川いなり寿司の寿司フェスタをやろうと。そこから豊川いなり寿司の定義を始めたのですが、実はこれが豊川いなり寿司だ、というのがなかなか決められない。既に色々ないなり寿司が豊川稲荷の門前にありまして、その段階でお米はこれ、いなりの揚げはこれ、ということを決めても、乗ってくる人がいないものから、困った挙句に、色々あるのが豊川いなり寿司でいいじゃないか、ということになりました。既に数十種類あったいなり寿司を逆手にとって、豊川といえばおいしくて楽しいいなり寿司がたくさんあるんだということで豊川いなり寿司という定義づけにしました。

そして、いなり寿司フェスタですが、この段階ではまだ6,000人しか来ておりませんでした。公認のマークも決めました。いなり寿司のマイスター制度として、2日間事業者への講習を行いまして、衛生的なこと、販売、マーケティングなどを講義して、結果として公認のマークを持つのぼりを渡して進めていきました。

この時点で中日本愛Bリーグの正会員への昇格申請をしまして、B 1グランプリ全国大会の厚木に初出場が出たところ6位に入賞して、ブレイクした。その後、歌をつくったり、それから今年の夏に東日本大震災の支援活動を行ったりしています。この厚木の大会に行った段階で、市長や会議所の皆さんも含め、全国大会を豊川に持ってこられたら素晴らしいな、という思いが膨らんでおりまして、その誘致活動しながら昨年はまずは中日本大会という支部の大会を主管することができました。この段階でも20万人以上の人出がありました。それが大成功したこともありまして、今年の1月に来年の第8回B 1グランプリ、豊川の開催が決定した。記者発表からここまで、一気に盛り上がってきている感じです。

平成22年度のもりあげ隊活動における愛知県内の経済波及効果が約40億円と試算されています。23年度のテレビの本数が71本、もりあげ隊によって出されています。新聞については237回の掲載と、大きなPR効果もある。昨年調べたところ、新聞などで、いわゆるお寺の「豊川稲荷」よりも、「豊川いなり寿司」という言葉の掲載数が増えたということもあって、B 1グランプリをきっかけに大きく盛り上がった形です。

最初に商工会議所などによるグルメの掘り起こしがあって、行政のブランド研究があったのですが、ここで市民参加の任意団体を設立し、愛Bリーグに加盟して

活動を精査し、B 1グランプリでブレイクしたと。昨日、NPO法人の設立総会をやらせていただいたところもありまして、商標登録を申請しているところです。B 1グランプリへの参加と、入賞などによって活動がブラッシュアップされてきたということです。

B 1グランプリは、グルメイベントではなく町おこしイベントであると言っています。

B 1グランプリは、今年10月に北九州で大会を行います。第1回目は八戸で行われまして、その段階ではまだ10団体でありました。第1回の25万人から、第5回の厚木大会で46団体の43万人、そして、昨年が姫路で50万人以上、今年の北九州も63団体の参加ですので、豊川の参加予測団体数も60から70ぐらいで、50万人以上の人出が予想されます。

誤解の無い様に強調したいのですが、B 1グランプリはグルメ大会ではないと。本部でもかなり強く言うのですが、本当に違う形でありまして、まず60団体が飲食店の出店ではないと。これはまさに我々もそうですが、市民の町おこし団体の出展にこだわっています。それから、全国で誘致しよう、自分たちが出ようと思っても、愛Bリーグの正会員にならなければ参加できないという会員制の組織であるということです。

グルメイベントではなくご当地のPRイベントですから、参加しているボランティアたちは、ほとんどがイベントに出て赤字です。赤字でも行くということは、その目的は、そこに出てPRして、地元を集客を呼び起こすために来ているわけです。その仕掛けとなっていることが、単なるグルメイベントと大きく違います。特に当日の集客ではなく、後日の各地集客が目的で広報しています。お金を使って、当日へ向かっ

て宣伝することができません。したがって、報道で取り上げてもらうのに、非常に四苦八苦するわけです。

また、パフォーマンスやイベントが盛りだくさんです。特に中心市街地で分散開催することが決まっております、町おこしをベースにしています。厚木では町に人があふれて、靴屋さんの靴が売り切れたという話もあったということです。順位を決めますが、それ以上の出展効果が目標であると。業者には委託せず、全出展者が主催であるということもあって、グルメ大会ではなくて、町おこし団体が発表して、開催地だけではなく出展者の地元の継続集客に大きく貢献するツールです。

特に、愛Bリーグに加盟する団体は、異業種の住民が集う町おこし団体で、行政や会議所がサポートし、代表飲食店事業者ではなく、事業者は認定店などというのが義務づけられています。その活動組織の主体は、町おこしのボランティア団体です。豊川もそうですが、行政、観光協会は、事務局や予算などでフォローして、会議所や商工会もフォローしてくれている。飲食店はあくまでもサポートで、この距離感にある関係が重要だと思います。

愛Bリーグでは、正会員になる段階で日常的な町おこしの実態を精査されます。入会審査があって、ちゃんと町おこしで活動している、B 1グランプリに出るためだけにつくられた団体は基本的には正会員になれないということで、かなり厳しく精査されます。しかし、入会すると、B 1グランプリ知名度で、非常に注目されると。その後、商標登録などによってタイアップ商品が出てきます。豊川いなり寿司もタイアップ商品が幾つか開発されていまして、基本的に商品の2%がロイヤリティーと決められています。2%のうちの1%は愛Bの本部、1%は各出展団体で、多いところ

では1,000万円を超すロイヤリティーが入っている団体もあると聞いています。我々はまだそこまで行かないのですが、確かによくできたストーリーだと思います。

私の考える町おこしのポイントということで、今までも地域でボランティア活動などをやってきた中で、欧米などの中心市街地の活性化の事例などもお話を聞いたときに、そもそもはダウンタウンの荒廃などによって、治安の不安に対して住民運動が先にあったと。そして、NPO団体が組織されて、ニューヨークなどでは州法で固定資産税の何パーセントかを団体に渡すというような法律ができ上がっていると。運動があって団体ができて法律ができる形が相応しい中で、今までのやり方は、先に法律ができて、団体ができて、なかなか運動までいかないという。その実態を見ると、やはり市民の企画や市民主体の運動が先に必要なのではないかと。そして、行政や他機関の協力が得られる。私もNPOを幾つか作っているのですが、ボランティア活動でありながら自主財源というのが、非常に難しい。楽しみや話題性がある、市民活動としてモチベーションが上がる必要があると。そして、地場企業の参会、協力が得やすい。誰もが分かりやすい。そして、効果、影響が実感できる。人が成長できる。それが、町おこしの継続的な運動のポイントだと思うのです。愛Bリーグの理念とB1グランプリの活動は、このポイントをよく押さえているな、と感じて、私なりに関わっているところです。

注意しなくてはならないのは、観光客向けの商品は、逆に受けなくなってしまうことです。今回の愛Bもまず自分たちの地元を受けられるかどうか、というのが重要な点と考えています。そして、地元が盛り上がって、その後、遠くから来てもらうことで継続される。B1の正会員の精査の一

番大きいのは、運動の継続性です。補助金ある段階までその運動ができて、そこが途切れた途端に終息してしまうというケースがたくさんある中で、どうやって運動を継続していけるか、ということが重要です。その中で、やはり活動する市民側が主体、あるいは民間が主体ということはどう出すかということ、今回、各団体60団体の姿を見ていて思うところがあります。

最後に、私が思う地域の力は、行政の力と市民の力と地元の企業の力が掛け算になることだと思っています。私は地元の経済人ですが、市民として、ライフワークとして今後もかかわっていきたくと思っています。以上で報告とさせていただきます。ありがとうございました。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。何かご意見、ご質問等がございましたらお受けしたいと思います。

豊川市 山脇市長

今、全国でもそうだと思いますけれど、門前町が大分疲弊をしております。参拝客も大分減っている状況で、何とか元気づけられたらなという思いがございました。いなり寿司の研究会があるということで、ぜひブランド化しよう声をかけまして、行政主導ではなく民間の人たちが頑張ると、行政はそれをお手伝いするというスタンスで来ました。

一番いい効果が出たなと思っていますのは、もりあげ隊の隊長の笠原さんと、それから観光協会の事務局長に公募で就任していただいて、そのお二人の動き、観光協会の会長さん初め、そういう方の動きが大変素晴らしいもので、本当に盛り上がってきたと、次は全国大会というところまで来た

ということですが。

最初に豊川の門前町を何とか、参拝客が増える方策はないかなという思いが最初であり、それがうまく連携ができたかなと思っているところです。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。それでは、ご当地グルメを通じた地域おこしの取り組み、そういった活動のプロモーション、について具体的なお話を賜りたいと思います。

意見交換



浜松市 鈴木市長

「浜松といえばウナギ」と言われますが、今、さまざまな食材、あるいは地のものを生かした試みが行われております。笠原さんのお話にあったように、やはり民から上がってくる力を我々がいかに支えていくかということですが。

一番目に紹介するのは、最近ブームになっている「浜松餃子」でして、「いなり寿司で豊川市をもりあげ隊」に相当する「浜松餃子学会」があります。市長に就任をした直後に、浜松市の餃子消費量が日本一だという情報が入りました。若い人たちが浜松餃子学会というのを立ち上げ、これで浜松を盛り上げようと、第2回の富士宮のB-1グランプリに出展すると。そのときに「市長、ちょっと一緒に行って盛り上げよう」

と言うので、市長になって最初の仕事で行き、浜松餃子の宣伝をしてきました。そこからスタートして、全国的に有名になってまいりました。B級グルメブームにも乗り、最近では宇都宮との餃子バトルを行いました。浜松餃子まつり2012にも全国各地から出展があり、初めて宇都宮が参加してくれました。これがまたいい宣伝になり、今、テレビでも取り上げられています。これからは宇都宮と連携して餃子文化発信をしていきたいなど。こういう都市間の連携というのもとても大事になってくると思います。

二つ目に、最近地元の人たちが頑張っているのは、「牡蠣カバ井」というのをつくりまして、要はウナギのたれ、浜名湖の牡蠣を使って、浜松特産の玉ネギをあしらっているのですけれども、これが日本テレビの全国新・ご当地グルメ選手権で準優勝をとりました。これをベースに、浜名湖観光圏事業として牡蠣カバ井も入れた、浜名湖どんぶり自慢ラリーコンテストをこの10月から開始する予定です。

三つ目は、もうブランドになっていますけれども、「三ヶ日みかん」。ミカンで売っているのではなくて、六次産業化の中で色々加工していこうと、「JAみっかびとサントリー」が共同開発した「三ヶ日みかんハイボール」が今ブームになっています。三ヶ日みかんのエキスをを使って色々なスイーツを作ったり、輸出商品として国外へ輸出していこうという取り組みもしています。

最後に、ちょっと毛色の違う取り組みを紹介します。浜松の地域、特に山の方のお茶は非常に品質のいいものがとれます。カネタ太田園というのがありまして、ここが、全国トップクラスの産地である静岡において、県内でナンバー1のお茶の認定をもらいまして、洞爺湖サミットでこのお茶が使われたのですけれども、それをもとに神奈川の会社が高級お茶飲料というのをつく

りました。「M A S A(マーサ)」とって、独特の製法から水出しで新しい飲料をつくるのですけれども、1本2万円ぐらいするのです。これが、高級レストランとかで、アルコールの飲めない方にいいということで、広がっています。私もこれは応援しなければと、この前も環境大臣会合で、使ってもらいました。国際会議ではアルコールの飲めない方が大勢来ますから、そういう人たちにはぴったりの飲み物であります。民間の力で開発したものを我々がサポートして広げていくということで、まさに民の力と官の力を掛け合わせて浜松も取り組んでいるということでございます。

高森町 熊谷町長

高森町長の熊谷です。よろしくお願ひいたします。高森町は飯田市の北隣にあります。1万3,500人の小さな町です。昭和32年に二つの村が合併して高森町になりました。その二つの村の一つの名前が「市田村」という村でした。いま、南信州全体の地域ブランドとして「市田柿」が知名度を向上してきているのですけれど、その市田柿の発祥の町として、市田柿を使って農業、産業振興を図っていきたくと力を入れています。市田柿は毎年暮れに高島屋ですとか伊勢丹で年末のギフト商品に扱っていただいております。近隣ではグルメ丼が有名になってきているのですが、高森も何かできないかなと、民間の皆さんにも知恵を借りながら、外から持ってくるのではなく、地元にある市田柿を使って何かできないかと考えましたが、市田柿そのものを召し上がってもらったほうが、加工するよりはおいしいと、なかなか実現しませんでした。

そういう中で、ニジマスの一種でアルプ

スサーモンというお魚がありまして、切り身が市田柿を切ったときと同じようなピンク色をしているものですから、この魚を使って何かつくるかとなりました。民間の皆さんが「アルプスサーモン丼」という丼をつくってくれました。今、このアルプスサーモン丼を町内のお店で1,000円以内で提供する、のぼり旗を掲げて一生懸命取り組みをしております。また、町のホームページに載せたり、広報紙でPRしています。毎年2月に子ども議会というのがあるのですけれど、子供たちからは「町はアルプスサーモン丼と騒いでいるけれども、私たちは食べたこともない」と言って痛いところを突かれました。子供たちの給食にでも出して食べてもらおう、そんな計画もしていますが、調理が難しいというようなことで、子供の口にはなかなか入りません。子供が行ったときには安く提供してほしい、そんなお願いもしています。また、子どもたちからは15年先のリニア中央新幹線の駅弁に使ったらどうかといった提案ももらっております。

知名度不足ですけれども、まずは町内で、あるいはまた飯田下伊那で知名度を上げて、そのことがまた元気なまちづくりにつながればいいなと考えております。

掛川商工会議所 川合会頭

掛川商工会議所会頭の川合でございます。掛川は何といてもお茶が主力で、郊外はお茶畑ばかりなのですが、やはりちょっと売り上げが低迷しています。何とか価値のあるお茶を高い値段で買っていただく努力をするわけですが、昨年1月にNHKの「た

めしてガッテン」で、掛川の深蒸し茶を飲むとガンに効果があると取り上げられました。そうしましたら、ものすごい勢いで売れました。こんなにも売れるものかと。各お茶屋さんのお店の在庫が空になるほどよく売れたのですが、3月11日の東北の大震災で、放射能の問題があるではないかと発表されましたら、ぱたっと止まってしまいました。今もって、なかなか回復できません。そういう中でも、やはりいいお茶をつくらなければと、掛川を代表する高級茶として天葉(あまね)というブランド名で「やぶきた」「さえみどり」「つゆひかり」の3品種を茶商さんたちが選りすぐりによって、少ないですけど何キロかを用意しました。飲んでみると非常においしいと、今それを売り出しております。

また、茶商さんの呼びかけで「わらびもち」を市内のお菓子屋さん7店舗で販売しています。これは、徳川家康公が掛川を訪れたときに、掛川の城主でありました山内一豊公がお茶とわらびもちでおもてなしをしたと言い伝えられております。わらびもちとお茶とセットで販売されているのが最近の特徴でございます。

グルメとしては、掛川では「自然薯」という山芋です。これを各飲食店がダシはサバのダシでやるんだと統一して、16店舗で始めております。

また、昨年11月にB級グルメコンテストを商工会議所が主催して開催しました。掛川産のお米でつくったお米のパンに、掛川の牛肉と豚肉でつくったハンバーグを合わせた「掛川夢 Dog」が最優秀になりました。今年もそれを拡大してやっていきたいと思っております。

音羽商工会 石川会長

旧宝飯郡音羽町の商工会です。豊川市音羽地区は、東海道の36番目の赤坂宿として

知られているのですけれども、昔ほどの活気はなくなってしまう、商店街ももうなくなってしまったような状態です。とはいえ、御油町から赤坂、そして宮路山、そういった歴史ある観光資源があるということで、何とか東海道を中心に盛り上げていきたいと考えています。

そこで、音羽、赤坂では「みそめし」というのが昔からありまして、御飯とおみそ、ネギ、油揚げを混ぜまして、即席で昔駕籠かきであった雲助に食べさせたと言い伝えられています。特に宮路山のもみじ祭りのときに音羽商工会で20年ほど前「雲助めし」と名付けまして振舞ってきたわけですが、そのみそ飯、雲助めしを、さらに発展させまして、「雲助いなり」と、そういう名前を考えました。秘伝の方法でみそ風味のおいしい雲助いなりをつくる方法を編み出しまして、10月13日、「愛知を食べにおいでん祭」で打って出ようと考えております。

また、地元産で「音羽米」というお米があります。生産者と消費者が提携して減農薬のお米づくりを目指しております。20年以上この提携が続いておりまして、おいしい、ブランド化されたお米ですが、そのお米を利用して「雲助いなり」をつくって出品していきたいと思っております。

音羽、赤坂は今でこそ商店街もなくなってしまうましたが、ウォーキングなどで観光客も見えます。まずは観光客に来てもらい、その上で食べることを楽しんでいただけるような、そういった何かを考えていけたらなと思っております。

渥美商工会 石本会長

平成19年度全国展開支援事業として補助金を申請し、貝づくし事業委員会「貝づくし渥美」を立ち上げました。当初は伊良湖岬の特産である大アサリをPRしております。

したが、大アサリでは当たり前過ぎてイメージが弱いとして、渥美に古くからある郷土料理「渥美あさりの押し寿司」を特産品として開発し、全国的にPRすることを決定いたしました。あさりの押し寿司はお祭り、特に秋祭りの日に家庭料理として振る舞われてきました。また、現在も一部の地域ではつくっておられます。

平成19年10月から東京ビッグサイトや地元イベントで試食会を実施しまして、その後1年間、パッケージや見た目等を検討し、平成21年2月から渥美あさりの押し寿司を特産品として販売しました。22年より期間限定、1月中旬から5月末までの土曜、日曜、祝日で販売も1日限定100本として販売しております。

現在の販売店はスーパーマーケットのフードオアシス渥美の4店舗と道の駅伊良湖クリスタルポルト、田原のめっくんはうす、あかばね口コステーション、お亀堂カルミア店、伊勢湾フェリー鳥羽乗り場の計9カ所で現状、販売しております。

1本6貫入りで800円、ちょっと高いかもしれませんが。年間販売数は約6,000本。現在はPRとかもあって少しずつ知名度が上がっております。今後は年間を通じて販売を検討したいと思っております。特に渥美の昔の味を覚えていらっしゃる方がよく買いに来るというのが、「これで今日は終わりかね」という感じで、なつかしみながら欲しがっておられました。

さらに、4月8日を貝の日に設定して、日本記念日協会に登録いたしました。毎年開催しているイベントは、貝祭りを2月初旬、菜の花祭りにあわせて開催しております。また、渥美半島では、田原市商工会さんが展開しました「渥美半島井街道」を田原市の食堂全店でそれぞれ違ったネタで井をつかって、来るお客さんに満足していただいております。

作手商工会 権田会長

作手商工会の権田でございます。私どもの地域は7年前に市町村合併が行われまして、新城市、鳳来町、作手という3市町村が合併しました。旧経済団体の新城商工会、鳳来商工会、作手商工会が1行政区にまだ併存していましたが、商工会の合併推進委員会を立ち上げまして、来年3月には合併する準備が進んでおります。

作手商工会は、山間地でございますが、平成23年度から「奥三河に来て、見て、作っ手プロジェクト」を立ち上げ、「奥三河バーガー」を開発いたしました。私どもは予算規模も非常に小さく、特徴的なプロモーションは行っておりませんが、「できることをやる」をコンセプトに積極的に各種イベントに参加するなどして、一同に地域の活性化に取り組んでいるところでございます。奥三河バーガーは地域特産のお米、ミネアサヒを使用しております。奥三河では年間700~800頭に及ぶイノシシが捕獲されておりますので、その肉を利用してイノシシ、奥三河バーガーとして研究を進め、一同に活動しているところです。私どもの作手地区は、年間を通じてイノシシの捕獲制限がございませんので、そうしたところを有効に利用して、イノシシ肉のミンチを使い、奥三河バーガーを地域外のイベントを出品し、PR活動をさせていただいております。6店舗で販売させていただいております。今後も地区外のイベント等へ積極的に出展してPRし、地域の活性化、商人の活力にしていきたいと考えております。

天龍村 大平村長

現在は「ていざなす」というナスを、伝統野菜として3、4年前から力を入れてPRしております。ていざなすというのは、明治時代に田井澤久吉さんという方がナスの種を持ってきて、以来ずっと個人で栽培

してありましたところ、こういったグルメの時代になり、村でも力をいれてやりましょうということで、現在、生産者組合もつくりながら力を入れております。ナスというのは本当に一般的な野菜でして、どこにもナスというものはございますが、ていぎなすは大きくて柔らかいことが特長で、方々からご注文をいただいております。私も先頭に立って、東京方面を中心に料亭やホテル等に売り込みをしまして、大きな注文をいただいております。

本当に小さな村でございまして、そういったものを手がけておりましたも一大生産化するような力はございません。耕地も少ないし人口も少ない。ましてや長野県で一番の高齢者の村と言われている村でございまして、携わる人もなかなか若い人がいなくてできません。しかし、携わっている人に少しでも望みができるようなことをフォローしていきたいということで、今取り組んでおります。

もう1点は私の持論として、任期1期に1品ずつそういったものをつくりたい、天龍村のアンテナをつくりたいということで柚餅子を今やっております。そして、今年は「ドラゴンフルーツ」を初めてつくりました。今年は辰年ですからドラゴン。天龍村の龍でドラゴンと、こういうことでやっておりますが、これは気候の関係で、実がなるのが遅れて、ようやくなり出したところです。まだ海のものとも山のものとも判りませんが、そういった気持ちで取り組んでおります。小さい村ではございますが、今後ともよろしく願いいたします。

磐田市商工会 野寄会長

磐田市商工会も観光協会が主体になって「おもしろカレー」というのをやっています。「おもしろ」というのは豚足です。磐田市というのはもともと養豚業が盛んなところで

して、市内へ製品として売れるものはそのまま売ったのだけれど、地元の皆さんが足なんかは地元で消費するんですね。

「おもしろカレー」は観光協会が中心になってやったのですけれど、我々商工会はスイーツコンテストをやろうと、市民の皆さんに参加をしていただきました。スイートピュアトマトを利用した「いわたトマトの輝き」という作品が最優秀賞になり、トップ、2番、3番というような順序づけをしたのですけれど、やはり市民から盛り上がるボトムアップで商品開発をして、地域の活性化をねらっていくという方法も一つの方法であろうということやっております。

盛り上げ方としては、地域振興としては、上からのやり方と、それから市民が積極的に参加していくやり方、二つ両方を使っていくのがいいのでは、というのが私の感想です。

浅羽町商工会 大石会長

浅羽町商工会の大石です。私、個人的にもお茶屋なものですから、静岡のお茶は原発事故以来、本当に風評が厳しくて難儀しております。色々な茶業関係者、皆、大変な状況を迎えております。本当に原発問題は真剣に考えていかななくてはいけないと、まず私ごとですが、申し上げたいと思います。

浅羽町商工会は平成17年に袋井市と合併した旧浅羽町を担当としておまして、約2万人、400会員の小さな商工会であります。3年前商工会長を承るときに、食品衛生協会の役員さんに、「商工会に入っても何も意味がないではないか、会員と非会員の差別化ぐらいしろよ」とこういう話をいただきました。田舎ですから、言いたい放題言いながら、「いや、それはいいけれど、ともかくみんなも頑張っ、自分の店を繁栄

させるように一店一品運動をやれよ」ということを、私のほうから逆提案を申しあげました。私どもの商工会は商店街といえるものが無く、商店が点在しております。非常に商業の弱い商工会ということもありまして、何とかしなければいけないという思いがありましたから、ぐっと言われたのでやり返したということです。

3年が経過し、平成23年6月から食品部会の有志8店舗の皆さんが「おはたき研究会」をつくってくれました。業種としては寿司屋さん、ハンバーガーショップ、それから大衆食堂、大衆酒場、スナック、喫茶店、食事処、地産地消ピュッフエレストラント、こういう8店舗、それぞれ違った皆さんがそれではやってみまいかという気持ちで集まっていたきまして、みんなでレシピを考えました。その中から今年の5月、19、20日とエコパのB級グルメスタジアムinエコパに出店するにあたりまして、統一商品として「おはたき肉まき」を出店させていただきます。ものすごい売れ行きでして、1日目は1時に売り切れ、2日目は12時20分にギブアップという形で2,600本売り切りまして、本当に涙が出るような、始まる前の日は売れ残ったらどうしようということだったのですが、本当にありがたい思いをいたしました。

この「おはたき肉まき」の原点、「おはたき」というのを皆さん、ご存じでしょうか。遠州地方の伝統的な呼び名、文化ということとして、私の子供の時からありました。お米をつくり、もみすりをします。もみすりをしますと、精米機の下にくず米、小米が落ちてくる。それをおはたきと呼んでいまして、もったいない精神でそれを蒸して、杵で突いて、丸い棒にして輪切りにして、おはたき餅というものをつくりました。私も子供のときには、3月ぐらいまで毎日食べさせられるものですから、実は一番嫌い

な食べ物だったのですが、時代が変わりまして、普通のお餅に比べておはたき餅というのは結構食感がいいのです。そのような、江戸時代からずっと遠州地方に伝わっていたおはたきを使い、商品化したということです。

私どもの考えておりますのは、まず地産地消の徹底、やっとできたご当地グルメのアピール、それから若い人、お年寄り、だれでも親しめるおはたき餅料理をアピールする。そこから、それぞれの店へ来ていただくということを最大の目標にしております。まだ始まったばかりで、これから研究することがいっぱいあるうかと思っております。

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

今年もまたお世話になります。まだ「村おこしだ」「地域おこしだ」なんていう言葉もない頃に、若妻グループが「柚餅子」作りを始めて40年、私も後期高齢者になってしまいました。三遠南信にも関わって同じくらいにお世話になって参りました。

柚餅子との出会いは公民館活動で天龍村の暮らしの総合展示会があり、そのなかにもありました。いまここにおいている天龍村村長の大平さんが当時、教育委員会で企画してくれたものでした。

全く柚餅子を知らなかったで真っ黒い変な固まりだなと思ったのですが、薄く切っていたいただいたときの上品な香りと奥の深い味にすごい感動をしました。家に帰ってお姑様にお聞きしたところ「昔はよく作ったものだが、今は作る人も食べる人もいなくなつたよ」と話してくれました。

800年余りの歴史ある隠れ里の食文化、武士の携帯食として作り伝えられてきた伝統ある物をなんとかして次の世代にも伝承できるようにしたいと考えました。この地には国の重要無形民俗文化財になっている冬

祭りがございます。全国から民俗学の先生方や学生さんがたくさんおいでくださいます。お酒のおつまみとしてお出ししたことから思いがけなく商品化することになったのです。全く素人ばかりの集まりで歴史上にもないことを始めただけに大変なものでした。

私たちの住んでいるところは村の中でも小さなところでイノシシやシカの数の方が多くなり、人口は30人を切ってしまったような地域です。でも祭りも手抜きすることなくやっており、暗くなるということもなくやっております。柚餅子のおかげで販売活動だけでなく文化活動にまで三遠南信地域のみなさんが大勢おいでくださいますが、道路が狭いためバスが上ってこられないこともあります。

2010年9月には長野県の料理研究家の横山タカ子先生の講演会も先生のご厚意で行うことができ、浜松や豊橋もみなさんも参加してくださり、今まで漬物になって関心がなかったのに目から鱗だと喜んでもらい、ぜひまたやってくださいと言われました。コンサートではカネットの合唱劇をやっていたことで、飯田にも合唱劇のグループができました。

幸いにもこの地にはほかにはない熊谷家伝記という古文書もあり、毎日のように行なわれるお祭りも私たちの宝物になっております。

こうした山間地で生きるには宝物を守っていくにも人が足りないのです。交流によって助けられています。三遠南信自動車道の開通のおかげで浜松も豊橋も近くなり、このエリアのみなさんに大きく感謝をしています。

コーディネーターノ

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。そういったさ

まざまな催し、仕掛けがなど多くのご発言をいただきました。これを花開かせていくための方法論やアイデアとかいうものはどういったものが考えられるでしょうか。

豊川市 山脇市長

いなり寿司のブランド化で、大きな力を発揮しているのは、ゆるキャラだと感じています。豊川は「いなりん」というキャラクターですが、すごい人気になっております。今日も会場に入るときに、豊橋のゆるキャラにお迎えいただきましたが、これも大切なPR手法だと思います。

「いなりん」は色々なグッズを開発しており、歌もできました。やはりキャラクターそのものだけではなくて、それに派生する色々なことで盛り上げることができると思っております。

愛知大学 平川研究員

平川です。この6月に三遠南信地域で地域づくり活動を行っている地域住民組織やNPOが一つにまとまって、連携しながらさらに活動を展開していこうという目的で、「三遠南信住民ネットワーク協議会」という組織の立ち上げ準備にかかわらせていただきました。私自身もこれまでにずっと三遠南信地域全域に足繁く通い、さまざまな人や団体、モノの交流と連携、そして情報の動きについて調査・研究をしてきました。

そういう立場で今回、この席でどのようにして地域づくりにおいて連携しネットワーク化していくかということをお話しさせていただきます。

情報発信ということがずいぶん前から言われています。その中で当たり前ようになってきているのがインターネットを利用した情報発信になると思います。この分科会で事例として話題に取り上げられた各地域のご当地グルメについては、もうすでに

インターネットを通じて情報が発信されています。ただ、インターネットに頼った情報発信はかなり限界があるということが、以前からいわれていますし、私自身もそう感じております。

そこで、ここで確認しておきたいのはデジタルでの情報発信だけではなく、アナログという情報発信も忘れてはならないものです。インターネットが充実してきた結果、膨大な量の情報が氾濫している状態です。情報はデジタルだけでなく、情報弱者にためにもアナログを利用することも忘れてはなりません。最近流行しているフェイスブック、そしてブログやホームページによる情報発信も盛んに行なわれていますが、私はここであえてそのことに触れずに申しますと、デジタルとアナログをどのように使い分け、地域の多くの方々に効果的に利活用してもらうか、さらなる工夫や仕組みづくりが必要だと思えます。

先ほども少し申しましたが、個々の取り組みはもうすでに情報発信されていますが、限界があります。個々の事例を有機的に結びつけて「三遠南信」という枠組みで情報発信することを考えた場合に、どのような形で組織化や統一化し、情報発信していくかということを通じて、すぐにも具体化して行動に移していかなければならないと思えます。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

フロアの皆様からのご発言等がございましたら、ぜひご参加をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

飯田市商工会議所 柴田会頭

風土というテーマの分科会に初めて出させていただきました。豊川稲荷から始まりまして、鈴木市長さんからはウナギはもち

ろんですけれども餃子の話、さらには高森の熊谷町長さん、市田柿の話等々、グルメを使って町おこしをしているということに対しまして、大変関心と感動をいたしました。さらにこれをもっと、それぞれの地域でもっと極めて、三遠南信地域だけではなく広く「日本に何々あり」というようなものに育っていただけたらうれしいなと思えます。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。もうお一方だけ会場からご意見を賜りたいと思いますが、いかがでしょうか。どうぞ。

豊橋青年会議所 久保田理事長

豊橋青年会議所の理事長をやっております久保田と申します。それぞれの地域がやっているということはもちろん知っているので、やはりこれをいかに繋げていくか。個別では皆さん一生懸命やっつけらっしゃると思うのですが、豊橋も「カレーうどん」というのをやってはいるのですが、それをどう繋げていくのかというのが大事な事なのではないかなと思えます。

あと、三遠南信に住んでいる方それぞれが本当にそれを各地域のやっていることを知っているか、と言われると意外と知っていないというのが正直なところ。私も東三河の辺はやはりなるべく休みの日とか出たりして知ってはいるのですが、では南信州の方というのは本当に知っているかと言われると、やはりちょっとまだ知らない部分というのが多いと思えます。また、若い世代、我々もぎりぎり車に乗って行けたりする世代ですけれど、それより下の世代、小学生、中学生、高校生ぐらいが知っているかと言われると、やはり疑問はあ

るので、もう少し下の世代をどう掘り起こしていくかというのが一つ課題になってくるのではないかなと思いました。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。以上のこれまでの発言を踏まえまして、愛知県ではどんなふうに状況を見ておいでになられますか。

愛知県 永田副知事

愛知県副知事の永田でございます。実は県の行政の人間が分科会でしゃべるのは余りない、という感じがします。やはりこれは三遠南信の地元、市町村レベルで議論を積み重ねてきた経緯があるのかなと思います。ですので、こういう県レベルの人間が、一つ変わった切り口でお話するのも意味があるのかなと思っております。

東三河県庁は19の県の地方機関のネットワークとして、今まで保健所とか建設事務所とか、全く違うところの行政をネットワーク化していくというのが重要なポイントです。まさに縦割り行政を改め総合的な行政をやっていこうというところでございます。

今年度は特に、「東三河振興ビジョン」、10年後を目指した将来ビジョンを作りたいと考えています。次に、1年に1～2テーマずつ決めて重点的に取り組む主要プロジェクト推進プランとして、広域観光の推進を取り上げ、具体的に3年ぐらいの計画をつくっていこうと思っているわけでございます。

広域観光の推進として三つの柱を示しております。一つは「広域観光エリアとしての魅力の向上」ということで、それぞれの地域が持っている地域資源を磨き上げていくということでございます。「ご当地グルメ観光の推進」もこの中に位置づけられてい

ます。

2番目に「広域観光エリアとしての魅力の発信」ということで、素晴らしいものを外に向かって発信していくということでございます。特にB-1グランプリなどは、外に情報発信していく絶好の機会である思っております。そういうときに豊川だけではなくて東三河全体で滞在、周遊するような仕組みをつくりたいと思っております。また、「県域を越えた広域連携」ということで、三遠南信や伊勢志摩と、もっと広がりを持って情報発信をしていこうということでございます。

3番目に、「広域観光を推進する人・環境・基盤づくり」ということで、広域観光を支える人づくり、それから景観等の環境、インフラづくり、これをやっていこうという、この三つの柱で広域観光の推進をやりたいなということです。

24年度の先導事業として、周遊コースをつくったり、スマートフォンの拡張機能などを使って情報発信していくことを考えております。

東三河を見てもみますと、各地域でそれぞれ頑張っていていただいているということでございます。それらをいかにネットワーク化していくか、その具体例ということで、「奥三河戦国ぐるめ街道」が挙げられています。また、10市町村のご当地グルメを集めたスタンプラリー「ぐるら+」など、みんなで横の連携をとっていくという、こういうことが非常に重要ではないかなということでございます。

そこで愛知県における取り組み事例ということで、地域提案公募型の観光推進事業として、地元の観光協会さんからツアーの企画を提案していただき、実現性が高いものを選んで、モデル的にツアーをやってみるということをやっております。

一つが蒲郡市観光協会から提案していた

いただいた「三河のキラリ『いいもの』発見バスツアー」1人3,500円から4,800円のコースでございます。また新城市観光協会から提案いただいたのは、奥三河の恵みを体験しようという、1人2,500円から3,500円ぐらいのツアーです。戦国城めぐりは、これだけは一泊二日の1万3,000円のコースですけれど、そういうようなものをつくり、なおかつ豊橋から出発ではなくて、浜松を出発し、豊橋を経由して、そしてまた三遠南信自動車道を使って奥三河へ行くとか、そういう広がりを持たせております。そしてまた、蒲郡市の観光協会のコースも名古屋発着としています。都市の方に来てもらうコースをモデル的につくって、うまくいけば、これを民間事業者にやってもらおうということ考えています。

それから、「あいちの山里で暮らそう80日間チャレンジ事業」として、公募により選ばれましたスタッフ5名の方が実際に9月から12月まで奥三河で、新城、設楽、東栄、豊根、それから豊田の稲武に実際に住んでもらって、そして感じたことをブログとかフェイスブックで、どんどん発信しております。これはCBC系列のテレビ会社も絡んでおりまして、テレビ等々でいっぱい声を出していただいているということでございます。

あと、ジビエの関係でも名古屋等でジビエを使ってきているレストラン等を回るスタンプラリーなどを企画しているところでございます。

このように、それぞれの地域が非常にいいものを持っているものですから、それをいかにネットワーク化していくかということが非常に大事ななと思っております。

最後に、「平成24年度東三河主要観光行事一覧表」というのをつくったのですけれども、それぞれの市町村が色々なことをやっていることが分かります。やっているけれ

ど、今まではそれぞれ何をやっているか良く分からなかった。そこで、今年5月につくったのですけれども、4月から翌年の3月まで、どういうお祭りを、どんなところでやっているかということを一覧にしました。そうすると、お互いに今までばらばらであったのが、こんなところがやっているのかと分かった。ああ、ここは空いているから、自分たちもこの空いている時期に何かやろうと。そしてまた、同じ時期に違うことをやっている。これは連携しようじゃないかとか、そういうようなことが生まれてくるということで、そうしたら皆さん方、あれも入れる、これも入れるとちょっと大変になってしまったのですが、ただ、こういう横の繋がりをつくっていくことが、よりネットワークを充実させる方法かと思っております。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。「風土」分科会は食に注目にいたしました。SENA会長の浜松市鈴木市長に、ここを突破口としてどんな方向性を考えていけば良いか、ご意見をお聞きします。お願いいたします。

浜松市 鈴木市長

今回は、皆さんがそれぞれの地域で、地場のものをうまく活用して、地域おこしをしようという情熱あふれる取り組みについて発表がありまして、お互いに認識をしたと思います。「連携」あるいは「ネットワーク」というキーワードが出てまいりましたけれども、こうしたものをいかにこれから三遠南信の地域として活用していくか。

B-1のように集まってお祭りをやるというのが、手っ取り早い取り組みですけれども、スタンプラリーのような形でつないでいくというのもあります。これも、紙に

押していくのではなくて、QRコードで携帯に落とし込んでいくと。情報発信とあわせて使う形も考えられると思います。また最近、フェイスブックを使った情報発信が各地でなされていて、例えば四国のほうでは秘境対決として、海の秘境、山の秘境で対決をして投票をしてもらう、そういう取り組みが大いに観光地を盛り上げていると、こんな事例もあるようです。こうしたツールを使ってネットワーク化をしていくというのもあります。

最終的には、いかに人に来てもらって観光につなげていくか、ということですから、旅行会社が企画する旅行ではなくて、地域資源を活用した着地型観光というのが非常に注目をされています。この三遠南信には、南信州観光公社等の、頑張っている事例もございます。今日発表いただいた資源、あるいは食だけではなくて、伝統芸能等、豊富な資源がこの三遠南信にはありますので、そうしたものを使った着地型観光をどうつくり上げていくか。この辺が我々の腕の見せどころではないかと思いました。

コーディネーターノ

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。議論の結果、次の3点にまとまってくるのかなと思います。

1点目として、いかに情報発信力を高めて持続的な観光誘致に結びつけていくかという視点が必要であろうということです。まずは、B1グランプリはじめ、様々なイベントでの発信が考えられます。次に情報戦略として、既存のインターネットによる発信とパンフレット、リーフレット等も丁寧につくるということが大事であったわけです。そして、ブログやフェイスブックを利用して、携帯の端末からさまざまな仕掛

けをしていくということ。若い人たちの文化を何とか取り組んで、民と官が協力し合って、そういった新しい情報社会にも臆することなく出ていくことが重要だと思います。

2点目としては、さまざまな団体、民間と行政だけではなくて、その中間の団体や様々なセクターの絡み合いによってネットワークをつくっていくんだと。そういうお話が、今日幾つも出ていました。

3点目として、食品を通して、いかにしてこの魅力ある三遠南信地域のファンをつくっていくかということです。これに対する一つの回答は、地域ブランドだと思います。例えば浜松であれば、様々なおいしい食品、あるいは素晴らしい最先端の工業製品芸術、音楽がある。各製品でブランドがつくられていくことによって、最後には浜松というのはいかに何か素敵な、最先端で、おいしい場所、浜松というブランドでできているのではないかと思うわけです。三遠南信の各地域で、素晴らしい資源を生かして頑張っておりますので、ぜひ、こういったファンづくり、ブランドづくりの一環として、地域ブランドの製品PRや観光ツアー、そういったものをSENAにおいてブランド戦略として推進していく、こういうことではないかと思います。

特に異論等ございませんでしたら、以上でまとめとさせていただきます。最後の機会ですので、意見等がございましたらどうぞ。

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

今日、会場入口で販売している「三遠南信ここが楽しい事典シリーズ 第1巻 祭り事典」のご案内です。三遠南信地域で行なわれている国・県の無形民俗文化財に指定されたものをはじめとして90箇所の祭礼が掲載されております。三遠南信を紹介す

るガイドブックは他にもたくさん出版されていますが、この「祭り事典」には温泉施設の無料入浴券が5箇所分ついています。この冊子をテキストにして三遠南信の学び、交流をしてください。

やはり、その現地へ行って、肌で感じて、体験をしたことでないと、納得のいく伝え方ができないということで、南信州地域では「南信州交流の輪」というグループをつくりまして、お互いに勉強し合って、そして伊那谷の良さを伝えていこうとしています。ここに属するメンバーが主体となってこの事典シリーズを企画し、2011年の浜松の住民セッションで企画を発表し、それがきっかけとなって東三河と遠州のメンバーの協力を得ながら準備してきました。そして6月1日に三遠南信住民ネットワーク協議会ができ、その事業の1つに位置づける形で、第1巻の「祭り事典」が刊行されたわけでございます。

資金に乏しい状態でこの企画を始めたものですから、販売や広報活動に大変苦労しております。これから「駅・城跡・道」「温泉」「特産品」「花」をテーマにして全5巻を2013年3月までに順次刊行していく計画です。どうか皆さん、1冊1,000円でございますので、ぜひお求めいただきたいと思えます。

私どもも、この三遠南信エリアにはたくさん宝物があります。しっかり勉強させていただいて、このシリーズをつくっていかうと思っています。皆様にもぜひ、この事典シリーズを見ていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

コーディネーター /

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。それでは、皆様のご協力に感謝申し上げて、風土分科会を終了させていただきます。まことにあり

がございました。

8 「山・住」合同分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

「山・住」合同分科会では、「中山間地域の生活環境向上に繋がる、人・ものの交流促進」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	教授	大貝 彰
報告者	くま遊楽亭 あそびや		大平 展子
行政	蒲郡市	市長	稲葉 正吉
	設楽町	町長	横山 光明
	飯田市	市長	牧野 光朗
	松川町	町長	深津 徹
	阿智村	村長	岡庭 一雄
	根羽村	村長	大久保 憲一
	売木村	村長	清水 秀樹
	豊丘村	村長	下平 喜隆
	大鹿村	村長	柳島 貞康
経済	森町商工会	会長	山本 充喜
	小坂井商工会	会長	丸山 登三雄
	津具商工会	会長	伊藤 武
	鳳来商工会	会長	片桐 幸信
住民	チェーンソーアート in 東栄	副理事長	工藤 和美
	ミナの森・にしうれ小学校	管理人	津ヶ谷 寛奈

(敬称略)

はじめに 事務局

ただいまから「山・住」分科会を開会いたします。この会の運営につきましては、コーディネーターを豊橋技術科学大学の
大貝彰教授にお願いして進めてまいります。

コーディネーター / 豊橋技術科学大学 大貝教授

最初に、前年度のサミットの議論のまとめと今回のテーマについて説明をいただきます。続いて、くま遊楽亭あそびやの大平展子様から、「農家民宿くま遊楽亭あそびやの開業について」と題してご報告をい

たきます。これらを踏まえまして、「中山間地域の生活環境向上に繋がる、人・ものの交流促進」というテーマから、今後推進していく事業等についてご意見をいただきたいと思っております。



事務局

前年度の「山・住」合同分科会では、第期の重点プロジェクトの総括と第 期に向けての方向性を議論いたしました。

まとめると、「水資源、流域の防災」という課題は、中山間地域に人が住み続けることのできる環境をいかに維持・確保していくかという課題と直結しているということ。各地域の成功事例をもっと三遠南信地域全体で共有することが重要なテーマであるという二つにポイントが絞られました。

本日は、前年度の議論を引き継ぎ、さらに発展的な意見交換を行うために中山間地域の生活環境向上という点に焦点を当てたいと思います。

現在、三遠南信自動車道の一部供用開始など、上・下流域の交流をさらに緊密な段階へ進めるチャンスが生まれています。人、ものの交流を促進することで、中山間地域の生活環境を高めるために何ができるのか、その議論を行うため、「中山間地域の生活環境向上に繋がる、人・ものの交流促進」というテーマを設定いたしました。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

それでは「農家民宿くんま遊楽亭あそびやの開業について」と題して、くんま遊楽亭あそびやの大平展子様よりご報告をお願いいたします。

報告

くんま遊楽亭あそびや 大平氏

この春、くんま遊楽亭を開業いたしました大平と申します。

高く澄んだ空に赤トンボが乱舞しています。台風にもめげず、けなげに立っている棚田の稲穂が重たく垂れ下がっています。そのような熊から参りました。

農家民宿を開業した理由は、三つありま

して、一つは、何とかしたい地域課題です。熊は東西南北に街道が通っていて、その昔、街道沿いには13軒の旅籠があり、江戸・明治時代には3、4万人の人たちが訪れたという話を聞きます。昭和30年、2,512人あった人口が昭和60年には1,205人と、半減してしまいました。何とかしようと村おこしを始め、25年が過ぎました。しかし、今も基幹産業の林業が衰退し、地域全体がどうしようもない閉塞感に満ちています。小さな石ですが、一石を投じてみたいと思いました。

次に、二つ目です。私は、嫁いで四十数年になりますが、その間に我が家では100人ほどのホームステイのお客様を受け入れておりました。8年ほど前から、NPO法人夢未来くんまでは、農家民宿の研修をしておりましたが、条例がないため実現しませんでした。しかし、去年の3月、県のガイドライン制定により、農林漁家による体験型民宿が認可されるようになりました。

三つ目は、夫の退職です。私たちは人とかかわりの中で生きていきたい、そして、輝きながら年老いたい、自分を高めるため生涯勉強をしていきたいと思っています。

私たちは、この民宿を開業するにあたり、あるがままで、我が家風でいこうと考えました。キーワードは「安らぎ、癒やし、絆」です。「日本のふるさと、忘れられた和、これを大切に」、これは、5月に宿泊されたオーストリア出身の女性、アリアーネさんが教えてくれた言葉でした。日本の生活スタイル、衣食住、これを大事にするようにと。そして、「水回りが清潔だから子供連れでも安心」とお客様から感想をいただいたこともありました。

この写真は、天竜東栄線から見た我が「あそびやの春」です。海拔500mの高地で、夏でもクーラーは要らないところです。

次の写真は、和風庭園を見ながらの浴室

です。兄弟民宿として去年の8月に開業した「たべや」のご主人と我が夫が手づくりで用意したログ風の風呂です。浴室も、脱衣所も手づくりです。

次は、畳と障子の客間です。奥が6畳、手前が8畳の二部屋です。当初、部屋の改装を考えていましたが、障子がいいということでそのままにしました。畳に布団を敷いて、部屋にかぎをかけない、これが我が家風のスタイルです。

交通アクセスは、浜松浜北 IC から40分です。公共交通機関では、遠鉄電車で新浜松駅から32分、そこから、くま水車の里行きのバスに乗ると47分で熊に着きます。くま水車の里へは私たちがお迎えに参ります。

私たちは、秋になると飯田までリンゴ狩りに行きます。三遠南信自動車道が全面開通すれば、熊から信州がとても近くなります。人の行き来もこれからはもっと盛んになるのではと期待しております。

この写真は5月。先ほどのアリアーネさんご夫妻が山菜採りや山菜のてんぷらを揚げながら、ご機嫌でお昼を召し上がっているところです。

次は、お客様が寄せ書き帳に、残してくれたメッセージです。「実家に帰ってきたような、何ともいえない安らぎを感じた」「ゆったりとした時間を使うって贅沢だなと感じた」「日本のおもてなしに出会えた」「5月5日『菖蒲湯、スーパームーン、筍の味噌汁』これは最高だった」「ウグイスの鳴き声で目覚めた」「これが本来の人の生活なのは・・・」「夕食後の会話が楽しく、夜遅くまで話し込んだ」。

私たちの農家民宿は共同調理が基本です。この間、テレビ放映されたのですが、その様子をごらんになった袋井の70代の方から「私は台所に立てない。お風呂のまき割りもできないけれど、どうしたらいいですか」

そんな電話がありました。その都度、臨機応変に一つずつ解決しながら、楽しくこの民宿を運営していきたいと思っております。

夢はどんどん膨らみます。「ピザ窯を造りお客さんに焼いてもらおうよ」とか、「炭焼き体験を長期滞在で『ワーキングホリデーで学生さんを受け入れたいな』それから『ツリーハウスもおもしろそうだね』等々です。

山間部ではイノシシやシカの害に困っています。冷凍庫に入りきれない程のイノシシやシカの肉があります。でも、これらは商品にはできないので、お客様に召し上がっていただくことができません。そこで、たべやのご主人と「二つの民宿で資格のある、そんな施設をつくりたいね」と言っております。そうすれば、シカのシチューとかボタン鍋だとか、いろいろな料理が食卓に並ぶことができると思います。

そして、「あそびや」「たべや」に加えて「のみや」といろいろな民宿が1軒、2軒、3軒と増えることによって、くま民宿村ができたら・・・と期待します。そうすれば、子供たちやいろいろな団体を受け入れることも可能になります。

くまに魅力を感じ、そこを移住地として選び、6年ほど前、長久手から引っ越しして熊に定住された「たべや」の水野さんたちは苦勞して農家の資格を取り、昨年1月には農家レストランを開業し、8月には農家民宿「たべや」を運営するまでに至りました。

このように、外から来られた方たちが熊で私たちを先導するように農家民宿を始めたり、あるいは起業されて地域を元気にする担い手になったり、そのような刺激が、中山間地域で生き生きと暮らせる仕組みづくりのきっかけになったら最高だと思います。

この写真は、初めてシイタケを採ったと

言う60代の仲良し3人組です。東京に持って帰ったシイタケをどのようにしてお料理すればいいのかとお電話をくださいました。

次の写真ですがこの笑顔がうれしいです。いつも、お帰りになるときにこの場で記念写真を撮らせていただいております。子供たちが伸び伸びと手を振って、「またね。」って私達に言っているような、そんな光景が思い出されます。寄せ書き帳には「また帰ってくるからね」とありました。「ただいま」とか「また来るよ」とのお客様からの言葉に、一つ一つの出会いをたいせつにしなければと思います。

私は、起業するに当たって、SENAのインキュベーション事業のご支援をいただきました。それまでに15回、片道30kmの道を浜松へ毎回通いながら、研修や仲間づくりをし、開業までの心得を学びました。「初期投資はなるべく抑えて」と言いながら、思い描いた以上の開業をさせていただくことができました。

私はこの民宿で、我が家の味、郷土料理を守りながら、お客様との交流を大切にしていきたいと思っています。一番のごちそうは、地元で採れた安心安全な野菜だと思っています。せめて野菜は家で採れたものをと心がけています。今、畑では大根や白菜が本葉を出し始めました。これからは鍋料理がメインです。

くんまでは、地域の活性化を目指し様々な取組をして参りました。今後、農家民宿が農家の副業として成り立つことを願っています。私たちは、この農家民宿によって元気をもらい、収入を得、お互いに助け合いながらこれからもずっと続けていこうと思っています。まだ始めて7カ月です。とても弱音を吐く、そんな気持ちにはなれませんが、一つずつ学んで一生懸命頑張っていきたいと思います。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

開業して7カ月ということですがけれども、民宿に来られるお客さんはどの辺から来られる方が多いのでしょうか。

くま遊楽亭あそびや 大平氏

東京や大阪などが多いです。近場では浜松、豊橋、名古屋です。東京からお見えになるお客様が「今、掛川だよ」というのであと1時間半ぐらいかかるかなと思っていますと、1時間ぐらいで到着されます。新東名が開通して、本当に便利になりました。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

そういった方はどこで情報を得て来られるのでしょうか。

くま遊楽亭あそびや 大平氏

一つにはホームページです。その他に、テレビ、新聞、雑誌、などです。あそびやも8月には民放で放映されました。1号店の「たべや」がこれらに数多く出させてもらっているものですから、「兄弟民宿のあそびや」の紹介によりいらっしゃるお客様もあります。

質問者

熊には阿多古川というきれいな川がありますが、民宿で川遊びをするなどの川の利用は考えていませんか。

くま遊楽亭あそびや 大平氏

NPO法人夢未来くんまでは以前より子どもの水辺事業をしています。地区内にある4カ所の水辺(ほたるの里と熊平オートキャンプ場、水車の里と大栗安の棚田)を利用して子供たちに体験型の環境学習をしておりますが、その活動参加者もご宿泊さ

れました。

お客様から、溪流釣りのお問い合わせがよくありますので、紹介をしております。

質問者

開業される前は、大平さんたちも地元で林業とか農業をやっていたらっしゃったのですか。今、そういうものに取り組んでいる方はもともとの住民の人とよそから来られた方ではどちらが多いのでしょうか。

くま遊楽亭あそびや 大平氏

農家民宿に関しては、現在、県下で3軒の登録です。1軒は熊にある「たべや」、それは長久手から引っ越して来た人です。2軒目は水窪にできました。そして、3軒目が我が「あそびや」です。我が家はもともと熊生まれ、熊育ちです。



意見交換

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

ここから意見交換に移りたいと思います。それでは、まず、今回のテーマが「中山間地域の生活環境向上に繋がる、人・ものの交流促進」ということですので、その観点から、各団体で取り組まれている事例について、ご紹介をいただきたいと思います。

売木村 清水村長

私の村では、「うるぎ米そだて隊」という

イベントを行っております。これは平成18年、農業体験イベントとして始まりました。当初、田植え、草取り、稲刈り、脱穀等、単発で参加者を募集しましたが、参加者が集まらず中止する場合もありました。何か方法はないかと考え、年間を通じて募集いたしました。年間7回の体験メニューとして、皆勤した人には米を1俵、60キログラムを差し上げることとしました。それが受けたのか、定員30名に108名の応募がありました。もみまきから始まり、田植え、草取り、ヒエ取り、案山子づくり、稲刈り、脱穀までの7回。ほかにシイタケの種入れ、ブルーベリー狩り、トウモロコシとり、ハチみつ収穫、そういうオプションも好評でした。

米1俵というのは、赤字覚悟でございますが、売木村に来てくれることにより、村が非常に身近になり、また、スタッフとも親しくなり、交流が広がっております。

その後、「うるぎ米そだて隊」を卒業した人には、売木から離れないように、2年目からは「てつだい隊」、また来てもらいたいということで「またき隊」、抽選に外れた人には「はずれ隊」といって、村に呼び込んでおります。今ではスタッフとなった人たちもあり、主催者側といたしましても、スタッフとして当てにしているという状況です。

赤字ということで、体験料を上げさせていただきましたが、毎回応募者が多く、定員も増やしております。売木村に来て交流してもらえる、そんなイベントでございます。

大鹿村 柳島村長

大鹿村では、三遠南信のふるさと交流歌舞伎を通じた交流を行っております。平成6年より行われておりますが、南信州では大鹿村のみの参加でしたけれども、今回、

下條村さんにも参加していただくことになり、南信州としては、一つ幅が広がりました。

しかし、過去には、三遠南信の中にある多くの文化財、歌舞伎関係の方が参加をされていましたが、市町村合併により、自治体の援助がなくなってきたということで、参加団体が少なくなっていることが非常に残念です。合併して大きな力のある自治体になられたので、以前の小さな町村単位であった、そういう歌舞伎の保存会等の団体にぜひ援助をしていただいて、多くの方が参加できるように支援をお願いしていきたいと思っております。大鹿村の場合は大きな産業等がないものですから、このような文化財、それから、いろいろな形の地縁的な交流を盛んにすることによって、人の動き、ものの動きをもっと強くしていきたい、大きくしていきたいという考え方で交流を進めております。

もうひとつ、秋葉街道ですが、秋葉街道信遠ネットワークという団体がございます。旧街道を復活したりして、現在、浜松までの各場所でウォーキング大会を開いています。

大鹿村では、昨年、2回のウォーキング大会を行いました。外部から見られる方が多いのですが、総勢160人くらい参加されて、その旧街道を歩かれました。現在、この方々で焼酎を造るなど、いろいろな交流が続いています。

我が村では、このように人の交流を多くして、人、もの、宿泊等のお金の動きもよくしていきたいということで取り組んでいるところです。

根羽村 大久保村長

根羽村は、愛知県豊田市のすぐ隣、矢作川の上流になります。私どもが地域を考えると、やはり川の上流、中流、下流と

いうのは非常に大事なポジションであると考えておりました。比較的山の中の上流は、今、非常に厳しい社会現象の中で、人が住みにくくなっているとか人が少なくなっているのが現実でございます。上流に人が住まなくなるということは、上流の地域社会が成り立たず、国土が荒れていくという形で、その流域が全部だめになってしまうのではないかと私どもは強く声を出して訴えています。

人が住み地域の営みが持続する社会をつくらないと、国土は保全できないというのが私どもの地域づくりの大前提です。山の中、上流に住むには、やはりそこに住み続けられるようなきちんとした生活の営みがなくてはなりません。その手段として、地域の資源である森林を活用して、そこに人が住み続けられる仕組みをつくること、さらに上流は水の原点でありますので、その資源環境を使って、そこに人が住み続けられる法則をいかにしてつくるかを考えるときに、やはり交流というのが非常に大きな部分を占めてきています。

そういった部分で、下流の皆さんに、今、上流の私たちはどんなことを考えて、どんなことをお願いしたいか、一緒になって地域をつくっていききたいかという情報をしっかり発信していく取り組みをしております。特に山についてはトータル林業で、私どもは木を使って、実際に安心・安全な家づくりをしっかりと外にPRして、それによって山で働く人が増え、地域の産業が成り立っていくという取り組み、あるいはきれいな水をつくるためには、多くの人の支援が必要というようなことで、下流の企業の皆さん、団体の皆さん、また、今は一般市民の皆さんがトラスト運動というような形で源流を守っていただく取り組みも始まるなど、そういった情報を発信し続けながら、地域をつくっているというのが現状でござ

います。

設楽町 横山町長

設楽町は豊川を通して東三河の最上流部にあるという位置づけの中から、従来から設楽ダムの建設という大きな課題事業がずっと40年近く続いてきているわけです。このダムをテーマにして、我々地域の人たちは自分たちの生活圏の中の保持ですとか、将来にわたっての安定した生活を営んでいくためにはどうしたらいいのか。また、東三河全体をとらえたときに、自分たちの役割はどのようなかというところを注視して今までずっと来ました。

その結果、やはり東三河にとってこの水は最大必要資源であり、大きな財産につながるものだという理解をして、このダムを推進していこうということになりました。

その背景には、やはり地域の住民たちが、上流で山林を守っていくことが、下流全体をとらえて、どう地域に影響を及ぼすのか、そこをきちんと明確にしていく必要があるかということから、一つのテーマとして、やはりこの森林をどうやって保全しながらきれいな水を生み出していか、そうした中に日常の生活の中でみんなの営みがどうつながっているかというところがありました。

下流域の方々が上流部の我々のほうに目を向けていただいております。そういう中で交流というものが生み出されてきました。例えば、分収育林にしようとか、下流域の方々に設楽町へ来ていただいて山の手入れに入ってもらおうとか。そして、かがやきの森という名前をつける中で、下流の地域たちが山の管理といったところへ視点を合わせて、それに向けて体験をしていただくとか、そのようなことをテーマに設楽町に来ていただく。

そして、一方で、我々は下流域のいろい

ろな行事に参加させていただく。そういうところで人との交流、絆が作り上げられていくということで、東三河地域全体で人と人との交流に力を注いでいるところでもあります。

今後、上流にいる人たちの潤い、そして、下流の人たちが生活するための安心につながっていくことが最大の大きなテーマとなることを期待して、こうしたことを中心とした交流を進めているところでもあります。

小坂井商工会 丸山会長

小坂井は2年前に豊川市と合併をしたわけですがけれども、その前は豊根村と姉妹提携みたいな交流をしておりました。年に1回、葵まつりというイベントをやるときに、山間部の特産品の販売等をお願いして、町おこし事業で交流を図ってまいりました。

昨年は、名鉄ギャラリーみたいなものを計画してくださり、非常ににぎやかで、持ってきた品が早く完売してしまったということもありました。今後ももっと、祭りのあるときなどにお互いの特産品を持ち寄ってPRすることが必要ではないかと思いません。今年は、10月14日に行いますが、山間部でなくても、この商工会として多くの商工会に参加を呼びかけて、特産品の販売と地域の交流を図っていきたいと思っております。

ミナの森にしうれ小学校 津ヶ谷氏

水窪町で廃校になってしまった西浦小学校をお借りして、今、地域活性事業に取り組んでおりますミナの森の津ヶ谷です。

西浦小学校は、長野県境まで15分ほどというところで、浜松の中心部から75kmほどあります。廃校をお借りして事業を進めるに当たって、まずは観光を考えました。

人を呼びたいのですけれども、宣伝不足というものもあるのかもしれませんが、距離

が遠いとこんなにも人は来られないのだなとつくづくと感じています。

やはりそこに魅力がないと人は動かないと感じています。その魅力づくりのために、今回、水窪を舞台にした映画を作りました。浜松の町の中でも、「えっ、水窪、どこ」という方が結構いらっちゃって、まずは知っていただくということでした。

映画の効果がずっと続けばいいのですが、なかなかそこまでの力は映画にはないと監督から聞きまして、数年で人が来なくなってしまうのは、せっかくの地域おこしも地域おこしにならない。

私たちは、会社でこの学校を借りていますが、就業支援とか、フリースクールとかをやっている関係もあって、何とか雇用につなげたいという気持ちがあります。それには若い子たちを引き寄せるようなものがあるといいのではないかとということで、オリジナルキャラクターを作って、そこから商品開発なり、地域おこしなりをしていきたいと考えて取り組んでいます。方言の名前のついたキャラクターを作って、今、アニメーションを作るようにしています。

今回作った映画も、方言とかふるさとというのがキーワードになっておりますので、水窪弁がばりばりの映画になっています。そして、アニメーションでは方言というキャラクターが作られています。

そして、この廃校は、本当に地域の宝ですので、地域の皆さんにもとても印象がいいわけです。どこかの跡地を使ったというよりも、やはり廃校を使って何かをやっているという、皆さんの目を引きまします。興味を抱いてもらえます。

まだ1年で、これからこの廃校をどうやっていこうかと模索中です。今、地元の文化財との連携を通して、この小学校を拠点に何か人が動くことができないか検討しています。

このミナの森のプロジェクトは、よそから来た人がやるのはなかなか難しく、本当の地域おこしというのは、そこに住む人たちがやはりやっていかなければいけないと思っています。そこで、この映画の撮影があったことによって、水窪の商店街の若い世代の人たち、これからを担っていく代の人たちが、これをチャンスにということで、商品開発とかグループを作ってNPOを立ち上げて、もう一度観光を盛り上げようという動きになってきました。これが本物になっていくように、私たちも努力していきたいと思っています。

蒲郡市 稲葉市長

蒲郡市は、100%県水に依存している自己水源がない町でありまして、上流部である山間部の方とは親しく交流をしていかなければならないなと思っています。

そういった中で、市主体ではない交流事業を紹介させていただきます。

一つは、東三河のそれぞれの市町村の観光関係者がかかわっている東三河広域観光協議会という会がございますが、この東三河の8市町村をぐるっと回遊して、いろいろなおいしいグルメを食べていただくというメダルスタンプラリー「ぐるら+」という企画があります。それぞれの地域の地域性、いいところをお互いに認識しよう、共通意識を持とうとやらせていただいております。

もう一つは、東三河広域協議会と奥三河観光協議会の共同で実施をさせていただいております滞在型の体験事業「極・奥三河」です。滞在していろいろな技術を経験していただき、参加者の方に、そこに移り住んでもらうなり、定住してもらおうということをおこなう事業を通して実現していこうと取り組んでいます。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

今年の3月に、三遠南信自動車道の浜松いなさ北 IC から鳳来峡 IC まで一部供用開始になりましたし、新東名も御殿場 - 三ヶ日間が開通しました。具体的実感として、取り組みがさらに進んだ事例があればご報告してください。

設楽町 横山町長

設楽町では、三遠南信自動車道の身近なインターチェンジというのが鳳来峡 IC になります。車で40分から50分ぐらいかかりまして、まだアクセスの悪い道路なわけです。しかし、東栄町さん、豊根村さんから、三遠南信自動車道が鳳来峡 IC まで通じたことで、今までと比較して、はっきり分かるぐらいの人の流入が始まったとお聞きしております。東栄町さんや豊根村さんには温泉があります。そして、東栄町さんで行われる様々なイベントですとか、豊根村さんの花街道、茶臼山公園の芝桜の丘、そういうところへ多くの人たちの入り込みが始まったということです。

こうした一本の幹線道路ができることによって、人の動きというのは本当に大きく変わってくるとというのが如実にあらわれてきたという状況ではないかと思っております。

したがって、設楽町も、こういった幹線道路の整備というものが、やはりこれから人との交流、また物流、そういうものを活性化させるには、大きなテーマとか大きな要素であると理解しております。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

私も最近をよく、飯田に行く機会があります。高速道路で行くこともできますが、自宅が三ヶ日ですので、三ヶ日 IC から東名

高速に乗り、三ヶ日 JCT を通って、鳳来峡 IC まで行き、そこから国道151号ですが、従来に比べて30～40分は確実に短くなりました。私にとって、飯田は今、物凄く近くなっています。

豊根村に道の駅「豊根グリーンポート宮嶋」があります。そこで休憩する時に、今までほかの車をほとんど見かけませんでした。圧倒的に車が増えまして、名古屋ナンバーや結構遠いところのナンバーを見かけます。三遠南信自動車道を使って、国道151号をさらに上って、飯田方面まで行かれている方も結構いるのではないかなと思っています。

基盤が整備されることで、やはり交流というのはますます促進されていくのだろーと思えます。もちろん今、ご発言をいただいた具体的な取り組みというのは、この三遠南信自動車道が整備される前からそれぞれ皆さん工夫されて取り組まれてきたのだと思えます。

こういった取り組みをさらに活性化させて、この中山間地域の生活環境を向上させることに結びつけていくということが必要になってくるだろうと思うのですけれども、ここで改めて、この三遠南信地域の中山間地域には、どのような魅力があるのか、あるいはどのような資源があるのかということをもう一度、確認しておきたいと思えます。その上で、これからどのような方策があるのかということについて議論していきたいと思えます。

蒲郡市 稲葉市長

自然環境からすると、私どもの町は海に面してしまっていて、ないものが奥深い緑ということで、やはり中山間部へ行くと、私の目に新しく生き生きとしてくるのは緑と川であると思っております。そういった中で、上流域の皆さんとの交流ということで、私

どもの市の子供たちが田峯の地域の方々と
の交流をさせていただいておりますが、や
はりそういったところをお伺いしてわかる
のは、その地域の人ホスピタリティー、
人の温かさというものを感じているところ
であります。それと、やはり周りのゆった
りとした環境の中で培ってこられた海辺の
町にはない食材、食文化が私たちにとって
は魅力であると思います。

それと、塩の道等々、昔からの歴史のあ
る地域ということで、伝統芸能も培ってみ
える。そのような異文化というものも私ど
もの海の町にはない新しい文化を感じさせ
ていただける、そういったものが中山間部
地域の魅力ではないかなと思っております。

くま遊楽亭あそびや 大平氏

私たちは当たり前だと思っている毎日の
生活が、実は当たり前でないということ
を外からいらっしゃった方たちに気づか
れることがあります。産みだての卵が温
かいとか、星がこんなにきれいだとか、
実はそれは全然当たり前でなくて、町
の子供たち、あるいは小さいときに田
舎を知らない若者たちはすごく驚き
を感じます。

だから、もっと交流することによって
当たりのことが当たり前ではないと気づ
く、そんな場を私たちは田舎に住む者
として、提供できたらいいなと思っ
ています。

豊丘村 下平村長

飯田下伊那にはリニアの駅が15年後
に完成して、東京 - 名古屋間が開業
となります。多分そのころには、三遠
南信自動車道も全線が開通するの
ではないかなと思っております。

リニアにしても三遠南自動車道の全
線開通に向けてもそうですけれども、
いわゆる時代は変わっても変わらない
不易なこと、それは、やはり田舎の
自然と、農業が織り

なす日本人のふるさとの原風景。これ
をいかに守り通して都市部に対して発
信していくかということが、私たちが
自分たちの将来に向けて、三遠南信
自動車道がつながり、リニアの駅が
できた時、それが私たちの資源にも
なり、一番の売りになるのだらうな
と思います。

ですから、地域おこしというのも、
その地域によって戦略が違うのだと
思うのですけれども、やはり雇用なく
して定住なしということを行います。
豊丘村ではある程度の雇用はいろい
ろな形で創出できるので、ぜひとも
都市部と手を組みながら、中山間地
の活性化につながる産業や施策を行
えるような連携がとれたらなとつく
づく思っています。

阿智村 岡庭村長

私のところは、皆さんのような交流
というよりは、地域の宝を商品化する
という点で、観光に重点を置いてお
ります。昼神温泉、ヘブンスそのは
ら、コスモスガーデン、いろいろな
観光地がございまして、大体150
万人ぐらいが観光客としてお見え
いただいているのですけれども、観
光と交流というのはかなり違うな
という感じがします。

中山間地域は、確かに魅力も宝もあ
りますが、今、急激な人口減少に襲
われています。高度成長期の過疎化
よりも急激だろうと。消滅しないに
しても、消滅に近い状態に中山間
地域はなっていくのではないかと
思っています。中山間地域に、観
光でいくお客さんが来ても、それは
観光客として来るだけであって、
そこにお金を落とすことにより、
確かに地域の経済は潤うと思いま
すが、恩恵は観光に携わる人にと
どまって、そこで生きている人た
ちが、その地域で生きていくとい
う力に直接結びつかないというこ
ろが、観光の持っている一つの
危険性といいますが、幻想だらう
と思っ

います。

そういう点から考えると、やはり交流というのは、その地域に生きている人たちが、その地域に生きていることを誇りに感じているもの、ことをおすそ分けする。ともにそこで新しい文化や子育てのことを考える、あるいは食べ物の安全を考えるということであると思います。交流を発展させることで初めて、地域に生きていく誇りと覚悟というのが生まれてくると思っているのです。それが交流の持っている力だと思っ
ていまして、私どもとすれば、観光という問題から交流へどう発展させていくのかということをもう一度考えてみないと、集落の崩壊などは止めることができないのではないかと考えています。

ですから、訪れる皆さんも、多分観光客として来たのでは交流は始まらないだろうと。そこはやはり、子育て、食品の安全、山村の豊かな暮らし、これからの自分たちの暮らし、共通のことを考える、そういうところへ移行していくということが今、必要ではないのではないかと考えておりますが、なかなかうまく実践できていないという状況です。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

ただ、やはり受け入れるホスピタリティーは、阿智村にあるのではないですか。

阿智村 岡庭村長

観光客をお迎えするおもてなしと、交流という形で迎えるものというのは若干気持ちが変わると思います。そこに自分の地域ですとか山村に生きていく誇り、その誇りの部分が観光と交流との中では若干違ってくるのではないかと私は思っています。

鳳来商工会 片桐会長

阿智村の村長さんのお話は、驚沢な悩みだと思えます。本当にうらやましい話です。ホスピタリティーは、来ていただいた方が、旅館の従業員の皆さん、土産物屋さん等の交流の中で自然に感じていっていただけるものではないかと思うのです。南信州の皆さんのビジネスの上手なところは、学ばなければいけないなど。そこら辺は皆さんと細かく交流しながら勉強していけるともっといい結果が出るのかなと思っております。

三遠南信自動車道の開通は、思っていた以上にインパクトは大きいです。東のほうからの時間が大変短くなり、東京から3時間半ぐらいです。したがって、今まで商圏でなかった、千葉だとか埼玉、関東の東のほうまで1泊圏になるのだなと実感しております。

新城市でいいますと、奥三河の皆さんはみんな浜松に買い物に行ってしまうので、ただ喜んでいるばかりではなく、流失した買い物客ぐらいの観光客を引っ張り込まなければいけないなと思っております。最近、インターネットのお客が増えていますので、情報発信にもっと力を注いでいかなければいけないなと思えます。

切り口を変えますと、三遠南信は共通の歴史を持っています。武田信玄は、遠州、三河と進軍して、信州に引き上げた経緯があり、まさに三遠南信のちょうど三角を回って生涯を終えているわけです。阿智村あたりで亡くなったと言われてはいますが、私たちは三河で死んだのではないかと考えています。その謎解きも一つの材料になるのかなと思えます。

私は、姓が片桐であります。片桐というのは飯田の奥、松川町やあるいは中川村にルーツがありまして、中川村の片桐さんから片桐サミットをやるよと誘っていただいて、中川村へ出かけています。皆さんと一晩泊まって、膝を突き合わせて話をし

ますと、いろいろなことがよくわかりまして、交流としてはとてもいいなと思いました。

今年は中川村の皆さんが、大挙して鳳来へ来ていただいて行いました。愛知県の片桐副知事さんもお誘いしたところ、「それはいい、私も参加したい」ということでしたが、公務多忙で参加できませんでした。そういう交流も一つの切り口だなと思っています。

津具商工会 伊藤会長

津具にはつく高原グリーンパークオートキャンプ場、設楽町には段戸山の原生林などいろいろありまして、観光の時期はものすごくいいですけれども、それを外れると、ほとんど人が来ない。それをいかに埋めるかということが、中山間地の観光の課題です。

津具商工会では、観光協会と連携いたしまして、山の奥で涼しいときに結活パーティー、ほたる祭りなどをやっています。イベント開催期間は、300人、400人、と集まりますが、それを外れた時期にいかに集客するか、良い方法がどこかにありはしないかと思っています。難しい問題ではありますが、皆さんと良い方法を考えていきたいと思っています。

チェーンソーアート in 東栄

工藤副理事長

東栄町はチェーンソーアート日本発祥の地と言われていますが、私どもが、2000年に「木と遊ぼ！」として催しました。その時に、ブライアン・ルースというアメリカ人のカーバーから教えを受けまして、2001年の4月にチェーンソーアートクラブ「マスターズ・オブ・ザ・チェーンソー東栄」を結成しました。朝日新聞の全国版に、女性カーバーが安全装備をきちんとつけてカー

ビングしている記事が掲載されまして、これを見た東京の方から、「個性ある山村地域再構築実験事業ということで、国が募集しているのになぜこれを出さないのか」と愛知県庁に情報が入ってきました。

気仙沼ですばらしい昇り籠を彫り、先だって新聞にも載っていましたが、奥三河ビジョンフォーラムにお勤めになっていた城所さんに申請を手伝っていただき、締め切り2週間前に書いた作文がすんなり通りまして、国の補助金をいただいて、全国大会に大きく打って出ました。

そうしたら我々の団体プラス近辺のカーバー、ログハウスをつくっているログビルダーなど自己流でやっていたという人が参加してくれまして開催することができました。

あるものから何かを起こしたいということから始まり、第6回目には世界大会を開催しました。14回目となる再来年は、3回目の世界大会として行おうということで、今、若い人たちが計画しております。

これは交流をしようと思って始めたのではなくて、東栄町にあるものを利用して、活かしてみようと始めたわけでございます。どこの町村も山の木が大切なことは分かっていますけれども、今、お金にならないために放ったらかしになっている。これを何とかしようというのが根羽村さんの柱50本進呈政策であり、設楽町さんが、名古屋の木材市場を誘致して、山もとで木を選木して、山主さんに運賃の負担をできるだけかけないようにやっているのではないかと推察しています。山主さんに対して何かしないと、これは集中豪雨が来ると財産と生命を危険にさらすところではない、失う現状です。いつ起こるかわからない有事のために国防費を使うばかりでなく、どうか国土崩壊になる前に、こちらへも国防費をください、中山間地に目を向けてくださいと、

バッジをつけた先生方だとか、お役所をお願いをしているところです。

そういうことで、豊かな森、豊かな水、きれいな水を守るためにチェーンソーアートをやるにもエコオイルを使って大会をやっていると、こういった心遣いもしています。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

今、それぞれの地域の方から、それぞれの地域の資源、これはものという意味もあるし、人という資源という意味もあるし、形に見えない資源もありますが、いろいろなご発言があったかと思います。

阿智村の岡庭村長さんのお話で、ただ観光客を呼んでいても、その地域の維持ということにはつながらないというご発言が非常に頭に残っております。そういった意味では、この地域の中での人の交流を通して、いかに活力を高めていくかというあたりが重要かなという気がしています。もちろん、三遠南信自動車道などの基盤を整備することが最低限の条件だと思いますけれども、今までの話を聞いた中で気になった点であります。

今、それぞれの地域の資源ということでお話をいただきましたが、これからは、その資源を当然ながら活かして、三遠南信地域連携ビジョンの中にある、いわゆる上・下流の交流を促進していく、そのことによって、この中山間地域の生活環境にどうやって結びつけていくかというところが一番肝心なところになるかと思います。

その辺について、今後のこの地域の交流促進策としまして、具体的にどんなものが考えられるのか、あるいはそういった取り組みを進めていくための連携の体制というのはどういった体制が必要なのかという点について、ご意見をお伺いしたいと思いま

す。

飯田市 牧野市長

中山間地域の生活環境の向上をどのような形でこれから考えていくかということですが、やはり様々な形の連携があると思います。先ほどお話があった観光につきましても、これも一つの連携と言えなくもないわけでありまして、やはり、実際に住んでいる地域の皆さん方の生活、あるいは環境といったものを向上させるということも考えていくと、単に、あるものを見せてというところだけではなくて、やはりその課題も含めて考えていけるような、そうした取り組みというのが非常に大事になってくるかなと思います。

飯田市では、そうした課題をどう解決していったらいいかという中で、大学連携に力を入れております。これは南信州の体験教育型のグリーンツーリズム、エコツーリズムといたしまして、平成8年からの16年間、この南信州を体験した子供たちの累計は24万人以上と広がってきたわけですが、こうしたベースとなる取り組みの上に、さらにもっと学びの要素を入れる形で、大学のフィールドスタディーを4年前から始めております。今年も9月末までに全国16大学ぐらいから460人以上の大学生、大学院生がこの地域に学びに入っているという状況です。

これは、この地域の課題を実際に学んでもらい、その課題解決に向けた提言をその中でやってもらうというように非常に連携を強めていまして、コーディネーターの大貝先生の豊橋技術科学大学にもワークショップをやっていただいたり、サテライトラボを飯田に置いて、定期的に地域に入っていくような取り組みもしていただいています。

みんなでこの地域の課題というものを考

えていく、そうした土壌を培っていくということは、中山間地域のこれからを考えていく上では重要になってくると思います。

もう一つ、外からの交流の話がたくさん出ていましたが、中山間地域の中での交流というのも非常に重要だと思っています。特に、世代間の交流。飯田の竜東中学校区では、大人と小中学生の語り合う会というのが開催されましたが、これは、大人と子供が平らな関係で、子供たちは将来の夢を語り、大人たちはこれまでの経験を語るという中で、それぞれの思っていることを知り合う、学び合うというものです。

よく考えてみますと、隣近所のつき合いで子供たちと会っても、その子供たちが将来何になりたいかなどということはほとんど知らないと思います。逆に子供たちは、隣のおじさんやおばさんがどんな経験してきた、どんなことをこれまでやってきたかということをおそらく知らない。そうしたことを、地域の中で学び合うことによって、まさに先ほど岡庭村長さんがおっしゃっていましたが、その地域に住む誇りや価値というものが確認できるようになるのではないかなと思っています。

最後にもう一つ、やはり安心・安全ということを手挙げておきたいと思っています。これは、防災体制の構築ということになりますが、やはり最近の風水害や、あるいは基調講演で大西先生が話されたような南海トラフの話を考えてみますと、三遠南信地域全体でもう一度、東日本大震災を踏まえて、どういった形でこの安心・安全というものを考えていくか。特に、この中山間地域における安心・安全というものをもう一度見直しておくということは非常に重要なことだと思います。

設楽町 横山町長

これからの交流というか、具体的な動き

をどのような形でというのが、まさに一番の課題であり、今までここにに向けて、みんなで視点を合わせてやってきたことに尽きるのではないかなと思っています。

やはり土地柄というか、地域の条件が違うわけですが、その地域に住む人たちの強い思い入れ、私たちの力で今やれること、無理をせず日常生活の中でこれだったらできるなというようなことに意識を高める中で、自然体の中で自分ができるところを見出して積極的にこれを進めていく。その中で仲間をつくり、地域間みんなでもとめていい方向へ持っていける、そうした形をみんなでもつくり上げていくことが必要ではないかなと思います。

そうした中で、自然ですとか、文化ですとか、地域にある材料をどう活かしながら、継続しながら、多くの人たちに情報発信をしていけるように組み立てていくか、そうしたところをこの三遠南信地域共通の認識の中で、みんながそうした方向へ持っていくことが必要ではないかなと思います。

地域力というか、地域の人たちの思い入れ、そうしたものを強く持ち続けていくことが大事なことだと思います。

松川町 深津町長

私は、この「住」、住む、生活、それから暮らし、生き方というものがこれから大事なのではないかなと思ひ、この分科会を希望しました。それは、昨年3月11日が大きな起点になっています。東日本大震災は、明治維新、太平洋戦争、それに続く大きな国の出来事であって、これからの人間のあり方、生活の仕方、生き方というものを大きく変革させる出来事だったととらえております。そういう中で、ゆったりとした時間、おもてなし、そういった本来の人の生活というような言葉が大平さんから出ておりましたけれども、そういう考え方に大き

く変革させる出来事であったと思っています。

ずっと大量生産、大量消費という形で進んできた世の中が、やはり付加価値をつけて、ナンバーワンよりオンリーワンという言葉がありますけれども、そのような形で地域というものを見直していかなくてはならないのではないかなという思いがしております。

それから、もう一点、「地財、地域の宝を再認識、再発見し、発信していきます」というのが私の町の一つのテーマです。これは自分自身の公約なのですが、先ほど、当たり前が当たり前ではないというような言葉も言われておりましたが、もう一度見直してみると、自分たちの住んでいる地域というのがどんなところであるか、どんなに素晴らしいところであるかというのを時々思い知らされるときがあります。住民の皆さんが、やはり自分たちの住んでいる地域をまず好きになるということが第一だと。自分たちの地域をもう一回再認識し、再発見するということが大事ではないかなと思っています。

今年度、湧水を募集したところ、8カ所出てまいりまして、今度、それぞれの水を持ち寄ってお茶会をやります。この発端は、昨年行いました小中学生のミニ議会の中で、「私たちの山の中にはいい木、おいしい水がわいています。ああいった水をみんなにも知ってもらいたい」という小学生の発言がきっかけでございました。防災の面からも、水道水が止まった場合には、こういった場所に湧水がありますよということにつながりました。

それから、人口減少時代の中で、いかに地域の活力、元気を生み出していくかという一つの要素に、交流人口をふやしていきたいという思いを非常に強く持っております。人が動くこと、人が動くともものが動き、

お金も動き、そして、情報が動く。とにかく人が動くこと、それは、よそから来る人たちもそうですし、同じ地域の中に住んでいる人たちもやはり動くということ。これを非常に大事に考えております。

情報発信では、昨年6月から、まちづくり広報参事に一般の方を雇用しています。今年からは、常勤ではありませんが広報宣伝職員ということで、地域の中のイベントや祭りや会議といった情報収集を専門に飛び回っています。それらを、ユーチューブ、フェイスブック、ツイッターなどで発信していきたいなど、そんな思いを持っております。

先日、町の中をもっと知ろうと商工会の女性部に投げかけまして、参加者20人程度と行政と一緒に町内を回りました。そうすると、景色のいいところ、それから、地域おこしで整地されたミニ公園だとか、とにかく自分たちのところを知って、そして、自分たちのよさを知って発信をしていく。そのようなことに努めているのが現状でございます。

森町商工会 山本会長

私のところは、中山間地の山が多い町であります。新東名の開通によりインターチェンジやパーキングエリアができました。そういったことで、最近、町の中に今まで見られなかったナンバーの車がたくさん走っています。いろいろなお店を回りますと、3割くらいの人が増えていると。大変ありがたい話だと思います。

森町は、次郎柿の原木がある唯一の町ということで次郎柿やトウモロコシなどいろいろな産物がございます。そういったものを今までの情報発信の中で皆さん方が知っていて、新東名開通を機にそれを求めてくる方が多くなったということもあります。2年後にはスマートインターチェンジをつ

くるということで、今後が非常に楽しみであります。

今まで多くの中山間地対策事業がありましたが、この高速道路一本が中山間地対策になるのではないかと考えております。そして、流入客が多くなることによって、地域の活性化ももちろん生まれるわけですが、やはりそれだけでいいわけではないかと。町であってもできるもの、そういったいろいろな催しものを作り、ホームページ等で情報発信することによって、さらに交流する人口を増やすことができるのではないかと。やらなくてはだめということが第一ではないかなと、先ほど皆さんから聞いている話の中で、私たちがもっと、今まで以上に頑張らなくてはいけないのだ、このように感じておりました。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

今日は最初に、それぞれの取り組み事例についてご報告をいただいて、その後、改めてこの地域の資源であるとか、魅力ということについてご発言をいただきました。その上で最後に、これからどんなことをやっていけばいいのかという方策等についてご発言をいただきました。幾つか重要な指摘もあったかと思いますが、基本的なところとして、やはり今回、三遠南信自動車道あるいは新東名が開通したことによる人の入り込み、人が増えたということはまず確実に間違いのないことだと思えます。

そういった意味でいえば、地域の基盤整備がいろいろな意味で時間を短縮させて、この地域へのアクセスをより高めているということだと思えます。そういうことを前提にして、いわゆる外からの人が入ってくる意味での交流という意味と、この地域の中での交流という、交流にはそういう二つの側面があるということが分かってきたか

と思うのです。そういったことを踏まえながら、この中山間地域の生活環境を向上させるためのさまざまな施策を検討していく必要があるだろうということが言えると思います。

それから、この地域の持っている資源を、あるいは非常に魅力的な取り組みを、この圏域内外への情報発信をどうしていくか、この体制や方法といったものをもっと整備していく必要があるだろうと。これが2点目になるかと思えます。

3点目として、これは特に飯田市長さんからご発言がありましたが、この中山間地域の生活を支えるという意味においても、安心・安全な地域という意味においては、防災体制をこの三遠南信地域の中でいかに広域連携という形で強化していくか。これは非常に重要なテーマだと思えます。そのために相互に連携していくということも一つの重要なポイントになるかと思えます。

小坂井商工会 丸山会長

高速道路ができて交流とか人の流れが進んだと、こういうご発言の中で、交通の便がよくなることによって、地域の今までの絆とか、そういうものが薄れてしまわないように、地域の絆をしっかりと守らないと、外のほうに交流が出てしまって、過疎化が一層進んでいくようなことにならないように努めることが大切ではないかと思えます。飯田市長さんにお聞きしたいのですが、20年ぐらい前、昭和62年当時、三遠南信は、高速道路の促進一本で、この山とか住とかというような議論は余りなかったような気がします。飯田は、豊田や名古屋が割と近いと思うのですけれども、この三遠南信にどのような期待を持ち、どのように進められるのか、お考えがあればお聞きしたいと思えます。

飯田市 牧野市長

20年の歴史がある三遠南信の地域連携です。これを大事にしていきたいという非常に強い思いがあります。特に、風土とか、文化といった部分で共通的なものを感じます。県境域の北遠地域、奥三河、南信州の中山間地域というのは、県境ではありますが、非常に近い関係があって、連携して、この文化を創造してきたと思っています。

この天竜川、豊川の流域圏というものは、この地域に住んでいる人にとって、生活と切っても切り離せない、そうした中で今の三遠南信の地域連携が進んできていると、私は認識していますので、こうしたものはこれからも大事にしていくことが、この地域、圏域全体にとってプラスになっていくと思っています。

コーディネーター /

豊橋技術科学大学 大貝教授

小坂井商工会長さんから話のありました、アクセスがよくなれば、逆のマイナス効果もあるのだということで、それは逆に言えば、地域の資源をいかに活かして人を呼び込むかという意味にもなるかと思えます。その点も含めて報告させていただきたいと思えます。

皆様のご協力により、中身のある議論ができたのではないかと思います。どうもありがとうございました。以上をもちまして、「山・住」分科会を閉会いたします。

9 三遠南信地域住民セッション 要旨

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

開会

松本氏（三遠南信地域を学ぶ会）

ただいまより三遠南信サミット 2012 in 東三河住民セッションを始める。三遠南信住民ネットワーク協議会・原田代表世話人よりあいさつをお願いします。

開催地あいさつ

原田敏之氏

（三遠南信住民ネットワーク協議会代表世話人）

2005年に浜松で住民セッションがはじまってから4巡目に入った。これまで年に1回の交流では何もできず、地域の提案などをとりまとめる体制をつくることできないかという意見が出ていた。新しく連携して事業を展開していくためにその必要性が求められていた。

そして前回の浜松での住民セッション終了後、組織設立に向けて動き出した。何度かの設立準備会を経て、2012年6月1日に愛知県民の森において三遠南信住民ネットワーク協議会の設立総会を行った。設立総会后、連携事業を行うためのプレゼンテーション（大交流会）を企画し17団体がエントリーした。この発表後、呼びかけに応じていくマッチングの時間も設け、話し合う機会を提供することできた。

それ以後、新しい連携の具体的な動きができてきた。これからは連携を中心とした動きに重きを置きながら活動を展開していくことができると思われる。

またお互いの意見を出し合う場を設け抱えている共通の課題を共有していくことで整理し、住民みんなの声として解決への提案となっていくこととなるだろう。その前提となるのは交流であり、お互いの顔と顔、

声と声がしっかりと結びついていく関係を続け、強化していくことを進めていきたい。

本日の発表は地域を越えて連携してきた事業を成果の1つとして報告である。これらの発表をもとに参考にして今後新しく連携が展開されることを期待する。

三遠南信住民ネットワーク協議会設立趣意書

三遠南信地域の中で、地域のためのさまざまな活動をする住民団体、または地域に関心を持つ個人は、これまでそれぞれの地域での活動を展開しつつ、一方で団体間の交流や連携の必要性を感じ、その方法や機会を模索してきました。

そのような中で、2005年に浜松市で開催された第13回三遠南信サミット2005 in 浜松に「住民セッション」が設置されて以来、このセッションの場を利用しての交流や連携、議論の場を設ける努力を続けてまいりました。

しかし、このままでは全く不十分であると同時に、議論を進める中から新たな課題も登場してきました。それらは以下のように整理することができます。

1. 三遠南信という広域での交流・連携をさらに効果的に進めるために、相互間をつなぐための「機能」が必要となる。
2. 交流・連携にとどまるのではなく、活発な議論の中から「新たな事業」を積極的に生み出してゆけるような「体制」をつくる必要がある。
3. さまざまな成果をより明確に、かつ広く訴えてゆくことができる「力」を生み出してゆく必要がある。

これらの課題を解決するためのものを「プラットフォーム」という言葉で表してまいりましたが、その実質的な役割を果たしていくために、新たに東三河・遠州・南信州を機能的につなぎ合わせる新たな組織をつくり、積極的に運営を回っていく必要はないかと考えます。

よってここに、新しく「三遠南信住民ネットワーク協議会」を設立し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）と協力を図りながら、広く参加を呼びかけていくことを提案します。

2012年6月1日
三遠南信住民ネットワーク協議会設立発起人一同



松本氏（三遠南信地域を学ぶ会）

ではこれから第1部連携事業マッチングプレゼン（事例発表）に移る。ここからの進行は水島氏（NPO 三遠南信アミ）にお願いします。

進行 / 水島氏（NPO 三遠南信アミ）

1団体10分の持ち時間で発表し、質疑応答は第2部の意見交換・フリーディスカッションの際に行う。

第1部 連携事業マッチングプレゼン

報告1

合唱劇「カネト」をうたう合唱団(新城市)

清水良文氏

飯田線は三遠南信を貫く重要な鉄道である。沿線の人口が減少するなかで電車の本数も少なくなっており、何とか飯田線を活性化したいと思いである。

合唱劇「カネト」をうたう合唱団は1999年11月に設立し、豊橋、豊川、新城、飯田などから55名の団員がいる。合唱劇「カネト」を各地で回り、三遠南信地域の隠れた歴史・川村カネト氏の生涯を合唱と芝居(27曲1時間30分)で広め伝えていくことが目的で活動している。旭川出身の川村カネト氏は、昭和初期に三信鉄道(三河川合 天竜峡)の測量と建設工事に測量技師・現場監督を務めた人物であった。

2000年から本格的に活動をはじめ、飯田線の臨時列車カルチャートレインで歌ったりした。同年11月に豊橋・豊川で初演をはじめた。その後、新城市での公演と続き、飯田出身の団員がいたことがきっかけで飯田でも公演した。

2007年には名古屋公演を行い、2008年の東三河公演では飯田や名古屋からの団員を交えて公演した。同年の旭川での公演も行うことができた。

また、飯田線沿線の三遠南信地域でさまざまなイベントにも積極的に参加し交流を行なっている。三遠南信自動車道開通に関連したイベントでも歌うことができた。

これまでは東三河地域や南信州地域(飯田)では公演を行なってきたが、まだ浜松をはじめとする遠州地域での公演を実現していない。三遠南信交流を促進するためにも、遠州の地元のみなさんの協力を得て浜松公演を実現したい。



飯田線車両の中で「線路がない歌」を歌う
(2000年～2008年カルチャートレイン)

過去の公演

2000年11月	合唱劇「カネト」初演 豊橋・豊川公演
2003年2月	新城公演
2004年4月	佐久間レールパークまつりにて
2004年～	イラクの子どもたちへの支援「平和を願ういのちの音楽会」毎年参加
2004年10月	飯田市天竜峡「天竜川総合学習館かわらんべ」野外公演
2006年10月	天龍村坂部での秋の風のコンサートに出演
2007年10月	飯田カネト合唱団主催の飯田公演、東三河から40人参加
2007年11月	名古屋公演、東三河、名古屋合同開催
2008年6月	東三河公演、飯田、名古屋からも参加し150人の舞台となる
2008年7月	旭川公演、旭川合唱団とともに200人の舞台。川村兼一氏も役者で参加

過去の公演

2008年11月	「全国うたごえ祭典in東京」で東三河、飯田、名古屋、旭川の仲間と合同で歌う
2009年6月	三遠南信交流ゆかりコンサートに飯田合唱団とともに出演(天龍村坂部)
2009年10月	飯田市竜丘小学校公演(飯田カネト合唱団)に東三河からも参加
2010年2月	浜松市佐久間「がんばらまいか佐久間女性の集い」で飯田合唱団と合同で歌う
2010年11月	飯田市浜井場小学校公演(飯田カネト合唱団)に参加
2011年5月	東日本大震災チャリティ公演で歌う(豊川市)
2011年10月	三遠道路開通前イベントで鳳来東小学校(三河川合)の子どもたち、飯田カネト合唱団とともに三遠道路上で歌う
2011年11月	鳳来東小学校の子どもたちと学芸会でいっしょに歌う
2012年5月	平和を願ういのちの音楽会で歌う(豊橋市)

報告 2

NPO 三遠南信アミ（浜松市中区）

中野 眞氏

三遠南信アミは、2000年からでNPOになったのは2005年からです。三遠南信地域のさまざまな魅力を発信する地域雑誌を発行してきたが、現在は休刊し、インターネットなどを通じて情報発信することは続けている。そして三遠南信地域に詳しい松田不秋氏の力によって交流をコーディネートしてきた。

最近の三遠南信アミの取り組みを紹介すると地域の歴史・文化や自然・風景などの素晴らしい魅力を紹介しているが、力を入れている活動は三遠南信の地域や人を元気にするために経済の循環を促すことである。地域や人が元気になるには都市と中山間地域がつながって経済が活性化するように必要がある。暮らしを支える元気の素は中山間地域の生産者が行っていることが認識され評価され経済的に充実すればモチベーションも高めることができる。

経済の循環を促すために「モノを動かす」「人を動かす」「きちんと伝える」ことをテーマにして活動している。「モノを動かす」という点は、生産者(農林漁業者・加工者)それを売ろうとする人、そして買おうとする人をつないでいくことを具体的に三遠南信地域の素晴らしいモノをもっと動かしていこうとする取り組みである。

「人を動かす」では、観光交流資源に人が訪ね滞在し癒やされる場としての三遠南信地域という考えで都市と中山間地域をつなぐことをもくろんでいる。豊橋や浜松だけでなく、名古屋や首都圏も視野に入れた地域まで想定している。

「きちんと伝える」では、情報をきちんと発信し地域資源や宝物を魅(見)せていくことも重要である。

現在は南信州の団体と連携して浜松市の軽トラ市参加や、既存店舗を活用したアンテナショップの開設、農家グループなどの高速道路のサービスエリア出店などをコーディネートする連携事業を開始した。

さらに今後の展開としてはインターネットなどを利用して事業者同士が集まり実際に取引が始まる機会を設けたい。三遠南信道・新東名高速付近の引佐地区で開催できればと考えている。



三遠南信地域の魅力を活かして、活性化する

- 1 モノを動かす**
 - 作り手と売り手と買い手をつないで、経済活性化
 - 「農と食」「森と木材」など
- 2 人を動かす**
 - 三遠南信地域の観光資源を活かす
 - 都市部と中山間地をつなぐ
- 3 きちんと伝える**
 - 地域の宝物を魅せる・伝える
 - 「歴史と文化」「自然や風景」に住民の思いとプロフェッショナルな人々の力を重ね合わせる

NPO法人三遠南信アミ 2

モノを動かす～三遠南信交流市場(BtoB)

三遠南信地域モノ(農)の事業者間の取引場

【概要】現代の道の道をつくる

- 三遠南信地域の農林水産物
- 事業者(農家・加工業者・流通業者)が持ち寄り
- 即時に交換する場づくり

【ねらい】

- 三遠南信地域は農の宝庫
- しかし、多品少量の物がないネック
- 真ん中に、集まってモノを持ち寄る場があれば解決するのは

【平成24年6月からの動き】

- 「南信州ここに」と連携
- 浜松まちなか軽トラ市へ南信州から出店、物産の販売
- 三遠南信アンテナショップとして「東江特産市場」を活用
- 浜松の農家グループ「ゆめ市」と南信州について、浜名湖SAで販売、売木のとろころし・松川のリンゴ...
- 浜松の農家が南信州で生産・南信州の農家が浜松で生産企画中
- インターネット上で、モノの情報を交流する場づくりチャレンジ中

◎ 三遠南信地域の産物が地域内で流通する(多品少量・農産物の仕分け)

◎ それぞれの地域の魅力があるモノが、足りない地域に届く

◎ 小売向けと地域経済の活性化につながる

◎ 地元の事業者が活躍できる

◎ 三遠南信道などインフラを活かせる

NPO法人三遠南信アミ 3

報告 3

㈱ネットワークうるぎ(売木村)

後藤俊文氏

2005年4月に毎年増え続ける荒廃地を少しでも減らして村を活性化させようと、団塊の世代を中心に5人のメンバーで有限会社を立ち上げた。当初は水田の耕作65アールから始めた。現在では1ターンのみなさんをはじめ、現在は十数名にメンバーが増えた。

我々が名付けたはざかけ米は、有機肥料を多用し減農薬で丁寧に育てた稲で、全苗はざかけで仕上げている。品種は、はざひかり(はざかけしたこしひかり)はざこまち(はざかけした秋田こまち)での2種類である。

お米だけでなく、トウモロコシの生産と販売もおこなっており、毎年5月に約4万5千本のトウモロコシを植え付ける。糖度18度のトウモロコシは、対面販売で試食をしてもらい味を納得してもらって購入してもらう。販路は愛知県内や浜松市まで拡大している。また最近ではうるぎ米240kgを使った焼酎(醸造は蔵元)を販売したり、干し柿作りにも挑戦している。

そのほか農業体験を受け入れ、「うるぎ米そだて隊」事業を毎年実施している。東京や大阪などの中学生や親子が申し込み、全7回スケジュールの売木村の通い、手植え・手刈りで稲作を体験してもらう。そだて隊を経験したOB・OGは「またきたい隊&てつだい隊」として応援に何度も売木村に訪れている。

これからは1ターンや定住を受け入れる為のはじめの一步として、長期滞在が出来る施設・環境を行政と共同で取り組みながら、人と人が、モノとモノが往来する村になるための、土壌づくりを今後も目指していく。



食の安全と旬の味を食卓に



- はざかけ米(はざひかり、はざこまち)
- 長野県エコファーマーの取得(有機、減農薬)
- 標高800メートルの高原の地の利(とうもろこし)

トウモロコシ販売 (ゴールドラッシュ)



うるぎ米そだて隊 全7回



報告 4

豊橋読書サークル連絡会（豊橋市）

長坂静子氏

飯田・豊橋読書交流会は 1997 年に豊橋読書会の役員が飯田市立図書館を訪れ、草の根の交流を提案し、



飯伊婦人文庫のみなさんが賛同したことに始まる。そしてその年に田原市伊良湖で文学探訪を兼ねた第 1 回目の交流が持たれた。これを契機に豊橋では個々に活動している複数の読書会が連携を密にしようと豊橋読書サークル連絡会が発足した。

交流会は第 1 回が講評であったことで 16 年間続く。そのなかで特に印象的であった交流会は、豊橋から南信州へ訪問したことで飯田から三河と遠州を案内し文化に触れたことであった。

豊橋読書サークル連絡会は、さまざまな交流を通してお互いの文化歴史に触れ、本を読んでいる「静」の活動から「動」の行動することで発展するできたことは大きなものであり、ふるさと再発見・郷土愛が増した。一方、飯伊婦人文庫は、豊橋読書サークル連絡会から影響を受けたことの 1 つとして、図書館まつりを参考に同様のイベントを飯田でも開催するようになった。これは交流し学び合った成果であった。こうした県境を越えた豊橋と飯田の交流は大きく評価されて賞を受賞することになった。これからは、高齢化が進み、若い世代の会員の獲得には工夫が必要である。山と海との交流によってお互いに学びあい励まし合って異文化を吸収し、それを 1 つの糧としてこれからも長く続けてゆきたいと思う。

報告 5

三遠南信地域を学ぶ会（豊橋市）

吉田和代氏

三遠南信地域を学ぶ会は、本年 2012 年で 10 周年を迎えた。本会は三遠南信地域の歴史・文化などに関心を持つメン



バーが集まり、豊かな地域資源を訪れ、学び、理解を深めようとするを目的に活動している。

10 年間の活動のなかで積み上げてきたものは、現地へ趣くだけでなく、人と人との心のつながりができたことである。その一番最初が 2006 年 5 月に東三河・遠州と南信州のメンバーが秋葉街道をめぐる青崩峠で交流した交流会であった。その年の 10 月には小川路峠でも同様の交流会を行ない、さらに交流を深めた。こうしたつながりによって飯田市上久堅小と豊橋市賀茂小の子どもたちが山本勘助のゆかりの地として交流を行うきっかけにもなった。

もう 1 つが天龍村坂部で行なわれているさまざまな活動に参加することで新たな出会いがあり、情報を得る場でもあった。はじめは南信州だけであったものが遠州にも広がっていった。

こうした交流を通じて各地を訪問するが、単なる観光ではなく必ず地元のみなさんと交流し、三遠南信地域が大好きになっている。我々の活動はまさに顔と顔、そして声と声でつながった結果であった。

三遠南信地域は広く、訪れたことのない地域が多く存在する。公共交通機関ではなかなか訪れることのできない遠い地域もあるため、移動手段が困難を強いられることがあり、この課題を解決する必要がある。

報告 6

遠州地方発！地域活性化プロジェクト 「ミナの森」(浜松市天竜区)

津ヶ谷寛奈氏

地域活性化プロジェクト「ミナの森」は浜松市天竜区水窪町にある廃校になった旧西浦小学校校舎を借り受け、地域活性化事業に活用するものである。将来的には山の再生まで視野にいたれたプロジェクトで、スタートしてから1年が経過した。

本プロジェクトを全国発信するために、まずは水窪を舞台にした映画「果てぬ村ミナ」を製作し、本年12月に公開する。

水窪は浜松中心部から75kmのところにあるが、この距離を埋めるにはここを求めてくる人を呼び込む必要がある。この企画を立て廃校を活用するにあたり地元の物産展などを考えていたが、都市部から中山間地域に人を呼び込む手段として水窪での映画づくりとなった。

地域づくりとしての映画づくりはロケ地ツアーとしてにぎわうが、長くて4年程度しかも持たないといわれる。そうならないためにも地域の貴重な財産といえる「方言」を使ったオリジナルキャラクターをつくり、それを活かしたアニメづくりもすすめている。映画、アニメ、廃校を3セットで考えていく地域活性化の取り組みである。

1年間いろいろやってみたがなかなか人が集まらないのが現状である。しかしこの映画を撮影したことで、ミナの森を利用した地元水窪の商店街のみなさんを中心に組織を立ち上げた。映画やキャラクターを用いた新商品づくりなどを行ない、もう一度まちを活性化しようという動きも出てきた。

ミナの森プロジェクトは三遠南信地域のみなさんとも連携しながら進めていきたい。



報告 7

祭り街道の会（阿南町）

伊東直幸氏

阿南町からはじまった祭り街道（国道151号線・遠州街道）と名付ける取り組みは、県境を越えて愛知県豊根村や東栄町まで拡大し、沿線に看板設置するなどして広く知られるようになった。そして祭りを通じて地域をつなぐ心の交流街道として位置づけている。

こうした動きのなかでクラインガルテン新野高原が開設された。宿泊と農園がセットになった滞在型市民農園で、地域のみなさんも加わり都市と農村の交流の場となっている。

阿南町は祭りが盛んなため施設利用者のみなさんには実際に祭りを見てもらって楽しんでもらい、自然が豊かさを満喫してもらっている。

また市民農園利用者のみなさんにはこうした1年間の楽しみをまとめた「ふるさと講座」を開き、さらに地域のことをより深く知ってもらう取り組みを行なっている。

祭り街道・国道151号線は三遠南信の地理的中軸であり、祭りが集積している。この地域の祭り文化を通して地域を守ることができるように頑張る必要がある。「祭りの衰退＝地域の衰退」ということであるため、そういうことにならないように三遠南信地域全体で血液の通った地域であってほしい。

祭り街道は、阿南町、豊根村、東栄町までしか呼称されていない。国道151号線全線までそう呼ばれるように多くもみなさんにご理解とご協力をいただければと思う。



第2部 意見交換会・フリーディスカッション



発表者と参加者との情報・意見交換などが行なわれた。

進行 / 水島氏 (NPO 三遠南信アミ)

続いて参加者の中からこうした活動を実践している団体を紹介する。

鞍掛山麓千枚田保存会・小山氏

新城市四谷にある千枚田の保存活動を始めてから 22 年間になる。現在では年間 2 万人を超える来訪者があるが、この活動は経済的なことを無視した活動である。ふるさとを守る力があればそれでいいと思う。都市部からの来訪者においしい空気を提供し喜んでもらえばいいと思う。その結果、三世代を通してこの中山間地域へ訪れるようになった。四谷へ訪れた方は住民セッションに参加したみなさんのところにも訪れているはずだからつながりができている。こうして地域を発信して行くことでつながりができるはずである(情報誌「四谷の千枚田だより」を毎月発行)。

高森町茗荷村を考える会・大石氏

障がい者福祉の活動を行なっている。知的障がい者教育の実践経験から福祉や社会のあるべき姿を世に問うた映画「茗荷村見聞記」を上映し、茗荷村の取り組みを学び理解を深め、障がい者の人たちも一般の社

会で生活できる環境をつくってほしいという思いで活動している。こうした活動に興味のある方と交流をしていきたい。

閉会あいさつ

木下利春氏

(三遠南信住民ネットワーク協議会世話人)

今回の住民セッションは南信州で開催が予定されている。これまでは年度が替わり、空白の時間において本番までの 3

~4 ヶ月という短期間で準備を行なってきた。しかし、2012 年 6 月 1 日に三遠南信住民ネットワーク協議会が設立され、住民セッション翌日から次回の準備に向けた動きを試みるようにした。

協議会設立後から南信州と遠州・東三河との連携事業が動き出した。南信州には海のモノ、遠州には山のモノを販売するアンテナショップを開設した。

本日の発表にもあったように交流・連携が継続していることが分かった。これも先人の力が合ってこそなしたことで、これからはその意志を我々が引き継ぎ、つないで形にしていくことになる。

それに関わることとして中山間地域がどのように生き残っていくかという問題が残るが、人と人とのつながり、モノとモノのつながり・流れをどのようにしていくか、これらの課題を 3 年間くらいかけて取り組んでいきたい。ここには物流、福祉、観光、地域資源、ビジネス、生き方などすべてが関わっている。

来年に向けて東三河・遠州・南信州が協力して住民セッションや三遠南信住民ネットワーク協議会を盛り上げていくことができればと思う。



三遠南信住民ネットワーク協議会設立趣意書

三遠南信地域の中で、地域のためのさまざまな活動を続ける住民団体、または地域に関心を持つ個人は、これまでそれぞれの地域での活動を展開しつつ、一方では団体間の交流や連携の必要性を感じ、その方法や機会を模索してきました。

そのような中で、2005年に浜松市で開催された第13回三遠南信サミット2005 in遠州に「住民セッション」が設置されて以来、このセッションの場を利用しての交流や連携、議論の場を設ける努力を続けてまいりました。

しかし、このままでは全く不十分であると同時に、議論を進める中から新たな課題も登場してきました。それらは以下のように整理することができます。

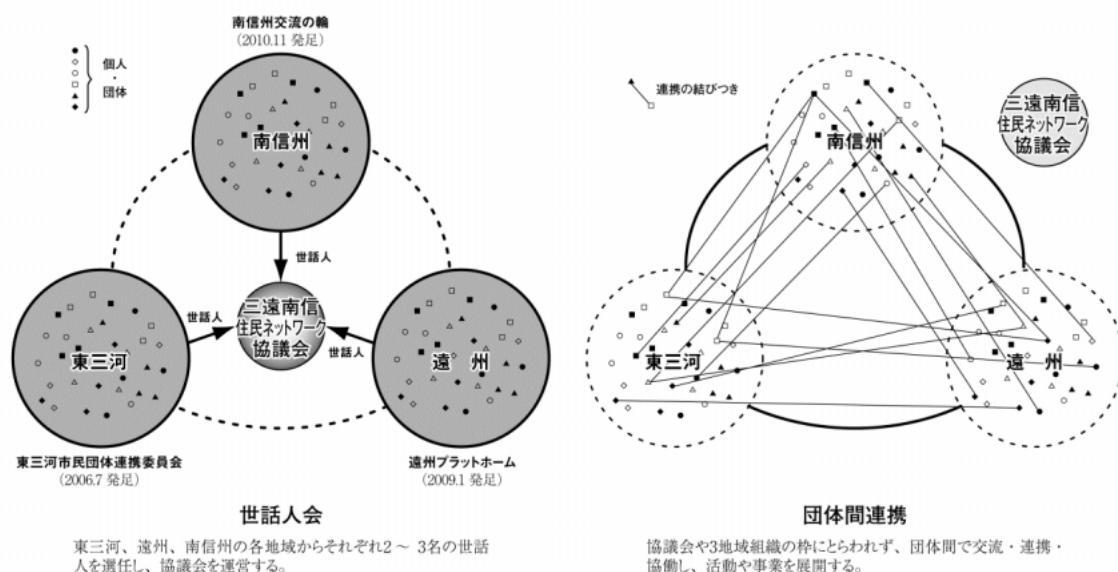
1. 三遠南信という広域での交流・連携をさらに効果的に進めるために、相互間をつなぐための「機能」が必要となる。
2. 交流・連携にとどまるのではなく、活発な議論の中から「新たな事業」を積極的に生み出してゆけるような「体制」をつくる必要がある。
3. さまざまな成果をより明確に、かつ広く訴えてゆくことができる「力」を生み出してゆく必要がある。

これらの課題を解決するためのものを「プラットフォーム」という言葉で表してもきましたが、その実質的な役割を果たしていくために、新たに東三河・遠州・南信州を機能的につなぎ合わせる新たな組織をつくり、積極的に運営を図っていかなくてはならないと考えます。

よってここに、新しく「三遠南信住民ネットワーク協議会」を設立し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）と協力を図りながら、広く参加を呼びかけていくことを提案します。

2012年6月1日

三遠南信住民ネットワーク協議会設立発起人一同



協議会運営体制(世話人会)と団体間連携のイメージ

2012年活動計画

三遠南信住民ネットワーク協議会は、組織の体制を整えつつ、よりよい連携を図りながら会員の活動を活発化させるために以下の活動を計画する。

1. 世話人会の開催

協議会の円滑な運営を推進していくために、世話人会を適宜開催する。

2. 活動のマッチングの場づくり

会員の活動や抱える課題を把握し、三遠南信地域の「連携」と「協働」を進めるための仲間探しの場「大交流会（プレゼンテーションフォーラム）」を開催する。

3. 連携プロジェクトの推進に向けた検討・提案

地域の抱える課題の解決策を検討し、具体的な連携プロジェクトを提案する。また、それらの提案の中から、地域の行政や経済団体等に対して地域の課題解決やプロジェクトの支援などの提言活動を行う。

4. 会員相互の情報交流

三遠南信地域の動きや会員の活動を互いに紹介できるようメーリングリスト等を開設し、会員が自ら情報発信し、相互の交流と連携を支援する。

5. 三遠南信サミット住民セッションの企画・運営

幹事地域が中心となって、三遠南信サミット住民セッションの企画を行い、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）と調整をしながら、同住民セッションの運営を行う。

6. 「三遠南信」ここが楽しい事典シリーズの発行

2012年3月までに全5巻を順次発刊（三遠南信ここが楽しい事典シリーズ編集委員会編集）する。三遠南信地域の特色を広く、多くの人たちに伝えるために冊子のPRや販売促進活動を行う。

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、豊橋市長がサミット宣言を行った。また、飯田市長が次回開催地域を代表してあいさつをした。

「道」分科会 豊橋市長 佐原光一

それでは私のほうから、「道」分科会の内容を報告させていただきます。

今回は、新東名高速道路、三遠南信自動車道路など、三遠南信地域連携ビジョンに掲げました交通基盤の整備が着々と進みつつある現状を踏まえまして、今後、さらなる展開を図ることを目的に「県境連携を促進する地域基盤整備の状況と展望」というテーマのもとで、議会、経済界、住民団体、行政が実際に交通基盤を使用する立場から、奇譚のない意見を交わすことといたしました。

分科会の参加者からは、新東名高速道路の開通、三遠南信自動車道における浜松いなさ北ICから鳳来峡ICの間の供用開始、飯橋道路1工区の開通、国道23号名豊道路の進捗などの広域交通基盤の整備がもたらす産業、観光、防災、生活など、さまざまな分野での数多くの具体的な方向が報告されました。ちょうど浜松河川国道事務所の天野所長のプレゼンの資料にもありましたように、道路がつながることによっての地域の皆様の笑顔が目当たりに浮かぶ、そのような発表がたくさんされた、そういう発言がたくさんあったことが大変大きな印象でございました。

また、浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路（伊勢湾口道路）などのネットワークをさらに拡大する交通基盤整備の必要性につきましても活発な議論がなされたところでございます。一部がつながるだけでも地域の振興に大きな効果があることが確認されたことで、早期全線開通への地域の期待はますます高まりを見せており、これまで以上に地域が一体となっ

て、広域交通基盤の整備促進に取り組んでいかなければならないという認識を共有いたしました。

これらの意見を、大きく三つのポイントにまとめて整理をさせていただきます。

まず1点目といたしましては、三遠南信自動車の整備により東名高速道路、新東名高速道路、浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路（伊勢湾口道路）さらには将来的にはリニア中央新幹線が連絡することで広範なネットワークが形成され、そのつながりがさまざまな交流を生み出すこと。

2点目といたしましては、三遠南信地域の産業のさらなる活性化に向け、地域と地域を結び、海外へとつなげるためにも三河港、御前崎港といった港湾へのアクセス向上が必要なこと。

3点目といたしましては、東日本大震災で高規格幹線道路が大きな効果を発揮しましたように、医療機関への搬送路や災害時における緊急輸送路となる命をつなぐ道として、ミッシングリンクとなっている三遠南信自動車道路の整備が大切なこと、こうした地域からの意見を実現するためには、各期成同盟会等による要望活動やキャンペーンを今後も継続的に行うとともに、県境を越え、これまで以上に地域が一体となって広域交通基盤の整備促進に取り組む必要があるということを確認いたしました。

以上をもちまして、「道」分科会の報告とさせていただきます。参加されました皆様方、本当に真摯な声を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

「技」分科会

㈸サイエンス・クリエイト 白坂常務取締役

それでは、「技」分科会からの報告です。

分科会は、行政から2名、経済界から8名、大学から1名、そして住民団体2名、報告者2名、合計15名で行われました。

今回のテーマは、「地域産業の持続的発展を目指した新産業創造と人材の育成」でございます。これに関する議論の内容を報告させていただきます。

最初に、豊橋市の瀧川産業部長から、三遠南信発イノベーション創出を目指した産学官・地域間連携による取り組みについてご報告をいただき、また、SENA事務局の金原事務局長より、三遠南信地域での社会雇用創造事業についての取り組みにあわせて報告をいただきました。その後、新産業創造への取り組み、あるいは既存産業へ活力を与える取り組みについて、各地域での動きについて報告、意見交換を実施致しました。次に今回のメインテーマであります「地域産業の持続的発展を支える新産業創造と人材の育成」の「人材育成」につきまして意見交換を行い、最後にこういった課題解決に向けて、大学など教育機関と連携して取り組みたいこと、教育研究機関に期待することについて議論を深めました。

その中で産学官連携推進協議会の取り組み、産業界と大学のミスマッチを解消するために、大学に相談窓口を設置する等のご提案、三遠南信地域全体で求める人材を明確にして、産学官が協働して地域全体で取り組む必要があり、そのためにSENAで産学官での議論の場を設ける必要があるのではないかという報告がありました。

最後に、大学側からのご意見として愛知大学佐藤学長より、教育面での産学官連携をさらに深めて、関係者間で議論の場として円卓会議の開催が必要であろうとの報告がなされました。

これらの議論を取りまとめますと、大きく以下の3点に集約されると思います。

1番、各構成員の取り組みとして、国内外から三遠南信地域に人、物、金が集まるような魅力のある新産業及び環境の創出、蓄積を図るこ

と。

2番、これを、さらに持続的に発展拡大するために必要な人材を育成する必要があり、そのために県境連携、大学、行政、企業、市民団体の連携という点から仕組みづくりを検討する必要があること。

3番、これら環境を創出する取り組みの一環として、SENAの事業で産学官金による議論の場として円卓会議を実施していくことでございます。以上で、「技」分科会の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

「風土」分科会

財団法人阿智開発公社 羽場理事長

「風土」分科会のセッションの様子をご報告させていただきます。

今回の取り組みは、ご当地グルメを通じた三遠南信の発展、風土の中で、特にグルメに絞っていかに地域を活性化していくか、ネットワークしていくかということを議論させていただきました。

最初に、基調報告として豊川市の観光協会副会長の笠原様から、大変ユニークな取り組みをご報告いただきました。これがおもしろいのです。「いなり寿司で豊川市をもりあげ隊」というグループの活動ということでございました。こういった町おこしのポイントは、まず市民運動があって、それを例えばNPO等、あるいはさまざまな法律の助け、あるいはそういったところの規制を上手に利用しながら団体化して、そして市民運動と行政との協働によって盛り上げていくことが重要なのではないかというご報告をいただきました。つづめますと、行政力掛ける市民力掛ける地元の企業力が町おこしのポイントであると、こういう基調報告でございました。

その後、各SENAの地域でどのような取り組みがあるのかということの紹介、工夫している点も紹介いただきました。また、今後の方向性等について意見をいただきました。

ゆるキャラグッズ、そういったイメージ商品、イメージキャラクターも非常に大きな力を発揮する。商品だけではなくて、例えばグッズや

キャラクターによる派生効果も大きいのだというご指摘。インターネットを使った情報発信が当たり前であるけれども、それだけではだめで、デジタルも必要だしアナログも必要だと、それからSENAとしてのまとまった戦略が必要であろうというご指摘。ネットワークを活用していくことの大切さ、しかもそれもインターネットだけではなくて、フェイスブックとかツイッターとか、さまざまな今の若者たちが多用しているものにもアプローチしていく必要があるというご指摘などをいただきました。

まとめといたしまして一つ目は、情報発信力をつけていくことが大事であるということでございます。これは、B-1グランプリ等のイベント、それからフェイスブック等の新しい情報戦略等々でございます。それから、従来の丁寧な口コミといったものが必要であろうと、情報戦略でございます。

二つ目です。民間と行政、それから、それ以外のさまざまなセクターとネットワークをつくって強固な情報網をつくっていくこと、これが大事であるということでございます。

三つ目でございます。三遠南信地域の基盤をつくっていくために地域ブランドをつくっていく、そして、それをさまざまな産業に広げていく、そうした中の一つとしてフードの戦略が成り立つのであろうと、こういうことでございます。

以上、「風土」の分科会の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

「山・住」合同分科会

豊橋技術科学大学 大貝教授

それでは、「山・住」分科会の報告をさせていただきます。

今回のテーマは、「中山間地域の生活環境向上に繋がる、人・ものの交流促進」というテーマで、意見交換をさせていただきました。

最初に、大平様より「農家民宿くま遊楽亭」のお話をいただきました。それに続いて、参加者の皆様からいろいろなお意見をお伺いいたしました。大きく議論は、三つに分けて行われました。

まずは最初に、それぞれの団体で取り組まれている事例についてご報告いただきました。それから続いて、この三遠南信地域の魅力、あるいは資源といったものについて改めて、特に中山間地域ですが、確認をするということで、それぞれ意見をいただき、最後にこういった資源、あるいは魅力を生かして、どのように交流の促進に結びつけていくかということで、その方策ということでご意見をいただきました。

一つは、三遠南信自動車道の一部供用開始、新東名が開通した。これによって確実に交流は促進しているということが、それぞれ報告者の方から報告されたということであります。つまり基盤整備が、交流を拒んでいる時間的な制約を確実に取り除いているということが確認できたと思います。

続いて資源、あるいは魅力といった点についてですけれども、資源を生かす、あるいは魅力を高めていくということの大切さを、もう一度改めて再認識したかと思えます。

もう一つ、交流という言葉の意味について、交流という意味は交流人口という、いわゆる観光客、観光で交流人口をいかに増やすかという意味と、もう一つは、この地域の中での人的な交流をいかに高めていくかという、大きく二つの意味があるということ、再認識させられました。交流人口を増やすこと自体重要なことですが、そういう中でどうやって中山間地域の生活を維持していくかという、そこに住む人々の交流といいますが、この地域、三遠南信地域の中での交流をいかに大切にしていくかということ、つまり、この地域に住む人たちの誇りを生むような交流が大切なのではないかということを考えさせられました。

もう1点は、交流という意味で、人を呼び込むという意味で、この交流によって地域の人、ここに住んでいる人は当たり前とされていることが、実は当たり前でないということ、交流から気づかされるという、これは非常に大切な点ではないかなと思いました。

幾つか重要な点が出ました。最後の交流の促進策、あるいはこの交流を生活環境の向上に結びつける、これからの広域連携の体制について

議論し、その中で出てきた意見として、まずは自分たちがこの地域を再認識するということから始まるだろう。余り無理をせず、できることから自然体でやればいいのか。ただし、その思いは持ち続けながらやるのが大切だろうという意見でありました。具体的な方策の一つとして、若い力を生かす、大学連携も、一つのこういう中山間地域の交流を促進する重要な方策ではないかということが意見としてありました。

最後ですが、中山間地域の暮らしを守るという意味では、やはり防災を考えないといけない。近年、特に中山間地域での集中豪雨による土砂災害等、頻発しています。そういう意味でも、広域連携による防災体制を考えるということは重要なことであるということです。

以上のような意見交換を通しまして、最後までめとして、三つの点を確認いたしました。

1点目が、三遠南信自動車道、あるいは新東名といった道路基盤整備が、確実に交流を促進させているということは疑いのない事実であるということ。こういった点を踏まえて中山間地域の生活環境向上のための方策を、今後、検討していく必要がある。ただし基盤整備が、逆に過疎化を促進させるという側面も否めないというご指摘もありました。ここについては、注意を払いながら進めていく必要があると思います。

2点目ですけれども、これは情報発信です。この地域の持つ魅力的な地域資源を、この圏域内外にもっともっと発信していく情報発信の体制を整備する必要があります。

最後、3点目ですが、これは三遠南信県境を越えた防災体制の強化、これについて、この地域の中で相互に連携していくという、この3点について最後に確認させていただきました。

以上で、報告を終わります。どうも、ありがとうございました。

サミット宣言 豊橋市長 佐原光一

第20回三遠南信サミット in 東三河では、「第20回記念サミット 三遠南信の歩みと未来～県境連携の先駆けとしての地域創造～」をテーマとし、「道」、「技」、「風土」、「山・住」の各分科会において基盤整備の進捗に伴う事業展開など、具体的な事業に絞り、現状の課題や今後の展開に必要な取り組みについて議論をしました。私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議「SENA」は、未来に向け、本日のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、県境連携の先駆けとしての自負を胸に地域創造に邁進いたします。

1、三遠南信自動車道の一部供用開始に伴い、救急・防災体制の充実、産業・観光活動の活発化など、効果が実感されています。早期全線開通への地域住民の期待は一層高まっており、現道活用区間の整備など、ミッシングリンクの解消が必要であることを確認しました。圏域の一体的な発展のため、三遠南信自動車道の早期全線開通、浜松三ヶ日・豊橋道路の整備、さらにリニア中央新幹線の早期開業、三遠伊勢連絡道路の実現を目指し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心とし、地域一体となった提言活動等を進めます。

2、地域の強みである既存産業の高度化と産業基盤を生かした新産業の創出を目指すため、三遠南信地域基本計画や地域イノベーション戦略推進事業、国際競争力強化地域による広域連携、産学官金連携をより一層強化し、オープンイノベーションによる研究開発の促進、海外市場を意識した販路開拓、人材育成を推進します。また、三遠南信地域内の大学連携に産官金との連携も加え、各界の代表者による議論の場を設けるなど、人材育成等について引き続き検討していきます。

3、道の駅エコミュージアムを構成する自然・歴史・文化・産物など、地域資源の保全、発掘、活用事業に取り組む民間団体との連携を図るとともに、三遠南信地域の情報発信力を高め、地域固有の商品、サービスの提供により、三遠南信地域における持続的な観光客誘致を促進します。

4、中山間地域の生活環境の向上及び上・下流定住施策の推進のために必要な人・物の交流、連携を図るとともに、情報発信体制の整備を進めます。また、安全・安心な地域の形成に向け、広域的、また局地的に発生する地震や台風等の災害に対応するため、県境を越える防災体制の強化について相互連携して取り組み、防災力の向上を図ります。

5、三遠南信地域連携ビジョン推進会議の新連携組織については、官民連携組織である現在の組織の体制強化を図るため、大学、住民団体など、他団体との連携強化や平成28年度を目途とした広域連合設置に向けた検討を含め、専門委員会として設置した新連携組織検討委員会において鋭意協議を進めます。

これらの取り組みをここに集うすべての主体が確認し、第20回三遠南信サミット2012 in 東三河のサミット宣言といたします。

平成24年10月2日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット2012 in 東三河

○次回開催地域あいさつ

飯田市長 牧野 光朗

それでは、次回開催地になります南信州地域を代表して、一言ごあいさつを申し上げさせていただきます。

本日は、このように3圏域の多くの皆様方がご参集のもと、三遠南信サミット in 東三河が盛大に開催できましたこと、本当にありがたく、またうれしく思うところがございます。これも佐原市長始め、東三河の皆様方、実行委員の皆様方、本当に周到なご準備をしていただいたたまものと厚く御礼を申し上げる次第でございます。本当にありがとうございました。

さて、基調講演の大西先生のお話にもありましたように、私たちの地域を取り巻く環境は大きく変化をしているわけがございます。特に、東日本大震災以降、まさに私たちのこの時代というものは震災前、震災後という、そうした言われ方を今後していくのではないかと思えるほど、人々にとって大きな価値観の変化をもたらしたのではないかと思うところがございます。とりわけ、昨年の漢字一文字に「絆」という文字が選ばれたという報道もありますように、人と人との結びつき、あるいは人と地域の結びつき、地域と地域との結びつきということに、価値観が置かれるようになってきている、そうした時代がやってきていると改めて思うところがございます。

そうした中で、まさに地域と地域の結びつきという中で、全国的に先駆けた動きをしております三遠南信圏域におきましては、いよいよ三遠南信自動車道の整備が進んできているところであります。これから、浜松三ヶ日・豊橋道路をはじめとしたこの圏域の道路が、さらに促進されようということを今回も確認ができたと思えますし、また15年後に控えておりますリニア中央新幹線の飯田新駅におきましても、来年は、い

よいよルート駅位置等も確定をしていくことが見込まれているところがございます、三遠南信の北の玄関口も確実に見えてくるという状況ではないかと思えます。

こうしたハード面の結びつきというものがあるものになってきますとともに、やはり今日もそれぞれの分科会でお話がありましたように、ソフト面でもしっかりと結びつきを強めていかなければならないということに改めて思ったところがございます。特に、いよいよ目標年次も示されましたが、平成28年度の三遠南信の広域連合設置に向けた検討が本格的に始まるという中で、この地域における私たちのそれぞれの役割というもの、もう一度確認し、そしてまた来年、南信州におきまして、この結びつきをどのような形で具体化していくかということについて、それぞれの思いをすり合わせていく、そうしたことができるようなサミットにしていくことができればと思うところがございます。

終わりになりますが、この三遠南信サミットをお支えいただいておりますすべての皆様方に感謝を申し上げ、私からのあいさつとさせていただきます。

本日は、ありがとうございました。

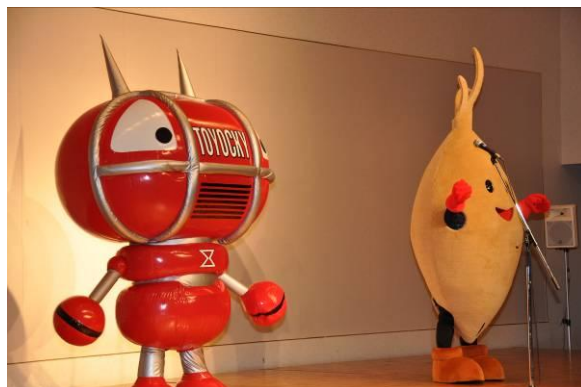


11 交流会

San-En-Nanshin Summit 2012 in Higashimikawa

交流会では、三遠南信地域の観光連携の一環として豊橋市・飯田市・浜松市の観光PRブースが設置されたほか、「地酒サミット」コーナーが出展され、試食・試飲や販売が行われた。また、「ええじゃないか豊橋伝播隊 DOEE」によるパフォーマンスが行われた。

■ 交流会の様子



■ 観光連携事業



■ 三遠南信地酒サミット



■ パフォーマンス



第20回三遠南信サミット2012 in東三河
平成24年10月2日開催
三遠南信地域連携ビジョン推進会議(SENA)
